The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大阪大学・京都大学　公共圏における科学技術　活動報告2019
Author(s)	公共圏における科学技術・教育研究拠点
Citation	大阪大学・京都大学　公共圏における科学技術　活動報告2019. 2020, p. 1-115
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89260
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

科学技術イノベーション政策における
「政策のための科学」基盤的研究・人材育成拠点

大阪大学・京都大学

公共圏における科学技術

活動報告
2019

STiPS 公共圏における
科学技術・教育研究拠点（STiPS）
Program for Education and Research on
Science and Technology in Public Sphere [STiPS]

目次

はじめに：なぜ、今、「公共のための科学技術政策」が必要なのか 1
- 公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）について 2

1. 教育プログラムの実施 6
- 大阪大学の取組 6
- 大阪大学 特色ある授業 12
- 京都大学の取組 14
- 京都大学 特色ある授業 18
- 合同講義 19
- 阪大学生の声 25
- 京大学生の声 27
- STiPS 修了生ワークショップ 29

2. プログラム推進委員会の運営 32
- 実施体制 32
- アドバイザー会議 33
- カリキュラムの発展及び拡充 33
- 研究会やイベント開催の企画及び調整 34

3. SciREX 事業への参画 40
- サマーキャンプへの参画 40
- 政策のための科学オープンフォーラムへの参画 44
- 他拠点への講師派遣 45
- コアコンテンツ作成、行政官研修への講師派遣 45

4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施 48
- 阪大拠点主催：「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会） 49
- その他 76

5. 共進化実現プロジェクトの実施 82
- 新興・融合科学領域における「予見・分析手法」の検討と人的ネットワークの形成 82
- 国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構（JAXA）の歴史・現状・未来像に関する研究 83

6. 関西ネットワークの発展 86
- ナレッジキャピタル超学校シリーズ 86
- サイエンスカフェ＠千里公民館 90

7. 国際連携の推進 94
- 国際連携 94
- 海外調査及び発表等 94

8. STiPS 参画教員による活動リスト（研究業績等） 96
- 大阪大学 96
- 京都大学 102

はじめに：なぜ、今、「公共のための科学技術政策」が必要なのか

「この論争は安全性に関するものではなく、どのような世界に生きたいと欲するかという、はるかに大きな問題に関するものである。」(Select Committee on Science and Technology 2000)

この一文は、英国で 1990 年代末に過熱した遺伝子組換え作物（GM）論争の教訓として英国政府がまとめた報告書のものです。

現代社会における科学技術政策は、社会の駆動力としての科学技術のあり方を形成する重要な政策となっています。一方で当然のことながらその政策は、科学技術の研究者集団のための振興策に尽きるものではありません。この点は、科学技術政策を「社会及び公共のための政策」の一つと位置づけた第 4 期科学技術基本計画（2011 年）においても前提とされており、社会的課題に対応した科学技術政策の形成が必要とされています。つまり、これからの科学技術政策は「どのような世界に生きたいと欲するか」という問いに答えるものでなければならないのです。

また科学技術政策を進めるにあたっては、「客観的証拠（エビデンス）」に基づいた「政策のための科学」が整備されるべきであることは言うまでもありません。しかしそれと同時に、そのような「政策のための科学」が、ともすれば客観的証拠を論文引用数や経済指標など「定量化可能なデータ」に限定した営みになることも私たちは懸念しています。

英国の GM 論争の事例は、定量化可能なリスクに基づく安全性の説得という政策的対応が、問題の解決に至らなかったという反省を示しています。決定的に欠落していた視点は、世の中の人々が、科学技術や公共政策に何を期待し、何を懸念しているか、どのような世界に生きたいと欲しているのか、といった社会の期待と懸念を把握することであり、これは統計的世論調査のような定量的方法だけで把握することは困難です。そのために必要なのは、研究者コミュニティや産業界、政策立案者のみならず、一般の市民も含めた多様な人々や組織・集団が、直接・間接に議論し、熟慮を深め、自ら期待と懸念を顕在化し共有していく参加・関与・熟議のプロセスであると私たちは考えています。本拠点では、これを「科学技術への公共的関与（public engagement）」と呼んでいます。

大阪大学および京都大学の連携による本人材育成拠点で重点を置くのは、「科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）」に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策･社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材、言い換えるならば「科学技術への公共的関与」を促進する人材の育成です。

こうした公共的関与は、政策形成の初期の段階（アジェンダ形成段階）を含む各段階で、一般市民を含む多様なステークホルダーが参画・関与する公共的関与の活動と分析を行い、そこから社会的課題（期待や懸念、問題）を発見・特定し、政策や研究開発の立案・計画、テクノロジーアセスメントや社会的な合意形成等に反映させていく必要があります。そこで重要なのは、科学者・技術者の側が何を問題とし何をしたいかのみならず、社会の側が何を解決すべき問題と考え、科学技術に何を期待し、何を懸念しているかを把握することです。

そのためには、自分の専門分野の枠組みを超えて、広く俯瞰的・多角的に科学技術と社会の諸問題・課題を洞察・理解し、かつ公共的関与の活動と分析を行えるような知識とセンス、実践的な能力を備えた人材の育成が急務であると考えています。

STiPS 代表　小林傳司（大阪大学）

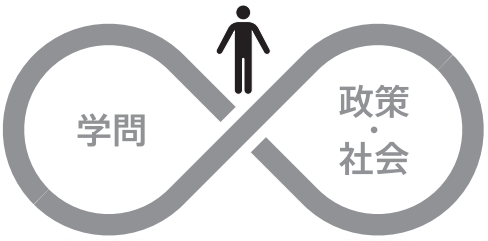
公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）について

「公共圏における科学技術・教育研究拠点（Program for Education and Research on Science and Technology in Public Sphere：STiPS）」は、大阪大学および京都大学の連携による人材育成プログラムです。文部科学省の科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業の一環として、2012 年 1 月に発足しました。なお、同推進事業には 5 拠点が採択されており、有機的な拠点間連携を通した人材の育成を目指しています。

STiPS では、科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究と教育を行い、政策形成に寄与できる「政策のための科学」の人材育成を進めています。

教育拠点としての STiPS

STiPS では、科学技術や公共政策に対する社会の期待と懸念を把握するために、研究者コミュニティや産業界、政策立案者のみならず、一般の市民も含めた多様な人々や組織が、直接・間接に議論し、熟慮を深め、自ら期待と懸念を顕在化し共有していく参加・関与・熟議のプロセスが必要と考えています。



こうした「科学技術への公共的関与（public engagement）」に関する活動と教育を行うことにより、自分の専門分野の枠組みを超えて、多角的に科学技術と社会の諸問題を理解し、学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材の育成を目指しています。

研究拠点としての STiPS

STiPS では、政策形成における公共的関与の活動と分析をより効果的にするために、大阪大学と京都大学の連携により、幅広く科学技術の研究現場の動向を踏まえつつ、科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究を行います。また ELSI に関する研究を基盤として、テクノロジーアセスメントなどの公共的関与の活動と分析を行うことにより、公共的関与に関する理論的かつ実践的な能力を備えた人材育成を進めています。

実践拠点としての STiPS

STiPS では、大学の知と社会の知をつなぐ「社学連携」の実践と、そこに学生が主体的に関与することも含めた教育を実施します。大阪大学・京都大学は、関西圏の経済界や地域行政との関わりも密接であり、科学技術を通じた連携・交流が極めて盛んです。これに加えて、一般市民や NGO/NPO など市民社会の公共的関与活動への参画を促進することにより、地域社会のニーズや事情、課題をより的確に反映した科学技術イノベーション政策や研究開発の立案・企画に貢献しています。

主要メンバー一覧（2020 年 3 月現在）

大阪大学			
小林 傳司	大阪大学COデザインセンター	教授	科学哲学、科学技術社会論
山中 浩司	大阪大学大学院人間科学研究科	教授	科学社会学、医療社会史、医療社会学、技術社会学
加藤 和人	大阪大学大学院医学系研究科	教授	生命倫理、医学倫理、科学コミュニケーション論
瀬戸山 晃一	大阪大学大学院法学研究科・高等司法研究科	客員教授	法と医療・生命倫理、法理学、法哲学、行動心理学的「法と経済学」
平川 秀幸	大阪大学COデザインセンター	教授	科学技術社会論
岸本 充生	大阪大学データビリティフロンティア機構	教授	リスク評価、社会経済分析
神里 達博	大阪大学COデザインセンター	客員教授	科学史、科学技術社会論
八木 絵香	大阪大学COデザインセンター	准教授	科学技術社会論、ヒューマンファクター研究
中村 征樹	大阪大学全学教育推進機構	准教授	研究倫理、科学技術社会論、科学技術史、科学コミュニケーション
渡邊 浩崇	大阪大学COデザインセンター	特任准教授	国際政治学、外交史、宇宙政策、宇宙法
辻田 俊哉	大阪大学COデザインセンター	講師	国際政治学、国際安全保障論
工藤 充	大阪大学COデザインセンター	特任講師	科学技術社会論、科学コミュニケーション論
水町 衣里	大阪大学COデザインセンター	特任助教	科学コミュニケーション論、科学教育
小林 万里絵	大阪大学COデザインセンター	特任研究員（非常勤）	
鍛治 一郎	大阪大学COデザインセンター	特任研究員（非常勤）	国際政治学、外交史
若林 魁人	大阪大学COデザインセンター	特任研究員（非常勤）	

京都大学			
川上 浩司	京都大学大学院医学研究科	教授（ユニット長）	薬剤疫学、医療技術評価、レギュラトリーサイエンス
小山田 耕二	京都大学学術情報メディアセンター	教授（副ユニット長）	可視化
依田 高典	京都大学大学院経済学研究科	教授	応用経済学
カール・ベッカー	京都大学学際融合教育研究推進センター	特任教授	倫理学、ターミナルケア、死生学
末松 千尋	京都大学経営管理大学院	教授	IT、事業創成
富田 直秀	京都大学大学院工学研究科	教授	医療工学、 QOLデザイン
中山 建夫	京都大学大学院医学研究科	教授	健康情報学、疫学、ヘルスコミュニケーション
二木 史朗	京都大学化学研究所	教授	薬学、生体機能化学
佐野 亘	京都大学大学院人間・環境学研究科	教授	政治理論、公共政策
岩下 直行	京都大学公共政策大学院	教授	フィンテック
宮川 恒	京都大学大学院農学研究科	教授	農薬化学、天然物化学
吉田 恭	京都大学経営管理大学院	特定教授	都市計画、まちづくり
伊勢田 哲治	京都大学大学院文学研究科	准教授	科学哲学、倫理学
大手 信人	京都大学大学院情報学研究科	教授	生態系生態学、森林水文学
広井 良典	京都大学こころの未来研究センター	教授	公共政策、医療・社会保障、持続可能な福祉社会
宮野 公樹	京都大学学際融合教育研究推進センター	准教授	大学論、学問論、政策哲学
田渕 敬一	京都大学iPS細胞研究所	准教授	科学技術・イノベーション政策
関根 仁博	京都大学経済研究所	特定准教授	科学技術・イノベーション政策
市川 正敏	京都大学大学院理学研究科	講師	生命現象の物理、ソフトマター物理
井出 和希	京都大学学際融合教育研究推進センター	学融合フェロー	薬学、疫学、社会医学
祐野 恵	京都大学学際融合教育研究推進センター	特定助教	公共政策、地方自治、地方議会

1. 教育プログラムの実施

1. 教育プログラムの実施

大阪大学の取組

大阪大学　大学院副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」・大学院等高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」概要

STiPS では、科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究と教育を行い、政策形成に寄与できる「政策のための科学」の人材育成を進めています。大阪大学 CO デザインセンター（2016 年 6 月までは大阪大学コミュニケーションデザイン・センター）では STiPS の教育プログラムとして、2013 年 4 月より「公共圏における科学技術政策」という大学院副専攻プログラムを提供しています。

大学院副専攻プログラム制度は、大阪大学が 2011 年度から始めたものです。これは、所属する研究科（主専攻）と異なる視点、学際的な視点、俯瞰的な視点といった複眼的視野の涵養のため、教育目標に沿って、主専攻に準ずるまとまりのある高度な専門的素養又は幅広い分野の素養を培うための大学院生に特化したプログラムです。プログラムに定める修了の要件を満たすことで、副専攻プログラム修了認定証が授与されます。副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」の修了には、必修科目 6 単位および選択科目 8 単位以上の計 14 単位以上の修得が必要です。

副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」は、「科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）」に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材、言い換えるならば「科学技術への公共的関与」を促進する人材の育成を目指しています。自分の専門分野の枠組みを超えて、広く俯瞰的・多角的に科学技術と社会の諸問題・課題を洞察・理解し、かつ公共的関与の活動と分析を行えるような知識とセンス、実践的な能力を学ぶためのプログラムを用意しています。

キャリアパスとしては、主専攻の専門性を中心としつつ、さらに「政策のための科学」の素養を備えた人材として、大学、研究機関、企業などに就職することが想定されます。また、地方及び国の行政、政策秘書、シンクタンク、研究大学の研究戦略（research policy）担当者、様々なセクターのリスクコミュニケーション人材としての活躍も期待されます。

本副専攻プログラムは、全国 5 拠点（政策研究大学院大学、東京大学、一橋大学、大阪大学・京都大学、九州大学）合同の合宿セミナーを始め、他の「政策のための科学」拠点と連携して進めています。拠点間ネットワークを生かし、公共的関与や政策形成の現場とのつながりを、より一層強化できるように努めています。

また、以上の副専攻プログラムに加えて、同じく 2013 年 4 月より大学院等高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」も提供しています。大学院等高度副プログラム制度は、大阪大学が 2008 年度から始めたものです。これは、大学院生および 6 年制課程の学部 5、6 年次を対象に、幅広い分野の知識と柔軟な思考能力を持つ人材など、社会において求められる人材の多様な要請に対応する取組として、教育目標に沿って、一定のまとまりを有する授業科目により構成され、体系的に履修することができるプログラムです。所定の単位を修得した学生には高度副プログラム修了認定証が授与されます。高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」プログラム修了には、必修科目 2 単位および選択科目 6 単位以上の計 8 単位以上の修得が必要です。

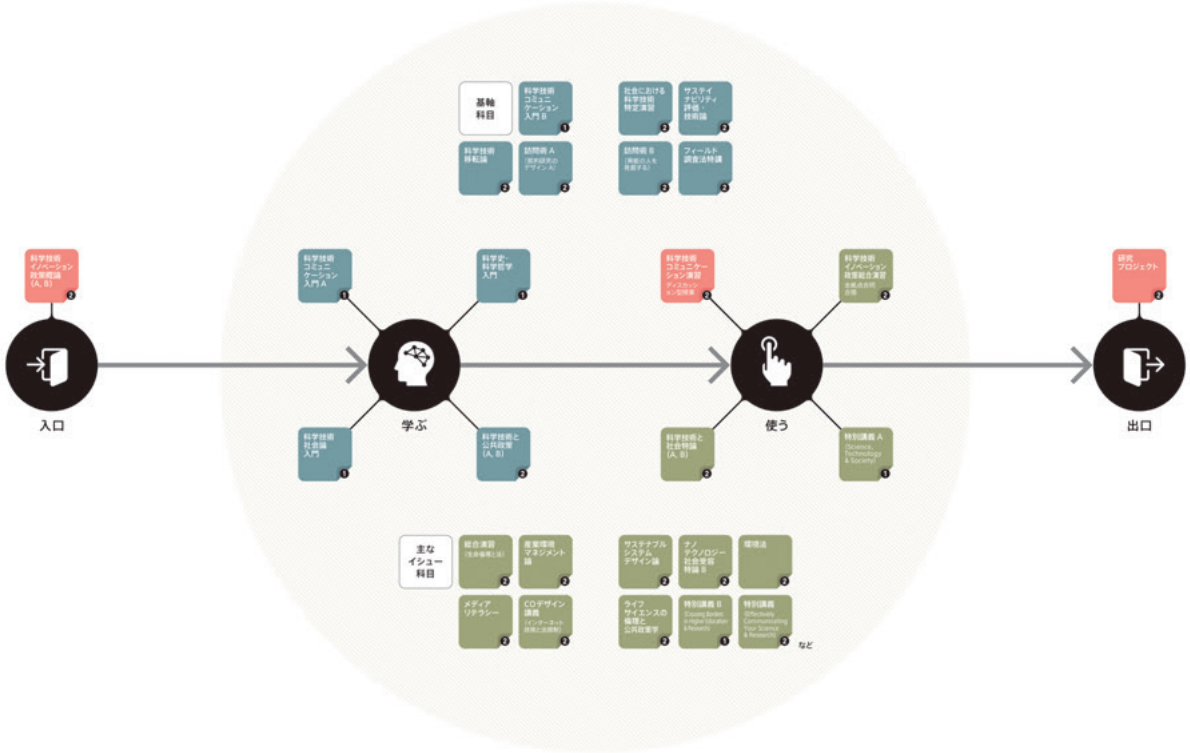


図　副専攻／高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」の科目

大阪大学　大学院副専攻プログラム・大学院等高度副プログラムの運営状況

副専攻プログラム（修了要件 14 単位以上）履修登録者数、修了者数など

2019 年度　在籍者数の合計：27 人

履修登録者数：17 人（所属研究科内訳　文学研究科：1 人、人間科学研究科：1 人、法学研究科：1 人、理学研究科：5 人、工学研究科：4 人、基礎工学研究科：2 人、国際公共研究科：1 人、生命機能研究科：1 人、情報科学研究科：1 人）

修了者数：2 人（進路内訳　進学：1 人、民間企業：1 人）

＊副専攻プログラムの修了証は、学生が副専攻の 14 単位を修得し、さらに主専攻を修了した後に授与されます。そのため、14 単位を修得したものの、主専攻を来年度以降に修了予定の学生数は含まれていません。

参考資料：過去の履修登録者数、修了者数

2013 年度

履修登録者数：15 人（所属研究科内訳　文学研究科：1 人、人間科学研究科：1 人、法学研究科：1 人、理学研究科：5 人、薬学研究科：1 人、工学研究科：2 人、基礎工学研究科：3 人、生命機能研究科：1 人）

修了者数：2 人（進路内訳　民間企業：2 人）

2014 年度

履修登録者数：14 人（所属研究科内訳　人間科学研究科：1 人、理学研究科：2 人、医学系研究科：1 人、工学研究科：4 人、基礎工学研究科：2 人、国際公共政策研究科：1 人、生命機能研究科：3 人）

修了者数：4 人（進路内訳　政府・公的研究機関：2 人、民間企業：2 人）

2015 年度

履修登録者数：6 人（所属研究科内訳　文学研究科：1 人、理学研究科：3 人、工学研究科：2 人）

修了者数：4 人（進路内訳　内部進学：1 人、大学へ就職：1 人、民間企業：2 人）

2016 年度

履修登録者数：12 人（所属研究科内訳　文学研究科：2 人、理学研究科：2 人、医学系研究科：1 人、工研究科学：4 人、基礎工学研究科：2 人、国際公共政策研究科：1 人）

修了者数：6 人（進路内訳　大学へ就職：2 人、政府・公的研究機関へ就職：1 人、民間企業：2 人、不明：1 人）

2017 年度

履修登録者数：8 人（所属研究科内訳　文学研究科：1 人、理学研究科：1 人、医学系研究科：1 人、工学研究科：2 人、基礎工学研究科：1 人、生命機能研究科：2 人）

修了者数：6 人（進路内訳　進学：1 人、政府・公的研究機関：1 人、民間企業：4 人）

2018 年度

履修登録者数：6 人（所属研究科内訳　文学研究科：1 人、理学研究科：2 人、医学系研究科：1 人、基礎工学研究科：2 人）

修了者数：3 人（進路内訳　民間企業：3 人）

高度副プログラム（修了要件 8 単位以上）履修登録者数、修了者数など

2019 年度　在籍者数の合計：11 人

履修登録者数：7 人（所属研究科内訳　理学研究科：4 人、医学系研究科：2 人、工学研究科：1 人）

修了者数：4 人（進路内訳　進学：1 人、政府・公的研究機関：1 人、民間企業：1 人、不明：1 人）

＊高度副プログラムの修了証は、学生が高度副の 8 単位を取得し、さらに主専攻を修了した後に授与されます。そのため、8 単位を取得したものの、主専攻を来年度以降に修了予定の学生数は含まれていません。

参考資料：過去の履修登録者数、修了者数

2013 年度

履修登録者数：8 人（所属研究科内訳　人間科学研究科：1 人、理学研究科：2 人、医学系研究科：3 人、国際公共政策研究科：1 人、生命機能研究科：1 人）

修了者数：0 人

2014 年度

履修登録者数：12 人（所属研究科内訳　人間科学研究科：1 人、理学研究科：1 人、工学研究科：4 人、基礎工学研究科：3 人、国際公共政策研究科：2 人、生命機能研究科：1 人）

修了者数：3 人

2015 年度

履修登録者数：10 人（所属研究科内訳　文学研究科：1 人、理学研究科：2 人、医学系研究科：1 人、工学研究科：3 人、基礎工学研究科：1 人、国際公共政策研究科：1 人、生命機能研究科：1 人）

修了者数：5 人

2016 年度

履修登録者数：9 人（所属研究科内訳　人間科学研究科：1 人、法学研究科：1 人、理学研究科：2 人、工学研究科：1 人、基礎工学研究科：2 人、生命機能研究科：1 人、情報科学研究科：1 人）

修了者数：8 人

2017 年度

履修登録者数：7 人（所属研究科内訳　理学研究科：2 人、医学系研究科：1 人、工学研究科学：2 人、基礎工学研究科：1 人、国際公共政策研究科 1 人）

修了者数：8 人

2018 年度

履修登録者数：8 人（所属研究科内訳　文学研究科：1 人、医学系研究科：3 人、工学研究科：2 人、基礎工学研究科：1 人、生命機能研究科：1 人）

修了者数：4 人

大阪大学 副専攻プログラム（修了要件 14 単位以上）　開講科目一覧（2019 年度）

科目カテゴリー		開講部局（課程）	授業科目名	主担当教員	単位	学期
入門必修科目（2単位）		COデザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策概論A	平川 秀幸、他	1	春
		COデザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策概論B	平川 秀幸、他	1	夏
必修科目（2単位）		COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション演習	八木 絵香、他	2	集中（夏）
連携必修科目（2単位）		COデザインセンター（院）	研究プロジェクト	平川 秀幸、他	2	通年
選択科目： 8単位以上 （選択科目Ⅰおよび Ⅱから、それぞれ2単位以上を履修）	選択科目Ⅰ： 基軸科目群	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門A	八木 絵香、他	1	春（豊中）
		COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門B	八木 絵香、他	1	夏（豊中）
		COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門A	八木 絵香、他	1	不開講
		COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門B	八木 絵香、他	1	冬（吹田）
		COデザインセンター（院）	科学史・科学哲学入門	平川 秀幸	1	夏
		COデザインセンター（院）	科学技術社会論入門	平川 秀幸、他	1	春
		COデザインセンター（院）	科学技術と公共政策A	渡邊 浩崇	1	秋
		COデザインセンター（院）	科学技術と公共政策B	渡邊 浩崇	1	冬
		COデザインセンター（院）	訪問術A（質的研究のデザインA）	池田 光穂	2	春
		COデザインセンター（院）	訪問術B（異能の人を発掘する）	池田 光穂	2	春
		人間科学研究科（博士前期）	フィールド調査法特講	森田 敦郎、他	2	春～夏
		人間科学研究科（博士前期）	社会における科学技術特定演習	山中 浩司	2	秋～冬
		工学研究科（博士前期）	サステイナビリティ評価・技術論	下田 吉之、他	2	春～夏
		基礎工学研究科（博士前期）	科学技術移転論	草部 浩一	2	秋～冬
	選択科目Ⅱ： イシュー科目群	COデザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策総合演習	平川 秀幸、他	2	集中（夏）
		COデザインセンター（院）	科学技術と社会特論A	平川 秀幸、他	1	秋
		COデザインセンター（院）	科学技術と社会特論B	平川 秀幸、他	1	冬
		COデザインセンター（院）	特別講義A（Science, Technology and Society）	工藤 充	1	夏
		COデザインセンター（院）	特別講義B（Crossing Borders in Higher Education and Research）	工藤 充	1	秋
		COデザインセンター（院）	特別講義（Effectively Communicating Your Science & Research）	BARRETT BRENDAN、他	2	春
		COデザインセンター（院）	メディアリテラシー	久保田 徹、他	2	集中（冬）
		COデザインセンター（院）	COデザイン講義（インターネット技術と法規制）	渡邊 浩崇、他	2	秋～冬
		COデザインセンター（院）	COデザイン講義（Food Security and Sustainability）	上須 道徳	2	不開講
		法学研究科（博士前期）	総合演習（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	秋～冬
		法学研究科（博士後期）	特定研究（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	秋～冬
		医学系研究科（修士）	ライフサイエンスの倫理と公共政策学	加藤 和人、他	2	集中（夏）
		工学研究科（博士前期）	産業環境マネジメント論	東海 明宏	2	春～夏
		工学研究科（博士前期）	サステナブルシステムデザイン論	小林 英樹	2	春～夏
		基礎工学研究科（博士前期） （ナノサイエンスデザイン教育研究センター提供）	ナノテクノロジー社会受容特論A	伊藤 正	2	不開講
		基礎工学研究科（博士前期） （ナノサイエンスデザイン教育研究センター提供）	ナノテクノロジー社会受容特論B	伊藤 正	2	集中（春～夏）
		国際公共政策研究科（博士前期）	環境法	松本 充郎	2	春～夏
		国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（環境法）	松本 充郎	2	春～夏
		国際公共政策研究科（博士前期）	特殊講義（開発と環境）	大槻 恒裕	2	不開講
		国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（開発と環境）	大槻 恒裕	2	不開講
		国際公共政策研究科（博士前期）	特殊講義（人事の経済分析1）	松繁 寿和	2	不開講
		国際公共政策研究科（博士後期）	プロジェクト演習（人事の経済分析3）	松繁 寿和	2	不開講

大阪大学 高度副プログラム（修了要件 8 単位以上）　開講科目一覧（2019 年度）

科目カテゴリー	開講部局（課程）	授業科目名	主担当教員	単位	学期
必修科目（2単位）	COデザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策概論A	平川 秀幸、他	1	春
	COデザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策概論B	平川 秀幸、他	1	夏
選択科目：6単位以上	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション演習	平川 秀幸、他	2	集中（夏）
	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門A	八木 絵香、他	1	春（豊中）
	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門B	八木 絵香、他	1	冬（豊中）
	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門A	八木 絵香、他	1	不開講
	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門B	八木 絵香、他	1	冬（吹田）
	COデザインセンター（院）	科学史・科学哲学入門	平川 秀幸	1	夏
	COデザインセンター（院）	科学技術社会論入門	平川 秀幸、他	1	春
	COデザインセンター（院）	科学技術と公共政策A	渡邊 浩崇	1	秋
	COデザインセンター（院）	科学技術と公共政策B	渡邊 浩崇	1	冬
	COデザインセンター（院）	訪問術A（質的研究のデザインA）	池田 光穂	2	春
	COデザインセンター（院）	訪問術B（異能の人を発掘する）	池田 光穂	2	夏
	人間科学研究科（博士前期）	フィールド調査法特講	森田 敦郎、他	2	春～夏
	人間科学研究科（博士前期）	社会における科学技術特定演習	山中 浩司	2	秋～冬
	工学研究科（博士前期）	サステイナビリティ評価・技術論	東海 明宏、他	2	春～夏
	基礎工学研究科（博士前期）	科学技術移転論	草部 浩一	2	秋～冬
	COデザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策総合演習	平川 秀幸、他	2	集中（夏）
	COデザインセンター（院）	科学技術と社会特論A	平川 秀幸、他	1	秋
	COデザインセンター（院）	科学技術と社会特論B	平川 秀幸、他	1	冬
	COデザインセンター（院）	特別講義A（Science, Technology and Society）	工藤 充	1	夏
	COデザインセンター（院）	特別講義B（Crossing Borders in Higher Education and Research）	工藤 充	1	秋
	COデザインセンター（院）	特別講義（Effectively Communicating Your Science & Research）	BARRETT BRENDAN、他	2	春
	COデザインセンター（院）	メディアリテラシー	久保田 徹、他	2	集中（冬）
	COデザインセンター（院）	COデザイン講義（インターネット技術と法規制）	渡邊 浩崇、他	2	秋～冬
	COデザインセンター（院）	COデザイン講義（Food Security and Sustainability）	上須 道徳	2	不開講
	法学研究科（博士前期）	総合演習（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	秋～冬
	法学研究科（博士後期）	特定研究（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	秋～冬
	医学系研究科（修士）	ライフサイエンスの倫理と公共政策学	加藤 和人、他	2	集中（夏）
	工学研究科（博士前期）	産業環境マネジメント論	東海 明宏	2	春～夏
	工学研究科（博士前期）	サステナブルシステムデザイン論	小林 英樹	2	春～夏
	基礎工学研究科（博士前期） （ナノサイエンスデザイン教育研究センター提供）	ナノテクノロジー社会受容特論A	伊藤 正	2	不開講
	基礎工学研究科（博士前期） （ナノサイエンスデザイン教育研究センター提供）	ナノテクノロジー社会受容特論B	伊藤 正	2	集中（春～夏）
	国際公共政策研究科（博士前期）	環境法	松本 充郎	2	春～夏
	国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（環境法）	松本 充郎	2	春～夏
	国際公共政策研究科（博士前期）	特殊講義（開発と環境）	大槻 恒裕	2	不開講
	国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（開発と環境）	大槻 恒裕	2	不開講
	国際公共政策研究科（博士前期）	特殊講義（人事の経済分析1）	松繁 寿和	2	不開講
	国際公共政策研究科（博士後期）	プロジェクト演習（人事の経済分析3）	松繁 寿和	2	不開講

大阪大学 特色ある授業

「科学技術イノベーション政策概論（A, B)」（春・夏学期 隔週水曜 5・6 限）

この科目のねらいは、科学技術やイノベーションの「望ましさ」をどう実現したらよいか、そのためにはどのような問題を研究開発や政策形成において考えなくてはならないかを、科学技術の「倫理的・法的・社会的課題（Ethical, Legal and Social Issues: ELSI)」の観点から、多角的に学ぶことです。ゲストの専門家による講義（90 分）と討論（90 分）を行い、最終回は全体を振り返っての総合討論を行っています。

2019 年度は、「科学技術イノベーション政策概論 A」では、特に、ELSI に関する研究や政策が最も早くから行われてきた生命科学を取り上げ、「科学技術イノベーション政策概論 B」では、人工知能技術やビッグデータ利用など情報科学技術を取り上げました。以下はその詳細です（ゲストの所属や肩書きは実施当時のもの)。

「科学技術イノベーション政策概論 A」

第 1 回（2019 年 4 月 10 日）　平川 秀幸（大阪大学 教授）
　イントロダクション：科学技術政策と<ELSI>
第 2・3 回（2019 年 5 月 8 日）　小門 穂（大阪大学 助教）
　生殖医療の倫理的・法的・社会的課題
第 4・5 回（2019 年 5 月 15 日）　三成 寿作（京都大学 特定准教授）
　ゲノム研究をめぐる倫理的・法的・社会的課題
第 6・7 回（2019 年 5 月 29 日）　松尾 真紀子（東京大学 特任講師）
　食・農分野におけるゲノム編集のリスクガバナンスと ELSI
第 8 回（2019 年 6 月 5 日）　平川 秀幸（大阪大学 教授）
　総合討論

「科学技術イノベーション政策概論 B」

第 1 回（2019 年 6 月 12 日）　平川 秀幸（大阪大学 教授）
　イントロダクション：情報科学技術と ELSI
第 2・3 回（2019 年 6 月 26 日）　福田 雅樹（大阪大学 教授）
　AI ネットワーク化の展望と課題
第 4・5 回（2019 年 7 月 17 日）　呉羽 真（大阪大学 特任助教）
　人工知能・ロボットの倫理的課題
第 6・7 回（2019 年 7 月 24 日）　岸本 充生（大阪大学 教授）
　エマージングテクノロジーとしての生体認証技術
第 8 回（2019 年 7 月 31 日）　平川 秀幸（大阪大学 教授）
　総合討論

「科学技術コミュニケーション演習」（集中講義（夏））

研究の細分化により生じている専門家間のコミュニケーションの困難さを実感すると同時に、異なる専門知識や背景を持つ人々とのコミュニケーションの作法を獲得することを目的として実施している集中講義です。3 日間、一つのテーマについて、じっくりと議論を重ねます。講義のテーマは例年、現在進行形の科学技術に関する社会的な課題を選んでいます。2019 年度は「ゲノム編集作物」を取り上げました。「現在、想定されているゲノム編集作物の規制の枠組みの是非」について議論を行いました。

3 日間のスケジュールは次の通りで、グループワークを中心に進めました。

1 日目

ガイダンス・グループメンバー内の自己紹介

事前に提示された「問 1」について、個人の見解をグループ内で共有

グループごとに専門家への質問を作成

専門家との質疑応答

*問 1：現状の規制の枠組み（SDN1 から得られた生物についてはカルタヘナ法の規制の対象外とすること）の是非は？ 「許容できる/適切な措置である」とする場合は、そう判断する根拠について、そして、「許容できない/カルタヘナ法の規制と同等であるべき（もしくは同等でなくとも別の枠組みを必要とする）」とする場合には、そう判断する根拠について、示すこと。

専門家としてお越しいただいたのは、以下の 3 名です。

・食品に関する規制について、そして、海外の状況に関しても詳しい立川 雅司氏（名古屋大学 教授）
・ゲノム編集技術の専門家である安本 周平氏（大阪大学 助教）
・消費者、生産者の現場からの視点について詳しい吉田 省子氏（北海道大学 客員准教授）

2 日目

専門家から得られた情報などを踏まえつつ、グループごとに議論

「問 1」に関する議論の内容を発表&講評

提示された「問 2」について、グループごとに議論

「問 2」に関する中間発表と全体討議

*問 2：問 1 で議論した多様な見解を踏まえた上で、現状の規制の枠組みで進めていく場合、どのような制度や活動が必要なのか？

3 日目

「問 2 」に関して、グループごとに議論

「問 2 」に関する議論の内容を発表&講評

「問 3」*に関する個別ワーク

「問 3」に関する発表と講評

*問 3：自らの専門に立ち戻った際に、この問題（狭義にはゲノム編集作物の普及にかかる問題/広義には、リスク評価・科学教育・リスクコミュニケーション・農林水産政策・それを取り巻く行政の仕組みや法制度）についてどのような貢献が可能か？

京都大学の取組

京都大学 学際融合教育研究推進センター 「政策のための科学ユニット」概要

「さまざまな分野を“つなぐ”人材」の育成

人類の持続的発展への願望を実現するために科学技術の発展に寄せられる社会の期待は、世界的規模で急速に高まっています。こうした社会の科学技術への期待の高まりは科学の知見の蓄積とそれを技術開発に結びつける創造力の結実が生み出した成果であるといっても過言ではありません。しかし一方で、このような科学技術の進歩が、グローバルな社会環境を生みだすとともに、人類の持続的発展に向けて我々が解決すべき課題を多様化・複雑化させています。このような社会的課題の解決には、研究者自身が解決すべき社会の課題を発見し解決するための研究を進め、その科学技術の成果を社会に実装し、社会システムの改革を含めて新しい社会的価値の創造をもたらすイノベーションを生起させることが必要です。

このような問題意識は我が国に限ったことではなく、現在世界各国がイノベーションによる経済社会の発展を目指して活発な取組を行っています。我が国がこのようなグローバルな世界で、持続的に発展していくためには、現代社会の解決すべき課題の多様性と複雑性に対応しつつ、資源や人材を有効に活用し国際競争力を高めていくことが不可欠です。

「政策のための科学」の扱うべき領域は、科学技術イノベーションに対する理解に加え、政策及びその形成過程、政策と自然・社会との相互作用といった、自然科学及び人文社会科学の諸科学分野に跨るものです。そしてまた、そこで得られた知見が実際の政策形成とその実施に寄与することが求められています。したがって、ここで育成される人材には、多様な学問分野の知見を総合し、社会的課題を的確に捉え、多様な利害関係者と協力しつつ政策形成・実施していくという合意形成の能力も求められます。

研究においては、政策を実施すべき各分野において、何を仮説として設定するのか、また、複数の異なる領域、価値観から、どのように優先順位をつけて予算配分をするのかといった問題が重要な課題です（図 1）。

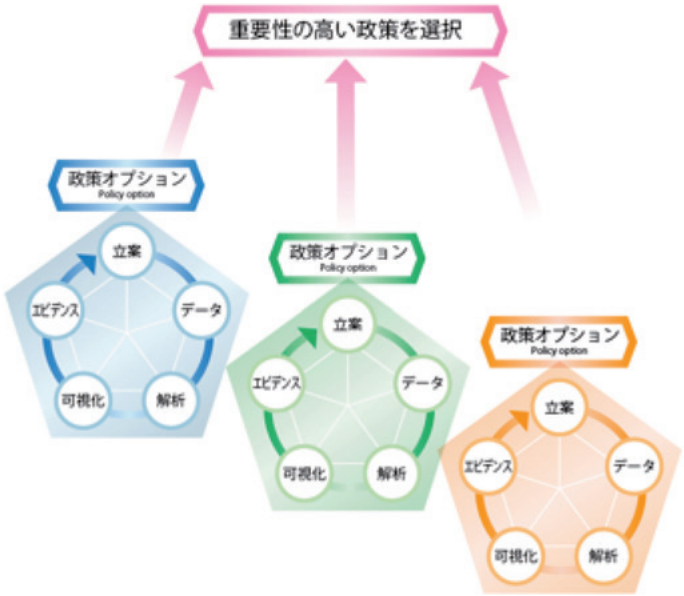


図 1　さまざまな領域からの政策決定の概念図

定量的なエビデンスは、実世界における各種のデータを可視化し、そこから様々な手法で解析評価をする手法の深化が重要となります。実世界のデータからエビデンスへ、エビデンスから政策へ、そして政策を実施したのちにそれを評価していくというサイクルが形成されていくことになります（図 2）。

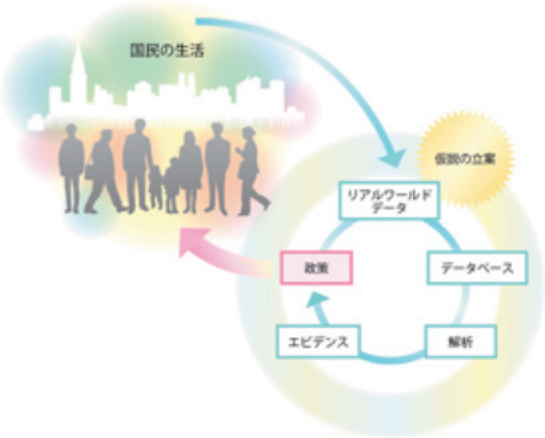


図 2　エビデンスベースの政策決定の概念図

政策のための科学プログラムでは、大阪大学と京都大学の連携により、幅広く科学技術の研究現場の動向を踏まえつつ、科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究を基盤として、テクノロジーアセスメントなどの公共的関与の活動と分析を行うことにより、その分野と他分野・他業種・市民等をつなぐ人材育成を行います。育成された人材は、我が国の科学技術イノベーション政策の将来を担う人材として、多様なキャリアパスの中で、社会を先導できる人材となることが期待されています。修了後のキャリアパスとしては、各種研究職、行政職、政策秘書、シンクタンク職員、大学の研究戦略担当、リスクコミュニケーション人材などを想定しています。

京都大学　「政策のための科学ユニット」運営状況

2019 年度　在籍者数の合計：13 人

研究プロジェクト修了コース（修了要件 14 単位以上）

履修者数：9 人（所属研究科内訳　人間・環境学研究科：4 人、医学研究科：1 人、農学研究科：3 人、工学研究科：1 人）

修了者数：2 人（進路内訳　政府・公的研究機関：1 人、民間企業：1 人）

学際プログラム履修コース（修了要件 8 単位以上）

履修者数：4 人（所属研究科内訳　人間・環境学研究科：1 人、医学研究科：2 人、農学研究科：1 人）

修了者数：1 人（進路内訳　博士課程在学中：1 人）

＊それぞれのコースの修了証は、学生が修了要件の単位を修得すれば、主専攻の修了前でも授与されます。この点は大阪大学と京都大学で異なります。

参考資料：過去の履修者数、修了者数

2013 年度

履修者数：7 人（所属研究科内訳　医学研究科：3 人、経営管理大学院：1 人、工学研究科：1 人、農学研究科：1 人、人間・環境学研究科：1 人）

2014 年度

履修者数：7 人（所属研究科内訳　人間・環境学研究科：2 人、医学研究科：2 人、農学研究科：2 人、薬学研究科：1 人）

修了者数：7 人（進路内訳　政府・公的研究機関：2 人、民間企業：2 人、博士課程在学中：3 人）

2015 年度

履修者数：6 人（所属研究科内訳　人間・環境学研究科：1 人、医学研究科：1 人、農学研究科：1 人、公共政策大学院：3 人）

修了者数：5 人（進路内訳　大学：1 人、民間企業：2 人、博士課程進学：2 人）

2016 年度

履修者数：8 人（所属研究科内訳　人間・環境学研究科：3 人、医学研究科：2 人、文学研究科：2 人、理学研究科：1 人）

修了者数：6 人（進路内訳　公務員：3 人、民間企業：2 人、博士課程在学中：1 人）

2017 年度　在籍者数の合計：17 人

履修者数：9 人（所属研究科内訳　人間・環境学研究科：2 人、医学研究科：4 人、農学研究科：3 人）

修了者数：6 人（進路内訳　公務員：1 人、民間企業：4 人、博士課程進学：1 人）

2018 年度　在籍者数の合計：15 人

履修者数：15 人（所属研究科内訳　人間・環境学研究科：3 人、医学研究科：6 人、農学研究科：4 人、工学研究科：1 人、情報学研究科：1 人）

修了者数：4 人（進路内訳　大学：1 人、民間企業：1 人、博士課程在学中：2 人）

京都大学 開講科目一覧（2019 年度）

区分		科目名	期間		主担当教員（研究科）	単位
			前期	後期		
入門必修科目		現代社会と科学技術 B		○	川上 浩司（医学研究科）、他	2
必修科目		科学技術コミュニケーション演習	通年		川上 浩司（医学研究科）、他	2
連携必修科目		研究プロジェクト	通年		川上 浩司（医学研究科）、他	2
選択科目（8単位以上）	選択科目Ⅰ：基軸科目群（1科目以上選択）	現代社会と科学技術 A	○		川上 浩司（医学研究科）、他	1
		科学技術イノベーション政策総合演習	夏期集中		川上 浩司（医学研究科）、他	2
		科学技術イノベーション政策特別演習	夏期集中		川上 浩司（医学研究科）、他	1
		プログラミング演習（Excel VBA）	○		小山田 耕二（学術情報メディアセンター）	2
		医薬政策・行政		○	川上 浩司（医学研究科）	1
		問題解決思考		○	末松 千尋（経営管理大学院）	2
		疫学Ⅰ（疫学入門）	○		中山 建夫（医学研究科）	1
		公共政策論Ⅰ		○	佐野 亘（人間・環境学研究科）	2
		科学技術と社会に関わるクリティカルシンキング		○	伊勢田 哲治（文学研究科）	2
		科学技術・イノベーションと大学		○	関根　博仁（経済研究所）	2
	選択科目Ⅱ：イシュー科目群（1科目以上選択）	可視化シミュレーション学		○	小山田耕二（学術情報メディアセンター）	2
		医薬品の開発と評価		○	川上 浩司（医学研究科）	1
		科学的方法による京都学実践	○		小山田耕二（学術情報メディアセンター）	2
		応用経済学		○	依田 高典（経済学研究科）	2
		政策のための研究方法論	○		カール・ベッカー（学際融合教育研究推進センター）	2
		医療政策の ELSI		○	カール・ベッカー（学際融合教育研究推進センター）	2
		健康情報学Ⅰ		○	中山 建夫（医学研究科）	2
		文献評価法	○		中山 建夫（医学研究科）	1
		技術者倫理と技術経営	○		富田 直秀（工学研究科）、他	2
		情報社会学	○		大手 信人（情報学研究科）	2
		共生社会環境論演習３Ｂ		○	佐野 亘（人間・環境学研究科）	2
		まちづくりとまち経営		○	吉田　恭（経営管理大学院）	2
		現代社会論演習ＩＡ	○		広井 良典（こころの未来研究センター）	2
		現代社会論演習ＩＡ		○	広井 良典（こころの未来研究センター）	2

京都大学 特色ある授業

「現代社会と科学技術 A」（前期 木曜 1 限）、「現代社会と科学技術 B」（後期 木曜 4 限）

本 2 科目は、各回に様々な関連トピックを取り上げて、学内外からの講師による話題提供と、それに基づいた学生間のディスカッションを行い、科学の多様性と社会、政策を考えるための端緒としています。ユニット設立当初の 2013 年度から 2018 年度にかけて、「現代社会と科学技術入門」「現代社会と科学技術」として開講し、医薬政策、大学における学問、科学的手法、防災と情報通信、リスクコミュニケーション、計量書誌学、疫学とゲノム科学、医療技術が起こす倫理問題、科学技術の社会への実装などをテーマとしてきました。2019 年度により体系的な学習を進めるために編制を見直し、「現代社会と科学技術 A」「現代社会と科学技術 B」と改めるとともに、前期は中央省庁の行政官をはじめとする実務家教員による講義を行っています。

また、講義終了後に学生から提出されるレポートについては、担当教員からのコメントを付けて学生にフィードバックしています。これらのレポート及びコメントは、各回それぞれの講義を受講した学生で共有されており、同じ講義を受けた他の学生の視点、その視点に対する教員の評価を通して、学びを深める役割を果たしています。インタラクティブな講義、学生同士のディスカッション、講義後の学びにより、学生の幅広い政策に関する知識の習得と政策分析の能力の習得を目指します。

2019 年度の「現代社会と科学技術入門」と「現代社会と科学技術」は各回下記のテーマに従って話題提供と学生同士によるディスカッションを行いました。

「現代社会と科学技術 A」

第 1 回（2019 年 5 月 9 日）　宮野 公樹（京都大学 准教授）
大学における学問とは?分野融合・越境のダイナミクス

第 2 回（2019 年 5 月 16 日）　小山田 耕二（京都大学 教授）
科学的方法について

第 3 回（2019 年 5 月 23 日）　カール・ベッカー（京都大学 特任教授）
現代社会の問題と政策のための科学的考え方

第 4 回（2019 年 5 月 30 日）　田渕 敬一（京都大学　准教授）
社会と科学の関わり方

第 5 回（2019 年 6 月 6 日）　関根　博仁（京都大学 准教授）
科学技術と大学の役割

第 6 回（2019 年 6 月 13 日）　カール・ベッカー（京都大学 特任教授）
研究プロジェクト課題発表会

第 7 回（2019 年 6 月 27 日）　吉田 恭（京都大学 特定教授）
コンパクトシティ政策と科学

第 8 回（2019 年 7 月 4 日）　川上 浩司（京都大学 教授）
健康福祉政策と情報の利活用

第 9 回（2019 年 7 月 11 日）　広井 良典（京都大学 教授）
持続可能性と人口減少社会のデザイン

第 10 回（2019 年 7 月 18 日）　全教員
研究の進捗確認

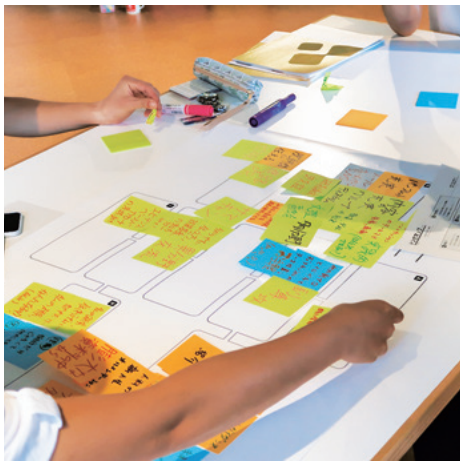
合同講義

「科学技術イノベーション政策総合演習」（集中講義（夏））

本科目は、科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」基盤的研究・人材育成拠点（政策研究大学院大学、東京大学、一橋大学、大阪大学・京都大学、九州大学）の拠点間共同プログラムの一つであるサマーキャンプを活用したものです。このサマーキャンプでは、ゲスト講師による講義とともに、共同で問題分析や政策提言等を行うグループワークに取り組みます。大阪大学ではこのサマーキャンプを科目として単位認定するため、学生に対する事前ワークショップを実施した上で、サマーキャンプに参加するようにしました。この事前ワークショップは、京都大学と一緒に実施しています。

2019 年度は、8 月 8 日に事前ワークショップを大阪大学・京都大学合同で行いました。事前ワークショップの講師は、アトリエ・カプリスの岩田 直樹さんと岩田 花奈さんにお願いをしました。サマーキャンプ本番で、よりよい対話や活動ができるようになることを目的とした日です。今年度の事前ワークショップのテーマは「『伝える』をリファインする。～デザインプロセスを体験してみる～」というものでした。この日の流れは、とある課題を様々な要素に分解しつつ、解決策を提案するというデザインのプロセスをまずは体験し、それが政策立案のプロセスとどう違うのか、を考察するというものでした。

「とある課題」として、教員チームから提案をしたのは、「教育プログラム STiPS を適切に、必要な学生に届けるにはどうしたらよいか？」というもの。ゲスト講師のお二人が日々活用されている「トンボマップ」という思考ツールを用いながら、各グループで課題の設定と企画書作りを進めました。



最後のふりかえりの時間には、公共政策を専門とする教員も加わって、デザインプロセスと政策立案プロセスとの違いについて議論をしました。

その後、8 月 26 日からのサマーキャンプに参加しました。8 月 26 日から 28 日にかけてのサマーキャンプは、政策研究大学院大学で開催され、大阪大学からは学生 14 人と教員 5 人、京都大学からは学生 6 人と教員 5 人が参加しました。

サマーキャンプのプログラムに関しては、「SciREX 事業への参画（本冊子 40 ページ以降)」で詳しくご紹介しています。

「研究プロジェクト」（通年）

本科目では、副専攻プログラムの総仕上げとして、公共的視点から科学技術と政策や社会とを「つなぐ」活動や成果物の作成を行うことにより、自らの専攻分野を生かしつつ、プログラムで学んだ知識やスキルを活用する能力を獲得します。具体的には、科学技術イノベーション政策に関連するトピックと方法論を用いて、「政策のための科学」に関連する個人研究もしくは共同研究のプロジェクトを実施し、学術研究論文あるいはそれに準ずるもの（日英可）を作成します。

授業では、そのための基礎文献の輪読や論文の書き方の指導をゼミ形式で行うとともに、進捗報告や発表の練習を行います。加えて、それぞれの研究テーマや進捗に合わせ、複数の担当教員による個別指導を行い、最後に、その論文の口頭発表会を実施しました。2019 年度の合同発表会は、2019 年 12 月 14 日に京都大学芝蘭会館別館にて、大阪大学 4 人と京都大学 2 人の合計 6 人が発表を行いました。

口頭発表の題名は以下のとおりになります。

2019 年度　（口頭発表会：2019 年 12 月 14 日 京都大学芝蘭会館別館にて）

大阪大学

（1）日本の科学技術イノベーションに関する政策過程の検討―革新的研究開発推進プログラム（ImPACT）を題材として―

（2）生命倫理への関心度の決定要因―情報収集行動を中心に―

（3）博士課程進学を選択する要因の調査―大阪大学大学院生命機能研究科における事例から―

（4）原子力工学科・専攻の改称による人材育成への影響―大阪大学大学院工学研究科を対象として―

京都大学

（1）京都市営バス路線ネットワークの最適化

（2）農業輸出における行政の役割と課題

参考資料：研究プロジェクト　学生論文・口頭発表題名

2013 年度　（口頭発表会：2014 年 2 月 19 日 大阪大学豊中キャンパスにて）

大阪大学

（1）日本の食品問題において消費者の不安感に影響を与える要素の考察

（2）多メディア時代の科学技術ジャーナリズム ―「翻訳」、「批判」から「構築」へ―

2014 年度　（口頭発表会：2015 年 2 月 14 日 大阪大学中之島センターにて）

大阪大学

（1）「科学技術の智」プロジェクト・物質科学専門部会報告書の再編 ―エネルギーを中心として―

（2）科学技術とフィクション ―人工子宮の現実化に寄せて―

（3）大学院博士後期課程への進学、その後の進路選択に関わる各種要因についての調査 ―先行研究を参考に学生側の視点を探る―

（4）環境ラベルに関する一考察 ―NL マークを事例にあげて―

（5）福島第一原子力発電所事故における「市民測定」 ―福島市の事例をもとに―

（6）中華人民共和国環境保護部による CNPC・Sinopec 石油精製プロジェクト差し止め事件 ―習近平政権における政府と国有石油企業の関係性の変化―

（7）科学のイメージと PR ―企業広告において「科学的である」とはどういうことか―

京都大学

（1）外科領域における医療技術評価 ―社会の理解のために―

（2）医療ツーリズムにおける政策提言 ―医療ツーリスト受け入れ最前線への調査を通じて―

（3）可視化情報学会における会員満足度の因果関係分析

（4）トップジャーナルからみた基礎医学研究の臨床 ―応用への実現に関する調査研究―

（5）京都府の高温耐性品種に対する消費者の価格評価の推定 ―選択型実験による接近―

（6）社会的・情緒的学習の導入によるインクルーシブ教育の実現

（7）虚血性心疾患に対する心臓リハビリテーション実施状況の経年的変化 ―レセプトデータベースを用いた疫学的研究―

2015 年度　（口頭発表会：2016 年 2 月 13 日 京都大学楽友会館にて）

大阪大学

（1）技術者倫理教育の現状と展望 ―大阪大学・機械工学科目の「工学倫理」を題材として―

（2）科学技術政策における外部性とその内部化 ―科学技術社会論と古典的自由主義の融合―

（3）日本における核融合研究と政策 ―歴史、現状、そして今後に向けて―

（4）科学的証拠の証拠規則の整備に向けて ―DNA 型証拠と足利裁判―

（5）科学のあいまいさ・不確実性を伝える手法開発のための予備調査 ―大学生の科学に対する意識調査とワークショップ方式の有効性確認―

京都大学
(1) 講義タイトルの表現方法に関する分析 ―大学教員が出張講義で高校生の興味を捉える―
(2) 問題解決における現場地の重要性 ―自転車シャア事業を手掛かりに―
(3) 診療報酬請求情報ナショナルデータベースの制度上の課題と展望 ―新規経口抗凝固薬薬剤疫学研究を事例に―
(4) 食中毒リスクコミュニケーションにおける確率的数量情報の認知に関する研究
(5) 栄養・健康分野における教育者の情報リテラシー・情報活用能力の涵養に向けた教育のあり方に関する検討

2016 年度　（口頭発表会：2016 年 12 月 10 日 大阪大学中之島センターにて）
大阪大学
(1) 人工知能利用における受容態度と判断基準 ―若手研究者に対する探索的調査―
(2) 専門職倫理における利益相反をめぐる論争 ―日本の産学連携における利益相反ポリシーの再考に向けて―
(3) 基礎研究における社会経済的評価について ―物理分野を中心に―
(4) 生活支援ロボット普及政策の分析と考察 ―ユーザー参加の視点から―
(5) 市民参加の手続きにおける理論と実際の比較 ―過去の河川計画を例として―
(6) パーソナライズによるサービス変化のユーザーの受け取り方 ―偏る選択肢と見られている「気持ち悪さ」―

京都大学
(1) 日本におけるペルフルオロオクタン酸の自主規制に影響を与えた要因と今後の課題
(2) 口唇・口蓋裂の患者の会が当事者と保護者に与える影響について
(3) 農山村における福祉集住政策 ―奈良県十津川村「たかもりの家」計画を例に―
(4) 自治体議員の研修に関する考察 ―評価グリッド法を用いた分析―
(5) 行政の信頼の構造について
(6) 先端科学研究と結びついたまちづくりは地域の発展に貢献しているか？

2017 年度　（口頭発表会：2017 年 12 月 9 日 京都大学楽友会館にて）
大阪大学
(1) マスメディアによる健康・医療情報に対する公衆衛生学専門家の認識
(2) 大学院博士後期課程在籍者の民間就職を促す要因 ―文献調査とインタビュー調査による探索的研究―
(3) クロマイ薬害裁判における専門家証人尋問録の検討 ―因果関係の判定条件と規範的・価値的含意―
(4) 雛人形及び雛人形業界における「価値体系」の整理 ―現状の振興政策等の文献調査および実践者への聞き取り調査を通じて―
(5) 科学コミュニケーション活動への参加に関する意識の調査 ―サイエンスカフェ「ひとことといちば」へ参加した研究者について―

京都大学

（1）新聞の社説にみる環境政策のパラダイムの変化 ―韓国の全国紙の社説を中心に―

（2）福島第一原子力発電所事故後の情報拡散状況の分析 ―大規模災害時の SNS による情報発信手法の検討―

（3）低線量放射線の生体影響に関する科学者の意識調査 ―福島第一原子力発電所事故を例に―

（4）地域公共交通改革の事例分析 －地域の持続的な移動手段確保に向けて－

（5）ヒト多能性幹細胞を用いた生殖細胞研究の課題抽出と研究者の意見

（6）事前指示書作成支援の通知時期および方法に関する質問紙調査研究 ―健康保険証発行に併せた一斉通知の実現可能性を探る―

2018 年度　（口頭発表会：2018 年 12 月 8 日 大阪大学中之島センターにて）

大阪大学

（1）大学におけるデュアルユース研究 ―「対話ツール」を利用した学生との議論―

（2）“個人の予防・健康づくりに向けたインセンティブ”制度の比較調査 ―兵庫県を事例として―

京都大学

（1）指定難病診察ガイドラインと医学文献の特徴 ―文献検索数を用いた記述研究―

（2）福祉政策による社会環境変化と精神障害者の QOL との関連 ―統合失調症患者を対象とした既存データを用いた研究―

（3）塩酸リトドリンの早産予防効果 ―データベースを用いた検討―

（4）市民と専門家のサイエンス・コミュニケーションの「成功」についての検討 －サイエンスカフェの事例分析から－

阪大・京大間の講師の相互派遣

実質的な教育における協力として、講師の相互派遣を積極的に行っています。京都大学の入門必修科目「現代社会と科学技術」において、大阪大学の平川秀幸教授、加藤和人教授が講師を務めました。

阪大学生の声

自分の専門分野の「社会の中での位置づけ」を考えることができました。

松田 勇希さん（工学研究科 環境・エネルギー工学専攻 博士前期課程２年）

私は学部生のころ、物理が好きだという理由で原子力分野の研究室を選びました。将来エネルギーとして原子力がどうなるのかは不透明ではありますが、技術者としての需要はあるだろう、ということは考えていました。それと同時に、原子力という研究分野が社会の中でどのように位置付けられるのかということについて、もっと深く考えたいという気持ちが強くなってきたのです。そのような問題意識に基づき、「研究プロジェクト」では、大学の旧原子力系学科・専攻の改称について調査し、それが原子力分野における人材育成にどのような影響を与えたのか検討しました。調査として行った大学教員に対するインタビューでは、STiPSの先生方から手厚いアドバイスやサポートをいただきました。そのおかげで主専攻の研究と両立させながら論文を仕上げることができました。

「研究プロジェクト」に取り組むことで、原子力という研究分野の歴史や、様々な観点からの評価について学ぶことができ、今まで自分には無かった視点を得ることができました。それは私にとって、これから社会に出て働くうえで非常に重要な経験だったと思います。

社会にある「様々な評価の軸」に気づくことができました。

三浦 彩音さん（理学研究科 化学専攻 博士前期課程１年）

STiPS の授業では、「サマーキャンプ」が印象に残っています。私たちのグループは、ディスカッションで意見が大きく広がりすぎてしまって、まとめるのにとても苦労しました。今振り返ると、意見のひとつひとつをグループの全員で共有するということが十分にできていなかったのだと思います。私は、この経験をとおして、グループワークでどのように意見をまとめるのがよいのか、より一層考えるようになりました。

「サマーキャンプ」でもうひとつ印象的だったのは、自分とは違う意見を目の当たりにしたことです。私自身は研究していて楽しいという気持ちが強く、また、私と同じようにこの研究が好きだというひとたちに囲まれて日々を過ごしていて、どうしても自分の研究を中心にものを見てしまうところがあるのです。でも、「サマーキャンプ」で様々な立場の方の意見を聞いて、私が今まで関わってきたアカデミックな研究にも、まだまだ足りない部分やさらに考えるべき部分があるのだな、ということも実感しました。社会の中には様々な評価の軸があるということに気づく経験は、多様な背景を持つひとと話すからこそ得られるのだと思います。

ひとりひとりの発言の「背景」を意識するようになりました。

早見 直樹さん（基礎工学研究科 機能創成専攻 博士前期課程 1 年）

僕が STiPS に興味を持ったきっかけは、ポスターの「科学技術と社会をつなぐのは誰か」というメッセージでした。グループディスカッションが経験できる授業を受けたいと思っていたのも、受講の理由のひとつです。

STiPS の授業ではファシリテーションのスキルを学んだことが印象に残っています。科学技術をテーマとした市民が参加するワークショップでもグループファシリテーターを経験することができました。これらの経験をとおし、その場でのひとりひとりの発言に対して、そのひとがなぜそう言ったのかという「そのひとの背景にあるもの」を意識するようになりました。

STiPS の魅力のひとつは、プログラムを通じて得た経験やスキルを実践の場で使ってみることができる点だと思います。僕の場合、授業の中で学んだアンケート調査やインタビューの手法は、学生委員会などの課外活動でも役に立っています。だれかに意見を求めたいとき、どんな質問をするとどのようなこたえをもらうことができるのかという事前のシミュレーションが今までよりも深くできるようになり、よりスムーズに対話ができるようになったと感じています。

京大学生の声

大学の醍醐味、的なコース

池田 裕美枝さん（医学研究科 医学専攻 博士課程２年）

社会人15年目にして大学院に進学した2児の母です。自分の課題意識を政策につなげるにはどうしたらいいのだろう？とSTiPSに参加しました。

専門も年齢も国籍も多様なメンバーの中で、それぞれの視点を学び合い、また、社会が抱える様々な課題について知り、塾考する機会に恵まれました。

選挙制度の違いがどのように社会に影響するのか、すべてのステイクホルダーを巻き込むためにどんな仕掛けができるのか、など、一言に「政策に繋げる」といっても様々な要素が絡むことを学びました。同時に、学問とは？社会とは？生きるとは？などというある意味哲学的な問いについても考え続けました。

目の前の雑事に精一杯だった社会人の日々を思うと、なんと贅沢な時間だったことでしょう。名だたる教授連との丁寧な対話やディスカッションもかけがえのない経験でした。大学という空間にいることを十二分に味わえたコースだったと思います。

現在の立ち位置を起点に、これからどんな社会を目指すのか、アカデミアとしてどう社会に働きかけ、市民として子どもに何を伝えるか、今は少し明確に述べることができます。ここでの経験を生かして、よりおもしろく生きて行こうと思います。

越境する知—知己を得て修養を積む

古屋 隆盛さん（人間・環境学研究科 相関環境学専攻 修士課程２年）

主専攻での研究分野には技術と倫理の両面で課題が山積しており、それらを社会の中でどう扱うべきか考えたい、というのが応募の動機でした。大学院終了後は技術系の公務員になりたかったので、STiPS での研究テーマはそれに沿った内容で設定しました。こちらでの指導教員からアドバイスを受けつつ、研究に必要な解析方法についてプログラムの選択科目で学び、２年目に研究プログラム論文をまとめることができました。コースワークを通じて学内外に多くの知己を得て、彼ら、彼女らから受ける知的な刺激が、主専攻と副専攻を両立するモチベーションになりました。このように、研究科内もしくは特定の研究領域に限定されない学びの場が提供されていることが STiPS の強みではないでしょうか。就職活動では志望業界が同じ仲間と一緒に、当該業界に詳しい STiPS の教員に、面接練習や企業研究への協力をお願いしました。このプログラムは、特に公務員や科学技術に関わる分野を志望される方にとって、自分の関心と現実の政策を結びつけて考える最良の機会です。２専攻の両立は困難を伴いますが、２分野にまたがって修養を積むチャンスでもあり、その過程を大いに楽しまれるとよいでしょう。

自分の世界を広げ，社会を相手にする

宮﨑 望さん（農学研究科 地域環境科学専攻 修士課程２年）

『農学は実学である』

これはしばしば耳にする言葉である。しかし研究を進めていく上で、「このままでは研究が社会の役に立たないのではないか」、このような不安が頭に浮かんでいた。そんな中で「様々な分野をつなぐ」という言葉を見て、研究を社会に活かすヒントが得られると考え STiPS に参加した。

STiPS で様々なバックグラウンドの人と議論をすることで、自分の考え方がいかに狭いかということを痛感させられた。そして自分の世界しか知らない状況では社会と戦えないことが分かった。例えば何らかの技術があっても、文化や考え方、そして予算などが大きな障壁となってその普及を阻害してくる、そんな現実を知った。しかしその中でも議論を通して様々な障壁を乗り越えるための策を考えていくのは非常に刺激的であった。またこのように生み出した結論は未熟ながらも自分の中で大切にできるものであった。

「政策」にとらわれなくてもいいと思う。「社会に何かをもたらしたい」と考えている方がいればぜひ本プログラムに参加してほしい。様々な分野の専門家や学生との議論の中でそれがいかに難しいかがわかり、それでもそれを実現するためのヒントを得ることができるはずである。

STiPS 修了生ワークショップ

新規科目開発に向けた STiPS 修了生ワークショップの開催

2019 年 12 月 14〜15 日に、主に大阪大学の修了生を対象に、STiPS 修了生ワークショップを実施しました。12 月 14 日は、京都大学芝蘭会館別館にて実施された研究プロジェクト合同発表会を視察し、発表会の終了後には、現役生との交流会を行いました。続く 12 月 15 日は、大阪大学豊中キャンパスの CO デザインスタジオに集合し、学び直しをテーマにしたワークショップを実施しました。

ワークショップでは、「社会人の学び直しに対して大学が何を提供できるのか、また、何を提供すべきか」ということをテーマに、グループに分かれて議論を行いました。

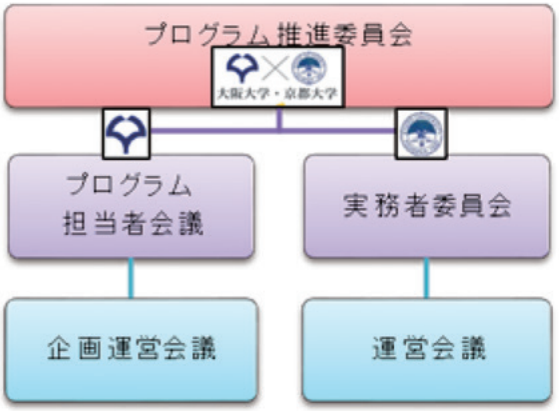
参加した修了生からは「社会に出ると、いろんな制約なしに議論できるところが無くなってくる。安心して意見交換、情報交換できる場が欲しい。」「何かを変えていきたいな、というモチベーションが生まれた。」といった声が聞かれました。

2. プログラム推進委員会の運営

2. プログラム推進委員会の運営

実施体制

本拠点 STiPS では、教育研究プログラムを円滑かつ効率的に運営するためには、一大学内の部局間調整に加え、大阪大学と京都大学の両大学間において緊密な連携が不可欠です。これを実現するための実施体制は下記のとおりです（右図参照）。



阪大・京大会議（「プログラム推進委員会」）

2012 年より、毎年 3 回から 4 回、大阪大学と京都大学の参画教員で構成される「プログラム推進委員会」を実施してきました。2019 年度は計 3 回（5 月 29 日、8 月 26 日、3 月にメール審議）実施しました。同会議では、両大学における調整に関する情報や教育研究プログラムの進捗状況を共有しています。加えて、合同講義の内容を含むカリキュラムの発展及び拡充、研究論文に関する指導調整、研究会やイベント開催の企画及び調整、サマーキャンプ、国際シンポジウム、出版事業などの拠点間合同事業に関する調整を行っています。

各大学における参画教員会議（阪大：「プログラム担当者会議」、京大：「実務者委員会」）

本教育研究プログラムを実施するためには、上述のプログラム推進委員会とは別途、各大学内の部局間調整が不可欠です。そのため、大阪大学と京都大学それぞれにおいて、構想調書時のメンバーやプログラムに新たに科目提供頂いた教員で構成されるプログラム参画教員の会議を開催しています。同会議では、プログラム進捗状況を参画教員で共有するとともに、プログラム履修者の確定や修了者の確定、カリキュラムの調整などを行っています。

各大学におけるワーキンググループ（阪大：「企画運営会議」、京大：「運営会議」）

大阪大学・京都大学合同で開催するプログラム推進委員会や各大学における参画教員会議の議題調整や細かな決定事項を遂行するために、大阪大学と京都大学では、それぞれワーキンググループを設けています。メンバーは、大阪大学では主に CO デザインセンターの教員、京都大学では主に「政策のための科学ユニット」教員です。合同拠点として開催するイベントの内容や報告・公開する文言の調整、プログラム推進委員会や参画教員会議の議題調整、他拠点との細かな連絡調整などを、同ワーキンググループが担い、迅速かつ効率的な運営と意思決定を実現しています。

アドバイザー会議

以上の実施体制に加えて、本拠点 STiPS は発足当初より、その教育研究プログラムの運営向上を目的として、有識者から構成される「アドバイザー会議（アドバイザリー・ボード）」を設置しています。

第二期アドバイザリー・メンバーは下記の 5 名です。

・村尾 和俊　　西日本電信電話株式会社　相談役
・五十嵐 仁一　JX リサーチ株式会社　代表取締役社長
・元村 有希子　毎日新聞社　論説委員/編集委員
・大岡 敏孝　　衆議院議員
・谷畑 英吾　　湖南市長

2019 年度は 12 月 14 日に、京都大学芝蘭会館別館においてアドバイザー会議を開催し、村尾 和俊氏、五十嵐 仁一氏、大岡 敏孝氏、谷畑 英吾氏の 4 名にご出席いただきました。教育研究活動や今後の人材育成のあり方について、忌憚のないご意見をいただくとともに、アドバイザーとしての貴重な評価をいただきました。当日は、「研究プロジェクト」合同発表会にもご参加いただき、学生発表に対して貴重なコメントをいただきました。

カリキュラムの発展及び拡充

カリキュラムの科目内容については、本教育プログラム開始以来、さらなる充実を目指して、新たな科目の開設や科目名称変更などを行ってきました。その際、特に心がけてきたことは、講師の相互派遣などを含む大阪大学と京都大学の授業の連携強化です。また、講義は基本的にディスカッションやグループワークを組み込んだものとし、ゲスト講師としては他大学・研究機関などの研究者、省庁や企業、NGO などの実務者を幅広く招へいしました。対象とする科学技術分野も、生命・医学、原子力やエネルギー、ナノテクノロジー、環境、開発、都市工学、情報通信技術、宇宙などへと拡大してきました。

大阪大学では、本プログラム開始の 2013 年度の開講科目数は 21、うち新設科目数は 7 でしたが、2014 年度の開講科目数は 30、うち新たに追加した科目数は 9 となりました。2015 年度の開講科目数は 29、2016 年度の開講科目数は 32 でした。2017 年度には、 4 学期制の導入に伴い、開講科目を一部リニューアルした結果、開講科目数は 36 になり、2018 年度の開講科目数は 37、そして、2019 年度の開講科目数は 28 でした。京都大学では、本プログラム開始の 2013 年度の開講科目数は 22、うち新設科目数は 5 でしたが、2014 年度の開講科目数は 1 科目追加し 23 科目となり、2015 年度の開講科目数は 23、2016 年度の開講科目数は 25、2017 年度の開講科目数は 23、2018 年度の開講科目数は 27、そして、2019 年度の開講科目数は 28 でした。

また、大阪大学副専攻プログラムと京都大学研究科横断型教育プログラム（ともに修了要件 14 単位以上）が定める修了要件を満たした学生には、2014 年度より、プログラム責任者、大阪大学総長、京都大学総長連名の修了認定証を授与しました。これは、2013 年 3 月 27 日に両大学の総長名で締結されました「科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業「公共圏における科学技術・教育研究拠点」教育プログラム実施に伴う大阪大学と京都大学との間における単位の相互認定に関する協定書および覚書」に基づいています。2013 年度より、この協定に基づき、受入大学の指定する授業科目の履修及び単位の修得を学生が希望するときは、当該授業科目の履修及び単位の修得ができるようになっています。

研究会やイベント開催の企画及び調整

ここでは実施イベント一覧を示します。各イベントについては、「4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施」と「6. 関西ネットワークの発展」を参照ください。

名称	日時	場所	主催等
「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）			
【第 49 回 STiPS Handai 研究会】 科学技術と社会のつなぎ方 －宇宙政策の未来について考える－	2019 年 4 月 23 日	大阪大学豊中キャンパス 理学研究科 H 棟 2 階 コミュニケーションスペース	主催：STiPS 共催：大阪大学大学院理学研究科、大阪大学 CO デザインセンター
【第 50 回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方（2019 年度夏）」第 1 回 NHK エデュケーショナル プロデューサー・竹内慎一さん	2019 年 6 月 18 日	大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 ステューデント・コモンズ 2 階 セミナー室 A	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター ＊授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催。
【第 51 回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方（2019 年度夏）」第 2 回 株式会社毎日放送 報道局　記者・奥西 亮太さん	2019 年 6 月 25 日	大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 ステューデント・コモンズ 2 階 セミナー室 A	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター ＊授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催。
【第 52 回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方（2019 年度夏）」第 3 回 京都大学 学術研究支援室　URA・白井 哲哉さん	2019 年 7 月 2 日	大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 ステューデント・コモンズ 2 階 セミナー室 A	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター ＊授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催。
【第 53 回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方（2019 年度夏）」第 4 回 大阪府健康医療部 食の安全推進課・西岡 麻須美さん	2019 年 7 月 9 日	大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 ステューデント・コモンズ 2 階 セミナー室 A	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター ＊授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催。

【第 54 回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方（2019 年度夏）」第 5 回 科学コミュニケーター（フリーランス）・本田 隆行さん	2019 年 7 月 16 日	大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 ステューデント・コモンズ 2 階 セミナー室 A	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター ＊授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催。
【第 55 回 STiPS Handai 研究会】 科学技術と社会のつなぎ方 －ゲノム編集を活用！？ミライの食品－	2019 年 7 月 23 日	大阪大学吹田キャンパス センテラス 3 階 センテラス・サロン	主催：STiPS 共催：大阪大学大学院工学研究科、大阪大学 CO デザインセンター
【第 56 回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方（2019 年度冬）」第 1 回 毎日放送 報道局・大牟田 智佐子さん	2019 年 12 月 17 日	大阪大学吹田キャンパス テクノアライアンス棟 1 階 交流サロン	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター ＊授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催。
【第 57 回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方（2019 年度冬）」第 2 回 大阪大学共創機構・本田 哲郎さん	2019 年 12 月 24 日	大阪大学吹田キャンパス テクノアライアンス棟 1 階 交流サロン	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター ＊授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催。
【第 58 回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方（2019 年度冬）」第 3 回 地域ビジネス実践者／起業家・八百 伸弥さん	2020 年 1 月 7 日	大阪大学吹田キャンパス テクノアライアンス棟 1 階 交流サロン	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター ＊授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催。
【第 59 回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方（2019 年度冬）」第 4 回 国立情報学研究所 副所長/弁理士・篠崎 資志さん	2020 年 1 月 14 日	大阪大学吹田キャンパス テクノアライアンス棟 1 階 交流サロン	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター ＊授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催。

【第 60 回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方（2019 年度冬)」第 5 回 哲学者／カフェフィロ 副代表・松川 えりさん	2020 年 1 月 21 日	大阪大学吹田キャンパス テクノアライアンス棟 1 階 交流サロン	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター ＊授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催。
【第 61 回 STiPS Handai 研究会】 シリーズ 科学技術×公共政策 第 1 回　日本の科学技術イノベーション政策動向と国際ビッグプロジェクトに関する考察	2019 年 12 月 19 日	大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構ステューデント・コモンズ 1 階 カルチエ・ミュルチラング	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター ＊授業「科学技術と公共政策 B」の一環として開催。
【第 62 回 STiPS Handai 研究会】 シリーズ 科学技術×公共政策 第 2 回　原子力政策をめぐる政治過程	2020 年 1 月 23 日	大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構ステューデント・コモンズ 1 階 カルチエ・ミュルチラング	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター ＊授業「科学技術と公共政策 B」の一環として開催。
ナレッジキャピタル超学校 大阪大学 CO デザインセンター×ナレッジキャピタル			
【対話で創るこれからの「大学」】シリーズ“向き合い続ける”第 1 回　「わからないこと」を楽しむ	2019 年 6 月 18 日	ナレッジキャピタル、カフェラボ（グランフロント大阪）	主催：一般社団法人ナレッジキャピタル、株式会社 KMO、大阪大学 CO デザインセンター 共催：STiPS
【対話で創るこれからの「大学」】シリーズ“向き合い続ける”第 2 回　異なる文化のあいだに立つ	2019 年 8 月 5 日	ナレッジキャピタル、カフェラボ（グランフロント大阪）	主催：一般社団法人ナレッジキャピタル、株式会社 KMO、大阪大学 CO デザインセンター 共催：STiPS

【対話で創るこれからの「大学」】シリーズ“向き合い続ける”第3回「できない」を「できる」に変えていく力	2019年 10月1日	ナレッジキャピタル、カフェラボ（グランフロント大阪）	主催：一般社団法人ナレッジキャピタル、株式会社KMO、大阪大学COデザインセンター 共催：STiPS
サイエンスカフェ@千里公民館			
サイエンスカフェ@千里公民館「自動運転とわたしたちの暮らし」	2019年 6月26日	千里公民館 第1講座室	主催：豊中市立千里公民館 共催：STiPS、大阪大学COデザインセンター
サイエンスカフェ@千里公民館「再生医療とミライの生き方」	2019年 10月15日	千里公民館 第1講座室	主催：豊中市立千里公民館 共催：STiPS、大阪大学COデザインセンター
共進化実現プロジェクトの一環として開催			
政策立案ワークショップ（宇宙）2019年度第1回	2019年 11月18日	霞が関ナレッジスクエアスタジオ（東京都千代田区）	主催：STiPS
政策立案ワークショップ（宇宙）2019年度第2回	2020年 1月24日	エキスパート倶楽部（東京都千代田区）	主催：STiPS
政策立案ワークショップ（宇宙）2019年度第3回 *新型コロナウイルス感染拡大防止に伴い、メールを利用したオンライン開催	2020年 2月28日～ 3月14日		主催：STiPS

その他			
市民参加型ワークショップ「新しい医療と、くらし ～再生医療のあるべき未来像～」	2019 年 7 月 13 日	UMEDAI 大阪・梅田会議室 UMEDAI-05	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター 後援：日本再生医療学会、大阪大学 21 世紀懐徳堂
1st シンポジウム Innovation and Communication for Global Health Care ―Medical Humanities―	2019 年 9 月 6 日	京都大学医学部 芝蘭会館稲盛ホール	主催：一般財団法人グローバルヘルスケア財団 共催：京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻 健康情報学分野 後援：内閣府、日本医療研究開発機構（AMED）、日本医師会、京都府医師会、京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻、京都大学政策のためのユニット、先端医療推進機構、厚生労働省、京都新聞社
シンポジウム「ELSI 対応なくして、データビジネスなし－産学共創でとりくむ倫理的・法的・社会的課題－」	2019 年 12 月 17 日	ナレッジキャピタル コングレコンベンションセンター ルーム 2＋3	主催：大阪大学データビリティフロンティア機構、株式会社電通 共催：STiPS
国際競争時代の研究公正 （『研究不正と歪んだ科学: STAP 細胞事件を超えて』出版記念シンポジウム）	2020 年 1 月 12 日	大阪大学中之島センター講義室 302	主催：一般社団法人カセイケン（科学・技術と政策研究室） 共催：STiPS
科学技術と社会をつなぐ推理ゲームの使い方 ―― nocobon でアクティブ・ラーニング！	2020 年 1 月 25 日	大阪大学 豊中キャンパス 全学教育推進機構 ステューデント・コモンズ 2 階 セミナー室 A	主催：nocobon 開発チーム 共催：STiPS

3. SciREX 事業への参画

3. SciREX 事業への参画

サマーキャンプへの参画

サマーキャンプは、全拠点の教員や学生が一堂に参集し、各拠点での取り組みをお互いが理解し合うとともに、共通のテーマでの討論や成果の共有、異分野交流などを行い、ネットワークを構築することを目的としています。

2019 年度
実施日：2019 年 8 月 26 日から 28 日（事前ワークショップは、8 月 8 日）
会場：政策研究大学院大学
主催拠点：政策研究大学院大学
参加者数：大阪大学からは学生 14 人と教員 5 人、京都大学からは学生 6 人と教員 5 人

参考資料：過去のサマーキャンプの情報
2013 年度
実施日：2013 年 8 月 23 日から 25 日（事前ワークショップは、8 月 21 日）
会場：オークラフロンティアホテルつくば（茨城県つくば市）
主催拠点：政策研究大学院大学 科学技術イノベーション政策プログラム（GIST）
学生グループワークの設計：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
参加者数：大阪大学からは学生 7 人と教員 3 人、京都大学からは学生 6 人と教員 5 人

2014 年度
実施日：2014 年 8 月 31 日から 9 月 2 日（事前ワークショップは、8 月 27 日）
会場：淡路島夢舞台国際会議場（兵庫県淡路市）
主催拠点：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
参加者数：大阪大学からは学生 7 人と教員 9 人、京都大学からは学生 9 人と教員 6 人

2015 年度
実施日：2015 年 8 月 21 日から 8 月 23 日（事前ワークショップは、8 月 19 日）
会場：名鉄犬山ホテル（愛知県犬山市）
主催拠点：東京大学 科学技術イノベーション政策の科学教育プログラム（STIG）
参加者数：大阪大学からは教員 4 人および学生 7 人、京都大学からは学生 5 人と教員 4 人

2016 年度
実施日：2016 年 9 月 15 日から 17 日（事前ワークショップは、9 月 9 日）
会場：松島一の坊（宮城県宮城郡松島町）
主催拠点：一橋大学 イノベーションマネジメント・政策プログラム（IMPP）
参加者数：大阪大学からは学生 8 人と教職員 5 人、京都大学からは学生 10 人と教員 5 人

2017 年度

実施日：2017 年 8 月 20 日から 22 日（事前ワークショップは、8 月 9 日）

会場：政策研究大学院大学

主催拠点：政策研究大学院大学

参加者数：大阪大学からは学生 5 人と教員 5 人、京都大学からは学生 6 人と教員 3 人

2018 年度

実施日：2018 年 8 月 28 日から 30 日（事前ワークショップは、8 月 9 日）

会場：政策研究大学院大学

主催拠点：政策研究大学院大学

参加者数：大阪大学からは学生 6 人と教員 4 人、京都大学からは学生 4 人と教員 5 人

2019 年度の体制

主催：SciREX 基盤的研究・人材育成拠点

幹事校：政策研究大学院大学

2019 年度のテーマ・趣旨（プログラムより）

「課題解決のための科学技術イノベーション政策」

気候変動への適応や環境汚染、格差や不平等の拡大といった国際～個人単位まで様々な対応が求められる大きな社会的課題から、地方創生や少子化、研究の国際競争力向上といった国単位の課題、防災計画の策定などの基礎自治体単位の課題まで、科学技術イノベーション政策の貢献が求められる課題群は多岐に及びます。一方で、それぞれの課題は単に科学技術の利用や進歩だけでは解決され得ない多面性を持ち、一つの政策で一つの課題を解決できるとは限りません。今回のサマーキャンプでは、現在社会が直面している、もしくは近い将来直面するであろう社会課題へ分け入り、科学技術イノベーション政策という手段で解決しうる要素は何か、根拠を基に検討することで、多様な視点から政策を考えることの重要性を学ぶことができます。

サマーキャンプの模様

学習のねらい（プログラムより）

・全拠点の学生や教員が一堂に参集し、共通のテーマでの討論や成果の共有、異分野交流などを行い、ネットワークを構築します。
・多様なバックグラウンド・視点を持つ参加者と将来ビジョン・シナリオを議論することにより、科学技術イノベーションと経済、社会の関わりを大局的かつ多層的な視点から学びます。
・複数の将来ビジョン・シナリオを共有した上で、テーマごとに政策担当者や実務家へのヒアリング等を行ない、エビデンスに基づいた具体的な新規政策プランの作成を実践的に行います。

サマーキャンプのプログラム

	8 月 26 日（月）	8 月 27 日（火）	8 月 28 日（水）
午前	10:00-　受付 10:30-12:00　プレセッション 「イノベーションとは何か、政策は何を目指すべきか」江藤 学（一橋大学） 「科学技術イノベーション政策の構造」赤池 伸一（NISTEP） 「科学技術イノベーションのガバナンスと社会」松尾 真紀子（東京大学） 「科学と政策の進化:事例を通して学ぶ」有本 建男（GRIPS）	朝食 9:00-14:00　グループワーク グループ毎に集合し、サイトビジットやディスカッション	朝食 9:00-10:30　グループワーク 最終発表に向けての準備 10:30-11:00　休憩 11:00-12:00　最終発表会①
午後	13:00-14:00　オリエンテーション 挨拶、事業紹介、拠点紹介、全体説明 14:15-18:30　グループワーク グループ毎に分かれ、ヒアリングやディスカッション 18:30-20:30　懇親会	14:00-16:30 グループワーク 中間発表へ向けた準備 16:30-18:30　中間発表 18:30-19:30　夕食	13:00-15:25　最終発表会② 15:40-16:00　閉会式 講評、表彰、閉会挨拶

グループワーク（プログラムより）

Topic1 行政におけるデータ活用とダイバーシティ
　ファシリテーター：羅 芝賢（東京大学）
　教職員：森川 想（東京大学）

Topic2 データで解析する科学技術イノベーション
　ファシリテーター：池内 健太（RIETI）
　教職員：原田 裕朗（CRDS）、小柴 等（NISTEP）

Topic3 SDGs 実現に向けたバイオエコノミーのための ELSI とガバナンスの課題を探る
ファシリテーター：松尾 真紀子（東京大学）、平川 秀幸（大阪大学）
教職員：若林 魁人(大阪大学)

Topic4 基礎研究と臨床をつなぐトランスレーショナル・リサーチの促進
ファシリテーター：黒河 昭雄（神奈川保健福祉大学/GRIPS）、隅藏 康一（GRIPS）
教職員：安藤 二香（GRIPS）

Topic5 Access to Medicine under Doha Declaration and TRIPS Agreement
ファシリテーター：隅蔵 康一（GRIPS）、ElHassan ElSabry（GRIPS）
教職員：岡村 麻子（GRIPS）、Wahid Bux MANGRIO（GRIPS）、Chih-Cheng CHANG（GRIPS）

Topic6 高齢社会の医療費の行方
ファシリテーター：カール ベッカー（京都大学）
教職員：渡邉 浩崇（大阪大学）

Topic7 Aging in Place の実現に向けた地域コミュニティ形成
ファシリテーター：祐野 恵（京都大学）
教職員：田渕 敬一（京都大学）、諸賀 加奈（九州大学）

Topic8 廃プラスチック問題解決のためのイノベーションと政策
ファシリテーター：金 東勲（一橋大学）
教職員：服部 京香（一橋大学）、木村 めぐみ（一橋大学）、青島 矢一（一橋大学）、江藤 学（一橋大学）

Topic9 Society5.0 時代に向けた海洋分野のイノベーション
ファシリテーター：鈴木 千賀（九州大学）
教職員：菊地 乃依瑠(GRIPS)、佐々木 達郎(GRIPS)

Topic10 児童虐待の根絶－科学技術に何ができるか
ファシリテーター：小林 俊哉（九州大学）
教職員：永田 晃也（九州大学）、曹 勇(九州大学)、八木 絵香(大阪大学)

政策のための科学オープンフォーラムへの参画

第 2 回科学技術イノベーション政策のための科学オープンフォーラム「科学による政策課題解決への挑戦～たゆまぬ共創・協働～」（主催：文部科学省、共催：政策研究大学院大学科学技術イノベーション政策研究センター（SciREX センター））が、2020 年 1 月 15 日に開催されました。

本拠点は、3 件のセッションに関わりました。また、本拠点で学ぶ学生数名がポスター展示を行いました。

セッション①

タイトル：事例から紐解く、個票データを含めた行政データを利活用する際の教訓と展望
日時：2020 年 1 月 15 日（水）14:50~16:05
場所：政策研究大学院大学 大会場
司会進行：小林 信一（広島大学）
話題提供：秋生 修一郎（足立区）、島津 太一（国立がん研究センター）、祐野 恵（京都大学）

産業領域ではビッグデータの活用が急速に進み、データ利活用が新たな競争力の源泉となる一方、機微な情報が本人の許諾なくマーケティングに用いられるなど、データ活用上の倫理や信頼が課題となっています。政府でも EBPM(Evidence Based Policy Making)の推進や行政データの活用が方針として示される中、匿名化された個票データを政策領域横断的に統合して分析することも検討されています。個票データの利活用は自治体レベルで先行しており、それらの事例から学ぶべきことは多くあります。本セッションでは、個票データを用いた政策研究を充実させ、研究成果を活かした政策形成過程を構築するために、これまでの実践から留意事項や教訓を供覧します。（企画セッションの概要より）

セッション②

タイトル：『ポスト真実』時代 3 年目の科学技術
日時：2020 年 1 月 15 日（水）14:50~16:05
場所：政策研究大学院大学 中会場
司会進行：平川 秀幸（大阪大学）
話題提供：神里 達博（千葉大学）、西田 亮介（東京工業大学）、細野 光章（岐阜大学）

2017 年頃から「ポスト真実」の時代と言われ始め、3 年目を迎えます。この間、ディープフェイクやフィルターバブル等、最新の科学技術を用いたデジタル情報の発信にまつわる論争は勢いを増しています。SNS のトラフィックの急増によってメディアや報道に対する市民社会の姿勢に変化が生じていることは、政策課題の解決にも影響する重要な要素です。科学がこの現状にどのように関与していると捉えるか、今後どのように関与すべきと考えるか、科学技術への信頼を高めるためにいま必要なことは何か、参加者と共に検討します。（企画セッションの概要より）

セッション⑤

タイトル：政策研究と政策形成の『共創・協働』を如何に進めるか

日時：2020 年 1 月 15 日（水）17:30~18:00

場所：政策研究大学院大学 大会場

司会進行：小林 信一（広島大学）

話題提供：有本 建男（政策研究大学院大学）、小林 傳司（大阪大学）、小林 俊哉（九州大学）、小林 直人（早稲田大学）、坂下 鈴鹿（文部科学省）、城山 英明（東京大学）、祐野 恵（京都大学）、吉岡 徹（一橋大学）

SciREX 事業が掲げる政策研究と政策形成の「共進化」は、他の研究機関も独自のアプローチで取り組んでいます。本セッションでは、SciREX 事業及び類似のイニシアティブの成果を供覧するとともに、社会全体でこれらのアプローチを発展させる方向性や課題、今後の論点を皆さんと考えます。（企画セッションの概要より）

他拠点への講師派遣

他拠点への講師派遣も積極的に行っています。大阪大学の平川秀幸教授が東京大学や九州大学での講義を行いました。2019 年 11 月 6 日（水）、東京大学 科学技術イノベーション政策の科学教育プログラム（STIG）が提供している科目「科学技術イノベーション政策研究」において、リスクの問題を中心に科学技術の公共的問題とそのガバナンスについて論じるとともに、責任ある研究・イノベーション（RRI）の概要を紹介しました。また、2019 年 10 月 26 日（土）には、九州大学 科学技術イノベーション政策教育研究センター（CSTIPS）が提供している科目「科学技術社会論概説」において、STiPS の教育カリキュラムを紹介した上で、科学技術社会論（STS）については、リスクの問題を中心に科学技術の公共的問題とそのガバナンスについて論じるとともに、責任ある研究・イノベーション（RRI）の概要を紹介しました。

コアコンテンツ作成、行政官研修への講師派遣

「科学技術イノベーション政策の科学」コアコンテンツの作成にむけて、運営委員会等での議論に参加し、主に第 3 章「科学技術イノベーションと社会」の執筆を担当しました。また、コアコンテンツを利用した行政官研修には大阪大学の小林傳司教授が講師として参加しました。

4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施

4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施

本拠点 STiPS は、「科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間をつなぐことを通じて政策形成に寄与できる人材」の育成を目的としています。こうした人材育成プログラムの目的を達成すべく、ELSI や公共的関与に関する研究の実践的展開を図り、その成果を検証しつつさらなる研究に結びつけるために、多様な参加型イベントを実施しました。

また、公共的関与に関わる基盤的研究の発展に向け、海外の大学機関との積極的な連携による研究を試みると同時に、そうした連携を視野に入れた海外調査及び発表等を行ってきました。2019 年度の国際連携の推進に関わる活動については、「7. 国際連携の推進」を参照ください。

阪大拠点主催：「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）

「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）では、学内外の研究者や実務家にお越しいただき、話題提供いただきます。学生だけでなく、教員も相互に学び合うことを目的としています。

第 49 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

○タイトル：科学技術と社会のつなぎ方 －宇宙政策の未来について考える－
○ゲスト：佐伯 和人（大阪大学大学院理学研究科 宇宙地球科学専攻　准教授）
　　渡邉 浩崇（大阪大学 CO デザインセンター　特任准教授）
○日時：2019 年 4 月 23 日（火）16:30～18:00
○場所：大阪大学豊中キャンパス 理学研究科 H 棟 2 階 コミュニケーションスペース
○主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
○共催：大阪大学大学院理学研究科、大阪大学 CO デザインセンター

2019 年 4 月 23 日（火）、大阪大学豊中キャンパス 理学研究科 H 棟 2 階 コミュニケーションスペースにおいて、STiPS Handai 研究会「科学技術と社会のつなぎ方 －宇宙政策の未来について考える－」を開催しました。学内外からあわせて 48 人が参加しました。今回は理学研究科にて開催したこともあり、理学研究科の学生や教員が多く参加してくださいました。

今回の研究会のゲストはお二人。大阪大学大学院理学研究科宇宙地球科学専攻の佐伯 和人准教授と、大阪大学 CO デザインセンターの渡邉 浩崇特任准教授でした。お二人とも、宇宙探査に関わる研究者ではあるものの、アプローチは全く違います。佐伯先生の専門分野は惑星地質学、鉱物学。そして、渡邉先生の専門分野は国際政治学、外交史、宇宙政策、宇宙法。

同じもの（今回は宇宙探査）をターゲットにしていても分野が異なると研究者同士がディスカッションをする機会はそれほど多いわけではありません。まして、その本音のディスカッションが学生の前で繰り広げられる機会はほとんどないのではないでしょうか。今回の STiPS Handai 研究会「科学技術と社会のつなぎ方」の目的の 1 つは、「異なる分野（主に理工系と人文社会系）の研究者同士のディスカッションの場をつくり、それを大阪大学の学生にも開く」ということでした。

まず二人のゲストから、宇宙政策の未来についての 3 つの問い、「なぜ宇宙探査するの？」「日本は「宇宙先進国」であって欲しい？」「宇宙に人を送りたい？」、これらを考えるための材料をお話していただきました。

話題提供 1 人目は、佐伯先生です。惑星科学の知見や、実際に月の探査に関わっておられるご経験などを踏まえて、宇宙探査の目的、宇宙に関する技術や研究の国際的な状況、有人探査などについて、日本の立ち位置や今後の動きなどについてのお話でした。

話題提供 2 人目は、渡邉先生です。政策や法律の観点から、日本の宇宙政策の現状や意義、日本の宇宙科学探査や有人宇宙活動について今後、考えるべき論点、また、宇宙資源に関する国際的な状況などについてのお話しでした。

その後、八木絵香准教授の進行で、参加者のみなさんも含めたディスカッションの時間をもちました。参加者からは、次々に質問やコメントが寄せられました。宇宙資源についての考え方や国際法の状況、政策費用の配分の決定方法、宇宙ゴミの定義や事故の際の損害賠償、宇宙探査をめぐる国際協力の現状や得られたデータの共有化、宇宙政策への一般市民の意見の反映など、さまざまな観点から活発な発言がありました。

第 50 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

○タイトル：つなぐ人たちの働き方（2019 年度夏）#1
○ゲスト：竹内 慎一（NHK エデュケーショナル 教育部　プロデューサー）
○日時：2019 年 6 月 18 日（火）14:40〜16:10
○場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 ステューデント・コモンズ 2 階 セミナー室 A
○主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
○共催：大阪大学 CO デザインセンター

2019 年 6 月 18 日（火）、セミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2019 年度夏）」の第 1 回を開催しました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。今回は、NHK エデュケーショナルの竹内 慎一さんをゲスト講師としてお招きし、「わからないことの面白さ」を伝えることについて、自身のご経験やご意見を紹介していただきました。このセミナーには、大阪大学・京都大学の学生、教職員に加えて、学外からの参加者など 37 人が集まりました。

この日のゲストは、NHK エデュケーショナルでプロデューサーとして活躍されている竹内 慎一さんでした。もともと大学・大学院在籍中は動物生態学を専攻していた竹内さん。科学の魅力を広くわかりやすく伝える仕事ができないかと考え、NHK に就職されました。近年は「大科学実験」「考えるカラス〜科学の考え方〜」「カガクノミカタ」などの科学教育番組や、不登校・多様な学びについて扱った番組を中心に制作されています。

竹内さんには、今まで関わってきた番組を順番にご紹介いただきました。「なぜその番組を作ろうと思ったのか」、「どういう工夫を凝らしたのか」といった点を交えながらのお話でした。

竹内さんも、最初は教科書に準拠した番組制作をしていました。伝える内容は学習指導要領に記載されていることと決まっていて、その内容をいかにわかりやすく伝えるかということにのみ注力したものでした。しかし、徐々に、独自のコンセプトをもつ番組を企画するようになったのだそうです。

「大科学実験」（2010 年から現在まで放送）はそのうちの 1 つです。誰もが当たり前だと思っている科学の知識は本当に正しいのか、実際やってみたらどういうことが起こるのか、というところに焦点を当てている番組です。この番組では、実際に大規模な実験をしてみせ、視聴者に手触り感や納得感を得てもらうような工夫をしたとのことでした。

その後、竹内さんが制作した番組が、「考えるカラス〜科学の考え方〜」（2013 年から現在まで放送）です。科学に対して自ら考える姿勢が重要であると考え、企画しました。この番組では、単に知識を伝えることはしていません。番組の中で「考えてみる」実践ができる内容になっています。そして、番組を見ているなかで湧き上がる疑問への答えは番組内では決して明かされません。

この「考えるカラス」制作のきっかけの１つを紹介していただきました。竹内さんは 2011 年の秋、東日本大震災で起こった原発事故を踏まえて企画されたシンポジウム（サイエンスアゴラシンポジウム「科学・技術でわかること、わからないこと」）に聴衆の１人として参加されたのだそうです。その中で、パネリストの１人が、「『ためしてガッテン』という番組があるが、簡単に“ガッテン”してはだめなんじゃないか」という発言をしました。『ためしてガッテン』の番組作りにも関わったことのある竹内さんはフロアから思わず発言してしまい…。それがきっかけで、次年度に開催された続編のシンポジウムにはパネリストとして呼ばれることになりました。そこでは、科学の知識は絶対ではなく、覆されることもあるということをどのように伝えていくことができるだろうかという議論をすることができたということでした。

一見不親切ともいえるこの「考えるカラス」は、反響が非常に大きかったそうです。一部批判的なコメントもありましたが、多くは「面白かった」「会話が増えた」という好意的なものでした。

ここまでは番組が視聴者に問いを投げかけていた訳ですが、子どもたちが自ら学びたいことを学んでほしい、という思いから次の番組「カガクノミカタ」（2015 年から現在まで放送）が生まれました。この番組では、ふしぎだと思うことを育む、わからないこと自体を面白いと思えるようにする、ということを目指しています。

ただ、竹内さん自身も、分からないことも面白いと思ってもらえるような見せ方にはまだまだ工夫が必要だと感じているそうです。また、「分からない」ということに対して子どもたちが罪の意識を感じないようにするには、周りの大人たち、特に学校の先生たちの協力が必要不可欠であるということもおっしゃっていました。

会場からは、子どもたちの教育に関する質問が多く飛び出していました。「今までの学校の教科書や、体系的に教えるという従来の教育方法は良くなかったということなのか」という質問に対しては、「それ自体が悪いのではなく、系統学習を否定するわけではない。ただ、その学び方だけでは足りない部分もあるので、そこを補完できるような番組や番組を使った活動を提案していきたい」というお話をされていました。これからの時代、知識を簡単に得ることのできる世の中になっていく中で、考える力を身に着けることが重要になるという理解が、教育の現場でも必要であることをおっしゃっていたことが印象的でした。

文：安井裕人（生命機能研究科 博士前期課程）、「科学技術コミュニケーション入門 B」担当教員

第 51 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

○タイトル：つなぐ人たちの働き方（2019 年度夏）#2
○ゲスト：奥西 亮太（株式会社毎日放送 報道局 報道部　記者）
○日時：2019 年 6 月 25 日（火）14:40〜16:10
○場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 ステューデント・コモンズ 2 階 セミナー室 A
○主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
○共催：大阪大学 CO デザインセンター

2019 年 6 月 25 日（火）に、科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2019 年度夏）」第 2 回が開催されました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。会場には学内・学外から合わせて 24 人の参加者が集いました。

この日は、毎日放送 記者の奥西 亮太さんをお招きしました。奥西さんは大阪大学大学院理学研究科生物科学専攻の修了生です。と同時に、副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策（STiPS）」の一期生でもあります。

まずは、奥西さんには「ローカルメディアで科学を強みにするということ」というタイトルで話題提供をお願いしました。学生時代は神経で働くタンパク質について研究していた奥西さんが、なぜ報道に関わろうと思ったのか、番組をつくる上で何を大切にしているのか、ニュースが社会に届くまでにはどのような工程があるのか、など様々なお話をしていただきました。

・科学報道を志した動機

理学研究科に進学した当時は、研究者になろうという気持ちが強かったそうです。しかし、2011 年 3 月に発生した東日本大震災後に、世の中で起こっていたことを垣間見る中で、当時、次のように思ったそうです。「コミュニケーションがうまくいっていないことが多い。世の中の人がみな『科学』という文法を理解していたら、いがみ合わなくなるのではないか。『科学』という文法を知っている自分を活かすことのできる仕事があるのではないか」

このような経緯もあって、科学報道という選択肢を考えるようになり、そして、毎日放送に就職することになったそうです。

・ニュース番組ができるまで

ニュース番組で取り扱う内容は主に次の 3 つに分けられます。それぞれ放送される時間にも差があります。

1）普通の話題（1〜1.5 分）
2）注目されている話題（2〜3 分）
3）特集（7.5〜10 分）

また、ニュースが視聴者に届くまでの流れとしては次のようなものが一般的だそうです。まず外勤の記者が取材をし、原稿を執筆する→内勤の記者が加筆・編集をする→デスクがチェックする→放送される。

扱う話題としては、事件や事故だけでなく、季節ネタや街ネタ、プレスリリースや記者会見で発表されたもの、独自に調査を行なって明らかになったもの（調査報道）など多岐にわたります。中でも、「価値のあるニュース」として優先的に放送されるものは、国民の「生命」と「財産」に関わるものだそうです。地震や台風など災害時の報道が代表的な例です。

・大切なのは「画になるか」

奥西さんが特に強調されていたのは、「“ニュースの大きさ” はもちろん大切ですが、大切なのは “画になるか” です」ということでした。特にテレビで放送されるものなので、目で見て、耳で聞いて伝わるかどうかということを意識されているそうです。

医療に関するトピックは、患者、医者、病室など、“画” になるものが多く、扱いやすい一方で、奥西さん自身の専門でもあった分子生物学など目に見えないものを扱うことはなかなか難しいのだそうです。例えば、NHK が放送している NHK スペシャルのような番組であれば、CG をつかったりスタジオのセットを工夫したりすることで「見えないもの」を扱うこともできる訳ですが、ローカルメディアができることやすべきことはまた別です。同じ放送局であっても、異なる体制で番組作りに臨んでいるというお話も聞くことが出来ました。

・テレビで「科学を報道する」ということ

精通していないと中々分かってもらうことが難しい「科学」ですが、どのように伝えるか、専門用語をどこまで提示するか、といった葛藤を日々感じながらお仕事をされているそうです。

お話の最後には、科学報道に対して奥西さんが日々考えていらっしゃる多様な観点（誰のための報道か、「科学的である」ことは人を幸せにするか、など）を提示していただきました。

最後に、このセミナーの司会進行でもあり、学生時代の奥西さんを知っている八木絵香准教授からはこんな質問が。「奥西さんは以前は、どちらかといえば、「世の中はもっと科学的であるべきだ！」というような学生だった訳ですが、今振り返ってみていかがですか」。この質問に対して奥西さんが、「仕事を通じて、いろいろな人と出会って話す中で、多様なものの見方がある、「科学」はあくまでその１つの見方、ということが理解できるようになった」というコメントをされていたのが印象的でした。

文：早見直樹（基礎工学研究科 博士前期課程）、「科学技術コミュニケーション入門 B」担当教員

第 52 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

○タイトル：つなぐ人たちの働き方（2019 年度夏）#3
○ゲスト：白井 哲哉（京都大学学術研究支援室（KURA）企画広報グループ 副グループリーダー／URA）
○日時：2019 年 7 月 2 日（火）14:40〜16:10
○場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 ステューデント・コモンズ 2 階 セミナー室 A
○主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
○共催：大阪大学 CO デザインセンター

2019 年 7 月 2 日(火)、京都大学学術研究支援室の白井 哲哉さんをお招きして、科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方」第 3 回を開催しました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。この日の会場には、授業履修生以外にも、URA に興味のある大学院生や学外からお越しの方など計 31 人が参加しました。

白井さんは、岡山大学大学院で生命科学を学び、博士号を取得後、京都大学大学院生命科学研究科 特任助教、京都大学人文科学研究所特定助教を経て、2012 年より京都大学学術研究支援室（KURA）でリサーチ・アドミニストレーター（University Research Administrator: URA)として働いています。この日の前半部分では白井さんから、URA が担っている具体的な仕事内容や KURA という組織についてお話しいただきました。

まずはじめにご自身のキャリアについてご紹介いただきました。岡山大学で生命科学分野の研究をされていた白井さんは、この先、生命科学の研究者として生きていくための「武器」が欲しいと考えていました。そこで、科学と社会の関係を考えたり、生命科学の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）について考えたりする研究分野に足を踏み入れたのだそうです。当時は、生命科学の研究者に戻ることを考えていたそうですが、次第に生命科学を含む学術研究がおかれている研究環境を改善したいと考えるようになり、京都大学で URA として働くことになりました。KURA の立ち上げメンバーの 1 人です。

URA とは、「大学等において、研究者とともに研究活動の企画・マネジメント、研究成果活用促進を行うことにより、研究者の研究活動の活性化や研究開発マネジメントの強化等を支える業務に従事する人材」（文部科学省のウェブサイトより）のことです。URA という職種は海外では古い歴史がありますが、日本では 2012 年から文部科学省が主導をして整備を始めました。URA の数は増えてはいるものの、人材は不足しているという現状だそうです。

京都大学では研究力強化を目的に、KURA が設置されました。現在では、約 50 人の URA が働いており、その専門分野や年齢構成などバックグラウンドは多様です。本部に属する URA と学内それぞれの部局に属する URA に分かれて仕事をしていた時期もあったそうですが、現在では一体的な活動を行うことができるように、京都大学の URA 全員が KURA 所属になるような体制をとっているそうです。一元化したことによって、URA 間の連携がしやすく、そして、速やかな情報共有ができ、また、URA の育成するための環境を整えることもできるようになったそうです。

KURA の業務内容は、主に 3 つ。1）研究者を支援すること、2）大学の経営や戦略を考えること、だけでなく、3）URA が活動できる基盤を整えること、が挙げられます。

具体的には、以下の通りです。
1）研究者を支援すること
・競争的資金と研究者の適切なマッチングを行う
・学際研究やビックプロジェクトなどの立ち上げを支援するための学内ファンドを設計する
・国際的な共同研究を支援する
・産官学連携を支援する（ニーズとシーズのマッチングを行う）
・研究成果の社会還元を行う　など

2）大学の経営や戦略を考えること
・大学の研究力を分析する
・大学の経営戦略の企画・立案を支援する　など

3）URA が活動できる基盤を整えること
・「URA」そのものについて知ってもらうための広報を行う
・URA 育成カリキュラムを実行する

大きな大学では、部局間の連携がしにくい状態にありますが、組織間の連携が十分に行われるように、KURA が各部局と本部事務組織などの全学研究支援組織のハブとしての機能を担っているそうです。学内での新しい事業を立ち上げるときには、現場でのすり合わせをきちんと行うことを心がけているそうです。

講演後は活発な議論が行われ、URA について理解を深める有意義な時間でした。KURA は大学内の構成員（執行部や事務職員や研究者）をつなぐ役割だけでなく、研究を他大学や省庁、企業、市民ともつなぐ組織で、仕事内容が多岐にわたることが印象的でした。

文：佐藤瑞華（理学研究科生物科学専攻 博士前期課程)、「科学技術コミュニケーション入門 B」担当教員

第 53 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

○タイトル：つなぐ人たちの働き方（2019 年度夏）#4
○ゲスト：西岡 麻須美（大阪府健康医療部食の安全推進課　課長補佐）
○日時：2019 年 7 月 9 日（火）14:40〜16:10
○場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 ステューデント・コモンズ 2 階 セミナー室 A
○主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
○共催：大阪大学 CO デザインセンター

2019 年 7 月 9 日（火）、科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2019 年度夏）」第 4 回が開催されました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。この日のゲストは大阪府健康医療部の西岡 麻須美さんでした。会場には、18 人が集まりました。

まずは、西岡さんによる話題提供です。「地方自治体が果たす役割―生産から消費まで、食の安全安心をつなぐ―」というタイトルで、西岡さんが現在のお仕事をされるようになった経緯、行政（主に大阪府）による食品の安全確保に向けた取り組みなどをお話いただきました。

西岡さんは、大阪府立大学獣医学科のご出身です。入学前は「動物のお医者さん」になりたいと思っていたものの、所属する講座を決める段階になって進路をいろいろ考えたのだそうです。動物病院に勤務して病気になってしまった動物を治療するのではなく、病気を未然に防ぐことに関わりたい、特に、予防に関する取り組みを行ったり、制度を作ったりすることで世の中に役立ちたいという思いを持つようになり、行政機関で働くことを決めました。大阪府に技術職として採用され、現在のご所属は、大阪府健康医療部食の安全推進課。大阪府の食の安全安心に関する推進計画を立案したり、府民への食中毒に関する理解を推進するセミナーを企画したり、そのためのチラシを制作したりするなど、幅広いお仕事をされています。

大阪府に獣医師職として採用されると、家畜の病気の予防に関する業務（畜産衛生）、もしくは、健康・医療に関する業務（食品衛生）に関わることになります。健康・医療に関わる業務に携わっている獣医師は、食の安全推進課以外に、府内に 10 カ所ある保健所や大阪府中央卸売市場にある食品衛生検査所、食肉衛生検査所などで活躍されているそうです。食品が私たちの手に届く前に、行政が食品衛生について広く関わっているのです。

西岡さんが所属されている「食の安全推進課」は、以前は「食品衛生課」という名称でした。「食品衛生」から「食の安全安心」というように守備範囲が広がったのは、食品安全基本法が施行された 2003 年頃のこと。そのあたりからリスクコミュニケーションという言葉が出てくるようになりました。リスクを評価するところと、リスクを管理するところ、を分けるようになったのもこの頃だそうです。

大阪府に関しては、2007 年に大阪府食の安全安心推進条例が制定されました。この条例に基づき策定されている第 3 期大阪府食の安全安心推進計画（2018 年度～）では、「行政、食品関連事業者、府民がそれぞれの責務・役割を認識し、互いに理解し、共に協力して食の安全安心の確保に取り組むこと」が目指すべき姿とされ、食の安全安心に関する情報提供の充実や事業者の自主的な取り組みの促進が施策の柱として挙げられています。大阪府は、府民に向けた情報提供を行ったり、シンポジウムを開催したりしてきました。

また、大阪府では、食の安全安心に関する府民の意識調査を継続的に実施しています。調査の結果をみると、2007 年頃には、食品に対する「不安」が「安心」を大きく上回っていましたが、2010 年以降、「安心」が「不安」を上回るという結果になっているそうです。しかし、まだまだ課題は多く、特に、巷にあふれている食品の安全性に関する「思い込み」にはいつも悩まされているそうです。例えば、自然由来・新鮮なもの＝安心で、化学・有害物質を少しでも含むもの＝危険、というイメージを私たちは抱きがちです。また、リスク認知のギャップも課題の 1 つです。実際のリスクよりも大きく感じてしまったり（例：ある地域・国産の食品は危険だと過敏に反応してしまう）、逆に実際のリスクよりも小さく感じてしまったり（例：お店で提供される肉や刺身は安全だと思い込んでいる）します。消費者が提供者に「食品の安全を本当に確かめる」役割を任せきってしまうのではなく、消費者自身が食品のリスクを理解して、選択することが大切であるということを理解して欲しいと日々考えているそうです。

西岡さんは、食品衛生行政の課題として、関心のない人へどう伝えるべきか、価値観を押し付けないためにはどうしたらよいか、ということを挙げていらっしゃいました。安全性の確保を本人が確認したうえで選択してもらうことが大事ではあるが、健康被害を防ぐためには譲れないこともある、とのこと。こういった課題に向き合うために、デザインやイラストが得意な職員がチラシを作ったり、食中毒の統計的なデータを発表したり、SNS を使った情報発信を取り入れたりしているそうです。今、大阪府が力を入れているのは、食肉の生食が原因で起こる食中毒を減らすこと、だそうで、「生で食べたらあカン！ピロバクター」というキャッチフレーズが掲載されたカンピロバクター食中毒予防啓発ツールをご紹介いただきました。（この WEB ページから見ることができます。）

最後は、西岡さんのお仕事への思いを聞かせていただきました。印象に残ったのは、「被害にあったときに”知らなかった”と言われることを減らしたい」という言葉でした。消費者の選択の自由を守りつつ、でも、府民の健康を守りたい、という強い気持ちが伝わりました。

西岡さんのお話に続いて、質疑応答が行われました。都道府県別の制度の違いについて、アレルギー表示に関する規制について、賞味期限の設定の仕方や食品ロスについて、など、様々な観点の質問にお答えいただきました。

文：田川翔大朗（生命機能研究科 博士前期課程）、「科学技術コミュニケーション入門 B」担当教員

第 54 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

○タイトル：つなぐ人たちの働き方（2019 年度夏）#5
○ゲスト：本田 隆行（科学コミュニケーター（フリーランス））
○日時：2019 年 7 月 16 日（火）14:40〜16:10
○場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 ステューデント・コモンズ 2 階 セミナー室 A
○主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
○共催：大阪大学 CO デザインセンター

2019 年 7 月 16 日（火）、フリーランス科学コミュニケーターの本田 隆行さんをお招きして、科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2019 年度夏）」第 5 回を開催しました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。この日の会場には 21 人が集まりました。大阪大学の学生や教職員だけでなく、学外からお越しの方も参加されていましいた。

本田さんには、最初の 30 分間でご経歴とフリーランスの「科学コミュニケーター」という職業について紹介していただきました。本田さんは大学院で惑星科学を学んだ後、研究の道には進まず、枚方市役所に就職。卒業後 5 年間は地方公務員としてお仕事をされていました。その後、ふとしたきっかけで応募した日本科学未来館（以下、未来館）に科学コミュニケーターとして採用されました。展示解説をしたり、時にはテレビ番組に出演したりする（NHK E テレ「サイエンス ZERO」の企画で初代キングオブサイエンスコミュニケーターに選ばれる！）など、多岐にわたって活躍されました。

しかし、未来館の科学コミュニケーターは任期が最長 5 年。その後の進路を考えながら、あることを疑問に思ったのだそうです。これまでに未来館から巣立っていった科学コミュニケーターは 100 人以上、大学や博物館などで実施されている科学コミュニケーター養成講座を受講している人もかなりいるはず。にも関わらず、実際に社会で「科学コミュニケーター」として活躍している人に出会ったことがあるだろうか？と。「もし未来館の外に出たら、誰に、どんな風に必要にされるのだろうか」ということを自分で確かめるために、フリーランスの科学コミュニケーターになることを決意したのだそうです。「3 年やってだめだったらこの職業には需要がない」と、覚悟を決めて始めたフリーランスの科学コミュニケーターですが、今年で 5 年目を迎え、現在では科学館の展示監修やイベントの司会、ワークショップの企画実施、執筆など幅広いお仕事をされています。

本田さんの考える科学コミュニケーターとは、「間（あいだ）」をつなぐ仕事をする人です。専門家と一般市民との間、展示発注者と受注者との間、など様々な「間」に入り両者をつなぐ仕事だと言います。しかし、本田さんがよく受けるのは「科学コミュニケーターって結局何ができるの？」という質問です。この質問に答えるのは非常に難しいそうです。というのも、本田さんのお仕事のスタンスは、依頼者のお困りごとに合わせて自分ができることを提供する、というものだからです。一方、一緒に仕事をした

ことのある依頼者からは「こういう人がいると本当に助かります！」という言葉をもらえるそうです。その度に自分の立場の必要性を感じるものの、新たな依頼者に出会うとまた「何ができるの？」と聞かれてしまう…。科学コミュニケーターの価値にどのように気付いてもらうのかが今後の課題だと考えておられました。

本田さんからのお話の後、質疑応答が行われました。まず「初対面の人と話をする時に意識することは？」という質問に対して、「とにかく聞くこと。そして相手に合わせて自分の立ち振る舞いを柔軟に変えること。」とおっしゃっていました。このようなコミュニケーション能力は市役所時代に培われたものだそうで、科学コミュニケーターだけでなく、どの職業においても重要なものだとおっしゃっていました。

また、フリーランスとして生きていくために必要なことは、相手が欲するものをいかに提供できるかである、という話題にもなりました。様々な依頼に応えるために、自分の「武器」をできるだけ多く持つように努力しているとお話されていました。

さらに、「本田さんの目指すところは？」という質問に対しては、「科学コミュニケーターとしてのロールモデルになりたい。そもそも科学コミュニケーターという人がいることが認知されなければ、必要なのかそうでないのか、どういう役割を担うべきなのかという議論すらできない。」というお答えでした。この他にも多くの質問が飛び交い、活発な意見交換が行われました。

本田さんは、ご自身の経歴やお仕事についてフランクにお話してくださいました。「科学コミュニケーター」という今までにない新たな立場で科学と社会をつないでいる本田さんのお話は大変興味深く、「つなぐ仕事」について新たな視点を得ることができました。

文：藤原里英子（理学研究科生物科学専攻 博士前期課程）、「科学技術コミュニケーション入門 B」担当教員

第 55 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

○タイトル：科学技術と社会のつなぎ方－ゲノム編集を活用！？ミライの食品－
○ゲスト：村中 俊哉（大阪大学大学院工学研究科 生命先端工学専攻　教授）
　　平川 秀幸（大阪大学 CO デザインセンター　教授）
○日時：2019 年 7 月 23 日（火）17:00～18:30
○場所：大阪大学吹田キャンパス センテラス 3 階 センテラス・サロン
○主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
○共催：大阪大学大学院工学研究科、大阪大学 CO デザインセンター

2019 年 7 月 23 日（火）、大阪大学吹田キャンパス センテラス 3 階 センテラス・サロンにおいて、STiPS Handai 研究会「科学技術と社会のつなぎ方 －ゲノム編集を活用！？ミライの食品－」を開催しました。工学研究科の学生や研究者をはじめ、学内外からあわせて 29 人が会場に集いました。

科学技術と社会のつなぎ方シリーズは、「異なる分野（主に理工系と人文社会系）の研究者同士のディスカッションの場をつくり、それを大阪大学の学生にも開く」ことを目指しています。2019 年 4 月にはその第一弾となる「宇宙政策の未来について考える」を開催しました。続く今回はゲノム編集技術を取り上げました。

この日の登壇者は、ゲノム編集技術を使った作物の開発を進めている村中 俊哉教授（大阪大学大学院工学研究科 生命先端工学専攻）と、食品をめぐる科学技術と社会の動きについて研究している平川 秀幸教授（大阪大学 CO デザインセンター）でした。お二人それぞれからの話題提供の後、八木 絵香准教授（大阪大学 CO デザインセンター）の進行で会場を交えたディスカッションの時間を持ちました。

村中先生から主にお話しいただいたのは、ご自身の研究室で取り組まれている、ゲノム編集技術を用いて開発している毒のないジャガイモに関わる研究について。ゲノム編集技術と遺伝子組換え技術の類似点や相違点について、品種改良や育種の観点から詳しい説明がありました。そしてこのゲノム編集技術を用いた食品開発を進めていくために連絡協議会を立ち上げたこと、技術開発者と消費者や生産者、流通に関わる人など、さまざまな立場の人たちが話し合うという取り組みを始めたことについても紹介されました。

平川先生からは、遺伝子組換え食品をめぐる規制などのこれまでの動きについて丁寧な解説がなされました。その流れや教訓を踏まえてゲノム編集技術を用いた食品をどのように扱っていくべきかについて、いくつかの論点が示されました。

会場からは、「消費者はゼロリスクをシビアに要求しすぎているのではないか？」「ガレージバイオ、DIY バイオについてどう考えているか？」「ゲノム編集技術はリスクが過大に注目されていないだろうか？」といった質問やコメントがありました。

終盤には、村中先生と村中研究室で研究に取り組む大学院生 世戸口貴宏さんによるデモンストレーションが行われました。トイレットペーパーをゲノムに、そして、ペーパーに貼られた丸いシールを遺伝子に見立てて、既存の育種に用いられてきた技術とゲノム編集技術の違いを説明するというものでした。

事後アンケートには、「安全性のための論争をするだけではなく、その技術をつかってどのような社会にしていきたいのかということを考えることが大事ということが話されていたことが新鮮だった」「新しい技術を活用する時のメリットとは、誰のどんなメリットになりうるものなのかということを考えていかなければならない」というような感想が書かれていました（*実際にアンケート用紙に記入された文章に編集を加えて掲載しています)。

異なる分野の研究者が出会うことによって、お互いに新しい視点や考え方を得られるような対話の場づくりをこれからも継続していきたいと思っています。

第 56 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

○タイトル：つなぐ人たちの働き方（2019 年度冬）#1
○ゲスト：大牟田 智佐子（毎日放送 報道局 クロスメディア部　部次長）
○日時：2019 年 12 月 17 日（火）14:40〜16:10
○場所：大阪大学吹田キャンパス テクノアライアンス棟 1 階 交流サロン
○主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
○共催：大阪大学 CO デザインセンター

2019 年 12 月 17 日（火）、毎日放送報道局・大牟田 智佐子さんをお招きして、科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2019 年度冬）」第 1 回が開催されました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。この日の参加者は 15 人。大阪大学の学生や教職員だけでなく、学外からも人が集まり、意見を交わしました。

この日、まずは大牟田さんより「放送メディアの現場から考える震災 25 年」というタイトルでお話を伺いました。

大牟田さんは英文学科を卒業後に毎日放送に入社され、入社 4 年目にテレビ報道の記者になられました。当時近畿地方に起こると予測されていた地震を見据え、突然「地震専門の記者」に任命されたそうです。地震について主に科学技術の側面から取材を始めることに。ところが、1 年も経たないうちに阪神・淡路大震災が起こりました。実際の「震災」で、地面の揺れだけではない震災の実態や復興までの長い苦しみを実感されました。この体験をもとに、現在も災害報道に携わっておられるそうです。その後ラジオ報道に異動、2011 年から現職に就かれています。そして今年の 4 月からは、お仕事を続けながら兵庫県立大学減災復興政策研究科博士後期課程に入学され、災害報道について研究もされています。この日は、SNS や携帯電話、インターネットが普及していない時代に、主なメディアであったテレビとラジオ、両方に携わった経験からお話を伺いました。

お話の途中、当時のテレビ報道とラジオ番組を実際に視聴する時間がありました。その上で、受ける印象はテレビとラジオでどのように違うかを考えてみました。テレビは映像だけで情報を伝えることができるということが特徴で、被災者よりも、被災していない人や行政機関に向けて情報を伝える役目を主に担っていたとのことでした（鳥の目）。それに対してラジオは、実際に被災された方に長時間お話をしていただいたり、具体的な避難情報などが放送されたりしたそうです。被災者向けの情報を発信するという役割を担っていたそうです（虫の目）。

テレビとラジオでは、普段からの「視聴者とのコミュニケーションの取り方」も違います。テレビは記者により十分な取材がされて番組が作られ、より客観性・確実性が重視されています。それに対し、ラジオは普段から「分からないことはリスナーに聞け」と言われるそうで、はがきや FAX で視聴者からの意見を募集することが多くあります。普段からリスナーとコミュニケーションを取るメディアだから

こそ、震災発生当時、ラジオで個人の安否情報や電話番号を放送するということができました。また、ラジオでは、パーソナリティが自分の判断で、自分の言葉で現状を伝えることができるという特徴もあるそうです。

それでは、テレビやラジオに比べ、新聞はどのような特徴があるのでしょう。新聞はどうしても情報にタイムラグが出ます。しかし、紙媒体であるため、掲載されている情報をくり返し見られること、手元に残せることが大きなメリットであったそうです。(神戸の地元紙は阪神・淡路大震災が起こった当時、印刷所が壊れ、大変苦労して新聞を発行されていたそうです。)

いま大牟田さんは大学院で「ニュース」ではなく「オールド」、過去を調べることで災害「予防期」の報道について学んでいらっしゃいます。最近も日本で地震などの災害が起っています。実際の被災地に足を運び、被災者の支援等を通してこれからの報道のあり方を考えているとのことでした。

参加者からは、報道される話題の選択基準について、東日本大震災でも問題になった「デマ」について、また、安全とプライバシーを両立させる手段について、情報の入手手段が多様になった現代における情報提供方法についてなど、さまざまな質問が寄せられました。

終了時間いっぱいまでやりとりは続き、実際の報道現場にいらっしゃる大牟田さんのお話に参加者の興味は尽きませんでした。

文：吉田寛子（医学系研究科 博士前期課程１年)、「科学技術コミュニケーション入門Ｂ」担当教員

第 57 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

○タイトル：つなぐ人たちの働き方（2019 年度冬）#2
○ゲスト：本田 哲郎（大阪大学共創機構 産学共創・渉外本部　リサーチ・アドミニストレーター）
○日時：2019 年 12 月 24 日（火）14:40〜16:10
○場所：大阪大学吹田キャンパス テクノアライアンス棟 1 階 交流サロン
○主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
○共催：大阪大学 CO デザインセンター

2019 年 12 月 24 日（火）、科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2019 年度冬）」第 2 回が開催されました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。学内外から 24 人が集いました。

この日のゲストは大阪大学共創機構 産学共創・渉外本部の本田 哲郎さんでした。最初に、本田さんご自身の経歴についての紹介がありました。本田さんは薬学部にて薬剤師免許を取得後、パナソニックへ就職されました。パナソニック在籍中には大阪大学との共同研究もされていたそうです。阪大に出入りしていた頃、偶然、産学共創・渉外本部が実施する科学技術をベースにした事業化を実践する研修プログラム（G-TEC）の案内を見かけ、これだ！と思って受講したという経験が今につながるきっかけの 1 つだそうです。大学発技術の事業化に対して強い興味を抱くようになり、2017 年には、大阪大学共創機構 産学共創・渉外本部に転職されました。

次に、産学共創・渉外本部でどのようなお仕事をされているのか、「研究がビジネスになる瞬間」というタイトルでお話しいただきました。本田さんは、いま、産学共創・渉外本部で大学の特許・技術を企業につなぐ産学連携や、ベンチャーの創業支援のお仕事をされています。具体的には、まず、大学内の研究者に研究成果のヒアリングを行います。そして、その研究者と技術の応用先や用途についてブレインストーミングを重ね、これを基に想定される顧客や専門家へのヒアリングを行います。最終的にマッチングが成立すればその事業化へ向けた協業への支援を行ったり、またマッチングができなくても事業化が見込めれば、ベンチャーの創業支援を行ったりします。本田さんにはこのプロセスについて実例を交えながら説明していただきました。研究の学術的な価値とビジネス的な価値の間には大きなギャップがあるので、その間の「翻訳」を行うのがご自身の仕事であるとまとめられました。

そして、今回のセミナーシリーズのテーマでもある「つなぐ人」に求められることについてもお話しいただきました。本田さんは、「つなぐ人」を、ラグビーに例えて、「一時的に研究者に代わって「ボール」を持って走る人」なのではないかと説明されていました。ラグビーはボールをパスするときには、横か後ろにしか投げられません。誰かが自分でボールを持って前に走らないとゴールには近づくことはできません。何か新しい事業を立ち上げようとするときにも、立場の違う人と人を繋ぐことが必要ですが、どちらかに強いやる気がないと、なかなか前に進まない（つまり、「ボール」が横や後ろにしかパスされない状態）となってしまうことがしばしばあるそうです。「ボールを持って前に走る」ためにも、つ

なぐ人には事業化のプロセスを応援したいという情熱に加えて、素直に人へ質問できるという素質や、いろんなことに好奇心を持つことが大事なのだそうです。

質疑応答の時間では、主に企業との交渉やベンチャー創業支援に関する質問と、つなぐ人としての役割に関する質問がありました。「基礎的な研究を産業側が買い取って事業化しようとする流れが日本でも少しずつ起こってきているが、この流れは今後も加速していくと考えるか？」という質問には、「ベンチャーをおこすことができそうな研究成果へ投資しようとする投資家は増えてきているものの、その一歩手前の基礎的な研究段階から支援をする投資家は、日本ではまだほとんどいない」というお答えがありました。また、大学発ベンチャーに常に付き纏う問題として、研究について理解があり、経営判断も可能な、ベンチャーの社長に適した人材が不足しているという問題提起もありました。

また、「つなぐ人として、何が評価されているのか？」という質問もありました。本田さんは「忘年会に呼ばれること」と冗談交じりに語っておられましたが、会場からあがった「互いに思ってもいなかった相手を繋げられたら単純に面白いのだから、評価ということはあまり気にせず、面白さを原動力にしてお仕事をされているのでは？」というコメントに納得されているようでした。

企業との交渉やベンチャー創業支援といったお仕事は、学生には少し縁遠いものに感じられます。しかし本田さんは、ご自身のお仕事について実例を交えながらお話してくださったので、お仕事を身近に感じながら「つなぐ人」について考えを深めることができました。

文：沼野正太郎（生命機能研究科 博士課程３年）、「科学技術コミュニケーション入門Ｂ」担当教員

第 58 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

○タイトル：つなぐ人たちの働き方（2019 年度冬）#3
○ゲスト：八百 伸弥（株式会社みつヴィレッジ　代表取締役／株式会社リバースヴィレッジ　代表取締役／株式会社 JAMPS 生産設備・技術開発支援部長）
○日時：2020 年 1 月 7 日（火）14:40〜16:10
○場所：大阪大学吹田キャンパス テクノアライアンス棟 1 階 交流サロン
○主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
○共催：大阪大学 CO デザインセンター

2020 年 1 月 7 日（火）、科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2019 年度冬）」第 3 回を開催しました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。この日の会場には、学内外から 20 人の参加者が集まりました。

今回のゲストは、地域活性化を目指す起業家 八百 伸弥さんでした。八百さんは、大阪大学の基礎工学研究科の修了生です。そして、学生時代には大阪大学 CO デザインセンターの前身にあたるコミュニケーションデザイン・センター（CSCD）の授業を受けていたそうです。

まずは、どのような経緯で起業家になったのかお話いただきました。八百さんは大学ではロボット工学を学んでいました。当時は、ロボット技術者を目指していたのですが、人型ロボットの転倒事故のニュースを見聞きしたことがきっかけで、二足歩行のロボットの必要性に疑問を抱くようになったそうです。その頃、CSCD と出会い、主専攻以外の授業（科学技術コミュニケーションやまちづくりに関わるもの）を受講し、ロボット工学とは違った視点を得たとのことでした。

修士課程修了後は、経営コンサルティング会社で、ビジネス（特に中小企業を対象としたもの）に関する知識を学びながら、地域活性化のために何ができるか考え、その後農業ビジネスを行う「みつヴィレッジ」を起業した八百さん。どのようにして「みつヴィレッジ」の起業に至ったかについて、ご紹介いただきました。

その中で、参加者に投げかけられた質問は、「「地域活性化」の定義って何だと思いますか？」というもの。会場からいろいろな意見が出ましたが、八百さんの中での定義は「ヒト、モノ、カネが外から入ってきて、地域で循環すること」だそうです。この定義を実現するにあたって、八百さんは大学で学んだロボット工学の知識を活かし、農業をシステム化することが有効であると感じたそうです。

農業が抱えている課題としては、担い手が高齢化していて後継ぎがいない、効率化が必要な部分が多いといったものがあげられます。行政も補助金等で新規参入を促していますが、農業は経験がものをいう部分もあり、長続きする農家が少ないとのことでした。ただ、かつては経験でしかわからなかったも

の（例えば水やりのタイミング等）もITを使うと管理しやすくなることもあるとのことで、農業への新規参入のハードルを下げるための取り組みを進めていらっしゃいます。

「みつビレッジ」で最初に生産を始めたのはトマトです。なぜトマトだったのかというと、それは、家庭内で1年間に1人あたりが消費している金額がトップの野菜だったから、です。市場規模が大きいトマト。競争相手も多くなるわけですが、生で食べる、そして、購買頻度が高いという商品特性から、新規に参入しても勝負できると考えたとのことでした。「農業にちゃんとマーケティングをいれる」ということの大切さを教えていただきました。

このように、大学とコンサルティング会社で得た、ロボットとビジネスの知識を活かしながら「みつヴィレッジ」の起業に至ったとのことでした。八百さんは、「みつヴィレッジ」の他にも複数の企業に関わりながら、地域活性化と農業の産業化に取り組んでいきたいとおっしゃっていました。

八百さんはとても合理的に決断を考える方だなと感じました。自分が将来的に起業することを想定し、ビジネスについて学ぶために中小企業向けのコンサルティング会社に入社したというエピソードや、野菜の特性や市場の分析結果を考慮した上で、扱う農産物を戦略的に選んだという経緯などをお聞きして感銘を受けました。

文：矢谷元春（工学研究科 博士前期課程1年）、「科学技術コミュニケーション入門B」担当教員

第 59 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

○タイトル：つなぐ人たちの働き方（2019 年度冬）#4
○ゲスト：篠崎 資志（国立情報学研究所　副所長・教授／弁理士）
○日時：2020 年 1 月 14 日（火）14:40〜16:10
○場所：大阪大学吹田キャンパス テクノアライアンス棟 1 階 交流サロン
○主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
○共催：大阪大学 CO デザインセンター

2020 年 1 月 14 日（火）、国立情報学研究所で副所長をされている篠崎 資志さんをお招きして、セミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2019 年度冬）」第 4 回が開催されました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。会場には、授業の履修生に加え、セミナーに興味を持った学生や学外からお越しの方など 13 人が集いました。

今回篠崎さんは「理科系人間にとって行政・法律系の仕事は魅力的か？」というテーマでお話しして下さいました。主な内容は、篠崎さんの自己紹介、専攻や就職先をどのように選択したのか、弁理士とはどういう仕事なのか、ということでした。

篠崎さんは約 30 年前に東京大学の原子力工学科を卒業し、科学技術庁に就職されました。科学技術庁（後に文部科学省）では主に原子力、エネルギー、情報科学、海洋科学、先端医科学などを扱う部署で、科学技術政策立案や研究開発助成を担当されていました。この他に科学技術振興機構や海洋研究開発機構でも勤務されていたそうです。そして、現在は国立情報学研究所で副所長として新規事業立案や組織マネジメント等を担当されています。研究助成に携わるなかで、研究開発と知的財産権の関係に関心を持ち、弁理士試験にも挑戦されたのだそうです。昨年 4 月に弁理士登録されました。

学生の頃、専攻分野や就職先をどのような理由で選択したのかもお話し下さいました。原子力工学を専攻したのは、幼少期のオイルショックの経験がきっかけだそうです。エネルギー問題に関心を持って原子力工学を志したものの、大学に入学し勉強を進めていくなかで、原子力工学は社会との相互作用が非常に大きいということを痛感されました。そして、研究者・技術者だけではエネルギー問題のような社会的な課題を解決するのは難しいのではないかと考えるようになったそうです。そこで、社会との相互作用を経験できるのでは？という期待を抱き、科学技術庁に入庁することに。当時の科学技術庁の業務の半分近くは原子力関連だったのでご自身の強みを生かせそうな場であるともお考えになったそうです。また、海外勤務のチャンスがあることも魅力的であったとのことでした。

実際に官庁で働き始めてみると、1 年目は雑用の嵐で省内の”伝書鳩”として 1 日中書類を持って走り回っていたそうです。電子メール等が普及した現在からすると想像しにくいことですし、かなり辛かったそうですが、当時の状況を考えると必要な業務であったと振り返られていました。2 年目からは頭をつか

う仕事も任されるようになり、法律改正を担当。その後は期待していた通り 2 回の海外勤務（ワシントン、ウィーン）を経験されました。

課長補佐になると様々なオピニオンリーダーと直接会って話す機会も増えたそうですが、怒られることも多く、学生時代に教授から「役人は威張れるぞ」と言われて抱いていたイメージとは程遠い現実だったそうです。また、実務では原子力専攻時代に学んだ知識を使うことはほぼなく、「役人は全ての分野を広く浅く迅速に把握すべし」とよく言われたそうです。

また、篠崎さんが就職された頃と現在では世界の時価総額ランキングに名を連ねる企業ががらっと変わっていることをデータで示された上で、「万物は流転する」という先人の言葉を強調されていました。では、そんな流転する環境に我々はどのように対応していけばよいのでしょうか？篠崎さんはご自身の経験に基づいて「自分の専門（タテ）をコアとしつつ、それにプラスして専門外の幅広い分野（ヨコ）に関心を持つ」というアドバイスをいただきました。

弁理士という仕事についてもお話ししていただきました。弁理士とは、簡単に言うと知的財産の専門家です。科学技術を扱う行政官と弁理士には、「技術と法律を扱う」「論文以外の研究開発の価値を探求する」等いくつか共通点があると考え、弁理士試験を受けようと決意されたそうです。今後は、知財業界から見た有望技術の発掘や、IP ランドスケープの推進にも尽力していきたいとのことでした。

最後に、今回参加していた学生へのアドバイスとして
・目先の流行り廃りに惑わされない
・色々なことに広く浅く積極的に関心を持つ（ヨコ）
・オンリーワンと言えるような自分磨きを怠らない（タテ）
・法律的思考や法律との関わりを予見する
という言葉をいただきました。

行政官として長くキャリアを積んできた方から直接お話しを聞くことのできる機会はあまりありません。大学にいるときの科学との関わり方、と、社会に出てからの科学との関わり方の違いや、流転し続ける世の中で生きていくためのアドバイスをお聞きすることができ、非常に有意義な時間でした。

文：高山美里（理学研究科 博士後期課程 2 年）、「科学技術コミュニケーション入門 B」担当教員

第 60 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

○タイトル：つなぐ人たちの働き方（2019 年度冬）#5
○ゲスト：松川 えり（哲学者／カフェフィロ副代表）
○日時：2020 年 1 月 21 日（火）14:40〜16:10
○場所：大阪大学吹田キャンパス テクノアライアンス棟 1 階 交流サロン
○主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
○共催：大阪大学 CO デザインセンター

2020 年 1 月 21 日（火）、哲学者/カフェフィロ副代表 松川 えりさんをお招きして科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2019 年度冬）」第 5 回を開催しました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。大阪大学の学生、教職員、そして学外の方など、計 17 人が参加しました。

まずは「専門を活かす仕事をつくる 〜てつがくやさんの場合〜」というタイトルで松川さんより話題提供がなされました。「哲学者」として生きている人の中で一番多いのは、哲学の研究者（大学で哲学研究を行う人、過去の哲学者の本を読んで新しい解釈を見出し、論文を執筆する人など）です。次に考えられるのは文筆家（一般の人が理解しやすいような書籍を出す人、コメンテーターなど）として活躍する哲学者です。松川さんは、研究者でも文筆家でもない哲学の実践家（philosophical practitioner）（対話を通じて思考を掘り起こす人、一番古くて新しいかたち）という道を選んだ方です。現在は、岡山県を中心に活躍されています。

松川さんは大阪大学の文学研究科出身です。学部生から博士課程を経て、研究員まで、約 16 年間大阪大学に通い続けていたそうです。哲学系の研究室に入り、研究室の先輩に誘われて「哲学カフェ」という活動に参加するようになった松川さん。カフェフィロという団体の運営に関わるようにもなります。そして、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）で研究員をされていた頃は、中之島哲学コレージュという哲学カフェの運営サポート・企画、広報デザインに関わりながら、CSCD で行われていた哲学以外のコミュニケーション実践にも触れることになりました。そこで、やっぱり「哲学しかできない」という想いを新たにし、研究活動とはちがう哲学の在り方を模索してきたのだそうです。

いまは、ボランティアとしてではなく、お仕事として哲学カフェの企画・進行を引き受けていらっしゃいます。持続可能なかたちで哲学カフェを運営していくことができるまでになってきたそうです。依頼者や参加者が対話の場に期待することを聞きとり、関心が交わるところを探しながら、哲学カフェや哲学対話の場を日々創り上げていらっしゃるとのこと。これまでに参加された方から新しいお仕事を依頼されることも多いそうです。

お話の中では、これまでに手がけられた哲学カフェや哲学対話の様子を多数紹介していただきました。例えば、世の中には必要な施設（ごみ処理施設や保育園など）だけれども、自宅の近くにあると困るという「NIMBY 問題」についてとりあげた哲学カフェ、高専で実施された情報倫理をテーマにした哲学対話、患者家族会の方が対象の催しや、子育て中のお母さんたちを対象にした催しなど、対象もテーマも多様です。オリーブ園での「哲学ウォーク」という取り組みにもチャレンジされたとのこと。

カフェだけでなく、公民館、病院などの様々な施設で開催され、また、主催者側の目的も、地域交流、学びの場づくり、研修など多様です。正解の決まっていない問題について、様々な視点から多角的に探求すること、誰もが対等に対話できる場を提供することを重視しているそうです。

松川さんの話題提供に続いて、質疑応答とディスカッションが行われました。哲学カフェとサイエンスカフェの違いとは？、哲学カフェのファシリテーションでは哲学を学んだことをどのように生かしているのか？、そもそも哲学カフェの目的って？など、会場からは多くの質問があり、活発な議論が行われました。

文：細川真梨子（医学研究科 博士前期課程 1 年）、「科学技術コミュニケーション入門 B」担当教員

第 61 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

○タイトル：シリーズ 科学技術×公共政策 #1　日本の科学技術イノベーション政策動向と国際ビッグプロジェクトに関する考察
○ゲスト：山下 恭範（文部科学省 科学技術・学術政策局　科学技術・学術戦略官）
○日時：2019 年 12 月 19 日（木）14:40～17:50
○場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構ステューデント・コモンズ 1 階 カルチエ・ミュルチラング
○主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
○共催：大阪大学 CO デザインセンター

2019 年 12 月 19 日（木）に、大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構ステューデント・コモンズ 1 階カルチエ・ミュルチラングにて、科学技術に関する公共政策の特徴を、具体例を通じて学ぶセミナーシリーズ「科学技術×公共政策（2019 年度冬）」第 1 回を開催しました（授業「科学技術と公共政策 B」の一環として開催）。この研究会には、授業の受講生に加えて、大阪大学の教職員や学外からの参加者など 23 人が参加しました。

今回のゲストは文部科学省 科学技術・学術政策局 科学技術・学術戦略官の山下 恭範さんをお招きしました。また、科学技術・学術政策局 企画評価課の長澤 幸祐さんにもお越しいただきました。

山下さんからのお話に先立ち、長澤さんからは、「科学技術イノベーション政策の推進体制と最近の動向について」というタイトルで、国の行政組織としての文部科学省の位置付け、第 6 期科学技術基本計画の検討状況や「研究力向上改革 2019」など、現在の日本の科学技術イノベーション政策についてご紹介いただきました。

続いて、山下さんからは、以前、ご自身が関わられた研究会（*文部科学省平成 25 年度委託研究「科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」の推進に向けた試行的実践」の一環として実施）の成果に基づき、科学技術分野における国際ビッグプロジェクトの立ち上げとその意義の変遷についてご説明いただきました。

具体的なプロジェクトの事例として、国際熱核融合実験炉（ITER）や国際宇宙ステーション（ISS）について紹介していただいた後、これらの事例から何を学ぶことができるのか、今後の新たなプロジェクトが立ち上がるとしたら何がどう教訓になるのか、といった観点でお話いただきました。

研究会の後半は、質疑応答とディスカッションの時間でした。参加者からはさまざまな質問やコメントが寄せられました。
例えば・・・
・「研究力向上改革 2019」に書かれているような研究力の向上、たとえば若手研究者の育成や現状について知りたい。
・企業の博士人材の活用についてどのように考えているのか。
・第 6 期科学技術基本計画を考えるうえで、国立大学の予算などが減っている現状が気になっている。
など、多様な話題で議論が活発に行われました。

参加者からは、「現在の日本の体制について概要を理解することができた」「国際ビッグプロジェクトには政治的・科学的・社会的要素をしっかり考えなければならないことがわかった」「難しい問題に対して日々悩みながら取り組んでいらっしゃることが伝わってきた」という感想が寄せられました。

第 62 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

○タイトル：シリーズ科学技術×公共政策 #2　原子力政策をめぐる政治過程
○ゲスト：上川 龍之進（大阪大学大学院法学研究科 教授）
○日時：2020 年 1 月 23 日（木）14:40〜17:50
○場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構ステューデント・コモンズ 1 階 カルチエ・ミュルチラング
○主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
○共催：大阪大学 CO デザインセンター

2020 年 1 月 23 日（木）に、大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構ステューデント・コモンズ 1 階 カルチエ・ミュルチラングにて、科学技術に関する公共政策の特徴を、具体例を通じて学ぶセミナーシリーズ「科学技術×公共政策」第 2 回を開催しました（授業「科学技術と公共政策 B」の一環として開催）。この研究会には、授業の受講生に加えて、大阪大学の教職員や学外からの参加者など計 21 人が参加しました。

今回はゲストに大阪大学大学院法学研究科の上川 龍之進教授をお招きしました。上川先生は金融政策や金融行政がご専門でしたが、日本学術会議の東日本大震災学術調査をきっかけとして、原子力政策についても研究を進めていらっしゃいます。この日の前半は、ご著書『電力と政治』に執筆されたことをベースにしながら、原子力政策をめぐる政治過程、とくに 2011 年 3 月の福島第一原発事故に至る東京電力の権力の源泉についてご講演いただきました。

研究会の後半は質疑応答とディスカッションを行いました。参加者からは様々な質問が出されました。例えば「電力自由化はなぜ一度失敗したのか」や、「科学技術政策に対して、関係者や専門家以外の人の関心や問題意識が薄いように思われる。どうやって、専門外の人を巻き込めばいいのだろうか」といった質問でした。それぞれ上川先生から丁寧にお答えいただきました。

終了後には、受講生から、次のような感想が寄せられました（*読みやすくするために、アンケート用紙などに記入された文章を多少修正して掲載しています）。

「3.11 以降、他の原発は動いているが、今後同じ過ちを繰り返さないためにはどのような対策が必要なのだろうか」や「原子力政策は原発のない地域の人々にとっては遠い話になってしまいがちなので、国民全体を巻き込んで話を進めていくのは難しいことだと思う」というように、今回のトピックである原子力発電や原子力政策に関する感想が多くありました。

一方で、「政治の社会への影響力というものをひしひしと感じた。政治についてもっと勉強しようと思った」というように、科学技術に関する公共政策全体に関わることを考えはじめた参加者もいました。

その他

市民参加型ワークショップ「新しい医療と、くらし ～再生医療のあるべき未来像～」

○タイトル：市民参加型ワークショップ「新しい医療と、くらし ～再生医療のあるべき未来像～」
○ゲスト：八代 嘉美（神奈川県立保健福祉大学イノベーション政策研究センター教授）
　　標葉 隆馬（成城大学文芸学部准教授）
○日時：2019 年 7 月 13 日（土）13:30～16:30
○場所：UMEDAI 大阪・梅田会議室 UMEDAI-05
○主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
○共催：大阪大学 CO デザインセンター
○後援：日本再生医療学会、大阪大学 21 世紀懐徳堂

2019 年 7 月 13 日（土）に、UMEDAI 大阪・梅田会議室において、市民参加型ワークショップ「新しい医療と、くらし ～再生医療のあるべき未来像～」を開催しました。

この日の参加者は 20 人。1 グループ、3～5 人の参加者と 1～2 人のグループファシリテータで議論を進めました。今回のワークショップの流れは次の通りです。

13:30-　ワークショップ開始
　　みんなで考えてみる時間
14:30-　休憩
14:40-　専門家からのコメント
15:00-　もう一度みんなで考えてみる時間
16:10-　まとめ
16:30　ワークショップ終了

全体進行は八木 絵香（大阪大学 CO デザインセンター 准教授）が、また、それぞれのグループでのファシリテータは、大阪大学 CO デザインセンターが提供する授業「科学技術コミュニケーション入門 A」（https://www.cscd.osaka-u.ac.jp/co/2019/000681.php）の履修学生や STiPS 修了生がつとめました。履修生たちは授業などでの経験を踏まえ、グループでの議論を促したり、議論の内容を整理して発表したりするなど、ワークショップの現場で活躍しました。

※このワークショップは、日本学術振興会 課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業（領域開拓プログラム）「RRI の新展開のための理論的・実践的研究－教育・評価・政治性に注目して（研究代表者：標葉隆馬）」の支援のもと開催しました。

【後援イベント】1st シンポジウム Innovation and Communication for Global Health Care ―Medical Humanities―

○タイトル：1st シンポジウム Innovation and Communication for Global Health Care：Medical Humanities ○日時：2019 年 9 月 6 日（金）13:00～17:00 ○場所：京都大学医学部 芝蘭会館 稲盛ホール ○主催：一般財団法人グローバルヘルスケア財団 ○共催：京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻 健康情報学分野 ○後援：内閣府、日本医療研究開発機構（AMED）、日本医師会、京都府医師会、京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻、京都大学政策のためのユニット、先端医療推進機構、厚生労働省、京都新聞社

プログラム

12:50~13:00　総合司会　近藤 太郎（元東京都医師会 副会長）

13:00~13:05　開会挨拶　髙久 史麿（一般財団法人グローバルヘルスケア財団 筆頭評議員、前日本医学会 会長）

13:05~13:15　来賓挨拶

13:15~13:25　趣旨説明　中山 健夫（京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻健康情報学分野 教授）

第 1 部：基調講演

13:30～14:20　What are the medical humanities and why do they matter?
ブライアン・ハーウィッツ(ロンドン大学キングス・カレッジ教授)
座長 林 依里子((財)グローバルヘルスケア財団評議員、ロンドン大学 SOAS 客員教授)

第 2 部：講演

14:30～15:00　イノベーションの活用―超高齢社会の日本に期待すること
王 恵民（エドワーズライフサイエンス(株) 代表取締役会長）

15:05～15:35　社会の基盤としてのヒューマニティーズ
山中 燁子(ケンブリッジ大学上級外交フェロー)

15:40～16:10　人文社会系が日本の医療に貢献できるのか？
カール・ベッカー(京都大学政策のための科学ユニット 特任教授)

第 3 部：ディスカッション

16:15～16:45　座長 中山 健夫　講演者全員による討論及び質疑応答

16:45~16:55　閉会挨拶 幸田 正孝((財) グローバルヘルスケア財団 評議員、元厚生省事務次官)

【共催イベント】シンポジウム「ELSI 対応なくして、データビジネスなし－産学共創でとりくむ倫理的・法的・社会的課題－」

○タイトル：シンポジウム「ELSI 対応なくして、データビジネスなし－産学共創でとりくむ倫理的・法的・社会的課題－」（イノベーションストリーム KANSAI 関連企画） ○日時：2019 年 12 月 17 日（火）13:00～16:00 ○場所：ナレッジキャピタル コングレコンベンションセンター ルーム 2+3 ○主催：大阪大学データビリティフロンティア機構、株式会社電通 ○共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

パーソナルデータの利活用を含むデータビジネスの成功には、倫理的・法的・社会的課題（ELSI）への対応がカギを握っています。ELSI に適切に対応するためには、アカデミアと事業者の協働、さらには、アカデミアの中でも、倫理学者や法学者といった人文社会科学系研究者との協働も必要です。

本シンポジウムでは、人文社会科学系のアカデミアとデータビジネスをつなぐための実例やアイディアを多様な登壇者から提供いただきます。
これからの共創のモデルを参加者とともに考えます。
（告知文より）

プログラム
趣旨説明　　岸本充生（大阪大学データビリティフロンティア機構　教授）
前半
　話題提供 1　　朱喜哲（株式会社電通 主任研究員）
　話題提供 2　　工藤郁子（PHP 総研 主任研究員）
　話題提供 3　　酒田理人（LBMA Japan 理事）
　話題提供 4　　長門裕介（慶應義塾大学 非常勤講師）
休憩
後半　　進行：岸本充生、朱喜哲
　論点ごとのディスカッション

【共催イベント】国際競争時代の研究公正 （『研究不正と歪んだ科学: STAP 細胞事件を超えて』出版記念シンポジウム）

○タイトル：国際競争時代の研究公正 （『研究不正と歪んだ科学: STAP 細胞事件を超えて』出版記念シンポジウム） ○日時：2020 年 1 月 12 日（日）13:30〜16:30 ○場所：大阪大学中之島センター 講義室 302 ○主催：一般社団法人カセイケン（科学・技術と政策研究室） ○共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2014 年に起こった STAP 細胞事件は、日本社会に大きな衝撃を巻き起こしました。しかし、この事件は首謀者の特異なキャラクターによるものとして消費され、科学研究をめぐる国際的な動向の中で考えるという視点はほぼなかったように思われます。また、研究不正問題に関しては、国内外から、日本の社会や研究機関の持っている特殊な文化の影響を指摘されることもあります。事件から時間が経って、一般社会の関心が風化している今こそ、もう一度研究不正の問題に着目し、日本が科学研究の国際競争時代に、科学技術創造立国としてふさわしい振る舞いと体制を整えるにはどうしたらいいのか、未来志向で考えてみる機会を作れないでしょうか。

今回は、『研究不正と歪んだ科学: STAP 細胞事件を超えて』（日本評論社）の出版を記念して、こうした機会の一助にすべく、シンポジウムを開催したいと思います。科学研究の専門家のみならず、こうした問題に関心をお持ちの一般の方々にもご参加いただければ幸いです。
（告知文より）

講演：
　榎木英介（一般社団法人カセイケン）
　粥川準二（県立広島大学）
　中村征樹（大阪大学）
コメンテーター：
　田中智之（京都薬科大学）

【共催イベント】科学技術と社会をつなぐ推理ゲームの使い方 —— nocobon でアクティブ・ラーニング！

○タイトル：科学技術と社会をつなぐ推理ゲームの使い方 —— nocobon でアクティブ・ラーニング！
○日時：2020 年 1 月 25 日（土）13:30〜15:30
○場所：大阪大学 豊中キャンパス　全学教育推進機構 ステューデント・コモンズ 2 階 セミナー室 A
○主催：nocobon 開発チーム
○共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

近年の著しい科学技術の進展が現代社会にもたらす影響には、私たちの生活様式や価値観の変化、倫理的・法的・社会的課題など、さまざまな側面があります。そうした「科学技術と社会」を取り巻く複雑な問題を学ぶツールの一つとして、2015 年、東京大学教養学部附属教養教育高度化機構の特任教員（当時）が集まり、コミュニケーション型カードゲーム「nocobon」を開発しました。以来「nocobon」は、科学技術と社会に対する〈多面的なものの見方〉を涵養するためのアクティブラーニングツールとして、中学校/高校/大学/大学院などで幅広く活用されています。

今回は、nocobon の使い方、さまざまな実践・活用例が紹介された書籍『残された酸素ボンベ——主体的・対話的で深い学びのための科学と社会をつなぐ推理ゲームの使い方』の出版を記念して、ワークショップを開催いたします。
（告知文より）

プログラム
ワークショップ（45 分）
　nocobon ってなに？——科学と社会をつなぐコミュニケーション型推理ゲームの狙い
　nocobon を体験してみよう！——〈多面的なものの見方〉できますか？
休憩（15 分）
ディスカッション（45 分）
　どうつかう？ ——nocobon アレンジ事例紹介＆展開可能性
　nocobon 開発チーム：
　　標葉 靖子（東京工業大学環境・社会理工学院 助教）
　　福山 佑樹（明星大学明星教育センター 特任准教授）
　　江間 有沙（東京大学未来ビジョン研究センター 特任講師）
　司会：
　　水町 衣里（大阪大学 CO デザインセンター 特任助教）
Q&A（15 分）

5. 共進化実現プロジェクトの実施

5. 共進化実現プロジェクトの実施

2019 年度より、政策への具体的貢献ができるような成果の創出や、行政官と研究者の真の共進化を強力に推進するため、課題設定から行政官が積極的に関わる新たな研究プロジェクト「重点課題に基づく研究プロジェクト（共進化実現プロジェクト）」9 件が実施されています。このうち 2 件に、STiPS 参画教員が関わっています。

新興・融合科学領域における「予見・分析手法」の検討と人的ネットワークの形成

研究課題名

新興・融合科学領域における「予見・分析手法」の検討と人的ネットワークの形成

プロジェクト期間

2019（H31）年 4 月～2021（R3）年 3 月

プロジェクトメンバー

・有本 建男（政策研究大学院大学 客員教授） *研究代表者
・平川 秀幸（大阪大学 CO デザインセンター 教授） *研究代表者
・岡村 麻子（政策研究大学院大学 専門職）
・安藤 二香（政策研究大学院大学 専門職）
・畑中 綾子（政策研究大学院大学 ポストドクトラルフェロー）

行政担当部署

文部科学省 科学技術・学術政策局企画評価課 新興・融合領域研究開発調査戦略室

取り組む課題

国内外において、新興・融合科学領域の重要性が認識され、その取組が加速しています。エビデンスに基づいた新興・融合領域政策の具体化のためには、国内外の新しい手法や取組から随時示唆を得ながら、「予見・分析手法」を整理・体系化し、政策形成の各場面・目的に応じて適切に組み合わせて活用していくことが重要です。それらを支援する仕組みの構築に向け、モデルケースの創出と、これを実現する人的ネットワークの形成が必要となっています。

プロジェクト概要

新興・融合科学領域において予見されるインパクトを多角的に把握し、政策形成に資するエビデンスを作成し政策形成プロセスに働きかけをおこなうために、以下の 3 点を行います。

①「予見・分析手法」の整理・体系化
②「予見・分析手法」の実証（プロトタイプの構築・試行）と、これを通じた、政策形成において実践的に活用されるための課題抽出
③プロジェクトを通じた、研究者、政策担当者のより実践的なネットワークの構築

「予見・分析手法」のマッピングなど、以上のプロセスにおいて中間的に得られた知見についても、政策担当者に向けた Policy Briefing Notes としてまとめます。

2019 年度の主たる研究成果

本年度は、本研究プロジェクトの行政担当者（文部科学省科学技術・学術政策局企画評価課新興・融合領域研究開発調査戦略室）と打合せを重ねつつ、連携先の政策研究大学院大学とともに、フォーサイトや社会インパクト分析など各種の予見・分析手法に関する文献調査や関連研究者に対するヒアリングを中心に行いました。

2019 年 12 月 18 日には、International Natural Fiber Organization（INFO）の事務局長 Dilip Tambyrajah を招いて“Foresight Case Study Seminar: Foresight for Bio-resource 2030”を開催し、意見交換を行いました。2020 年 1 月 17 日には、2019 年度共進化プロジェクト・フォーサイト俯瞰 WS「新興・融合科学領域の出現とインパクトは予見できるか」を開催し、国内の関連研究者（本プロジェクトのメンバー 7 名以外に 17 名）が参加しました。これらを踏まえて、予見・分析手法の体系的な整理を進めるとともに、次年度に行う予定の「予見・分析手法のプロトタイプの施行」の具体的デザインについて検討しています。

なお、3 月に海外調査（英国、オランダ、ベルギー）を予定していましたが、新型コロナウイルス感染症の影響で中止されました。

国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構（JAXA）の歴史・現状・未来像に関する研究

研究課題名

国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構（JAXA）の歴史・現状・未来像に関する研究：政府と民間の関係に焦点を当てて

プロジェクト期間

2019（H31）年 4 月～2021（R3）年 3 月

プロジェクトメンバー

・渡邉 浩崇（大阪大学 CO デザインセンター 特任准教授） *研究代表者
・平川 秀幸（大阪大学 CO デザインセンター 教授）
・城山 英明（東京大学公共政策大学院 教授）
・小林 俊哉（九州大学科学技術イノベーション政策教育研究センター 准教授）

行政担当部署

文部科学省研究開発局宇宙開発利用課

取り組む課題

宇宙基本計画においては、日本の宇宙機器産業の事業規模を 10 年間で官民合わせて累計 5 兆円を目指すことが掲げられています。諸外国においては、既存の宇宙関連企業に加えて、新興企業が宇宙の研究開発利用において大きな役割を果たす中、日本においても、宇宙分野における政府と民間の関係、とくに役割分担の再構築、さらには宇宙航空研究開発機構（JAXA）が今後、何を求められるかの幅広い分析・検討が必要となっています。

プロジェクト概要

本研究プロジェクトは、国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構（JAXA）がこれまで求められてきたこと、そして今後、求められることを、政府と民間の関係に焦点を当てて研究します。

日本の政府予算が厳しい中、どのような宇宙政策を推進し、どのように宇宙産業規模を拡大していくか、それらへの回答の一つとして、政府と民間の役割分担が求められています。研究手法として、文献調査・資料収集、国内外の政策実務者・研究者・企業や一般の人々との意見交換（対話）・研究会・ワークショップ等を、効果的に組み合わせて繰り返し行うことによって検証し、本研究プロジェクトの成果は、宇宙基本計画（工程表）や JAXA 中長期目標・計画等への反映を目指します。

2019 年度の主たる研究成果

本年度は、本研究プロジェクトの行政担当者（文部科学省研究開発局宇宙開発利用課）と約 2 か月毎の打合せを行いながら、JAXA を始めとする政策実務者、研究者、宇宙民間企業の担当者と意見交換を行いました。

加えて、2019 年 10 月には、米国ワシントン DC で開催された国際宇宙会議（IAC）に参加して海外調査研究を行い（2019 年 10 月 20 日～27 日）、2019 年 11 月には政策立案ワークショップ（宇宙）2019 年度第 1 回、2020 年 1 月に第 2 回、2020 年 2 月に第 3 回（新型コロナウイルス感染症の影響でメール開催）を行いました。

政策実務者向けの政策立案ワークショップの様子

6. 関西ネットワークの発展

6. 関西ネットワークの発展

ナレッジキャピタル超学校シリーズ

「ナレッジキャピタル超学校」は、大学や企業、研究機関などの様々な分野の研究者と一般参加者が一緒に考え、対話するプログラムです。2019 年度は、大阪大学 CO デザインセンターとナレッジキャピタルとが共同で開催するナレッジキャピタル超学校シリーズ「対話で創るこれからの『大学』」全 3 回を開催し、STiPS が共催しました。

以下、「対話で創るこれからの『大学』」シリーズの案内文です。

2016、2017 年に開催した大阪大学 CO デザインセンターとナレッジキャピタルとのコラボレーション講義「対話で創るこれからの『大学』」シリーズの第 3 弾です。

大阪大学 CO デザインセンターは、「大学の中だけにとどまらず、社会の多様な人々と一緒に『知』の意味を捉えなおしたい、その上で、人や知識をつなぎながら、何かを創出する人材を育成したい」と考え、新しい大学のあり方を探ってきました。一方で、ナレッジキャピタルは、企業人、研究者、クリエイター、そして一般生活者などさまざまな人たちが行き交い、それぞれの知を結び合わせて新しい価値を生み出す"知的創造・交流の場"を提供しています。

本シリーズでは、"向き合い続ける"をテーマに「社会の中で新しい価値をつくり出している実践者」と大阪大学の教員の対談形式の講座を全 3 回開催します。

社会の多様な人が集まるナレッジキャピタルで、講義を通し「わからないことにどう向き合ったらいいのか」「答えがない課題にどう取り組むべきか」「"問題意識を持ち続ける"そして、"考え続ける"とはどういうことか」に向き合い議論します。

ナレッジキャピタル超学校 対話で創るこれからの「大学」第１回

○タイトル：「わからないこと」を楽しむ ○講師（対談する人）：竹内 慎一（NHK エデュケーショナル 教育部　プロデューサー）、橋本 幸士（大阪大学大学院理学研究科　教授） ○コーディネーター（聞き手）：八木 絵香（大阪大学 CO デザインセンター 准教授） ○日時：2019 年 6 月 18 日（火）19:00〜20:30 ○場所：カフェラボ（グランフロント大阪北館 ナレッジキャピタル 1 階） ○定員：50 人 ○主催：一般社団法人ナレッジキャピタル、株式会社 KMO、大阪大学 CO デザインセンター ○共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

ナレッジキャピタル超学校 大阪大学 CO デザインセンター×ナレッジキャピタル：対話で創るこれからの「大学」、2019 年度は"向き合い続ける"がテーマです。その第 1 回目を、2019 年 6 月 18 日（火）に開催しました。この日のテーマは「『わからないこと』を楽しむ」。竹内 慎一さん（NHK エデュケーショナル教育部プロデューサー）と、橋本 幸士さん（大阪大学大学院理学研究科 教授）をお招きしました。今回も申し込み受付が始まったその日のうちに満席になってしまいました。当日は 55 人のみなさまにご参加いただきました。

まずはお二人それぞれに自己紹介をお願いしました。橋本さんは、理論物理学者が「わからないこと」に日々どのように向き合い、取り組み、そして楽しんでいるのか、ということを、書籍やパフォーマンスなどを通して社会に発信することにも取り組んでおられます。理論物理学者が「わからない（知りたい）こと」は、世の中の事象を数式であらわすことだそうで、ふだんは研究室にある大きな黒板を使ってひたすら（1 日 18 時間も！）計算している（してしまう）のだそうです。

竹内さんは、「大科学実験」「カガクノミカタ」「考えるカラス〜科学の考え方〜」など、科学の営みや考え方をかっこよく、そして楽しく伝える番組を制作されてきました。「知識を伝えるだけで良いのだろうか？」と悩み続けるなかで、番組の中で答えを明かさない「不親切な」番組を作ろうと思い至ったのだそうです。

自己紹介に続く対談は、竹内さんから橋本さんに「1 日 18 時間も、研究（計算）して本当に楽しいんですか？」と質問を投げかけるところからスタートしました。答えの与えられていない問いを考えるワクワク感、それを仲間とシェアしたりしながら「あーでもない、こーでもない」と一緒に考える面白さなど、普段からお二人が考えたり、体験している「分からないこと」に向き合うことにまつわるエピソードなどが、さまざまな角度から紹介されました。

ナレッジキャピタル超学校 対話で創るこれからの「大学」第２回

○タイトル：異なる文化のあいだに立つ ○講師（対談する人）：山田 小百合（NPO 法人 Collable 創立者・代表理事）、辻田 俊哉（大阪大学 CO デザインセンター 講師） ○コーディネーター（聞き手）：八木 絵香（大阪大学 CO デザインセンター 准教授） ○日時：2019 年 8 月 5 日（月）19:00〜20:30 ○場所：カフェラボ（グランフロント大阪北館 ナレッジキャピタル 1 階） ○定員：50 人 ○主催：一般社団法人ナレッジキャピタル、株式会社 KMO、大阪大学 CO デザインセンター ○共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2019 年 8 月 5 日（月）に開催した第 2 回は、42 人のみなさまにご参加いただきました。今回対談をしたのは、山田 小百合さん（NPO 法人 Collable 代表）と、辻田 俊哉さん（大阪大学 CO デザインセンター 講師）です。

山田さんは、Collable という NPO 法人を立ち上げ、障害の有無を超えて一緒に学ぶ、そして、一緒に新しい価値をつくりだすという事業を行っていらっしゃいます。この Collable の活動は、山田さんが修士課程の時に取り組んだ「インクルーシブデザイン」や障害のある子もない子もともに参加するワークショップの実践研究が活かされているそうです。こういった山田さんの活動の原点は知的障害と自閉症を併せ持つ兄と弟と一緒に育ったこと、そして、障害のある人は支援するものという社会通念への違和感をもつようになったこと。今は、まちづくりや商品開発などにも活動の幅を広げているそうです。

辻田さんは国際関係論が専門の研究者です。その辻田さんが、今 CO デザインセンターで担当をしているのは、社会課題をどう解決できるかを考えるソーシャルイノベーションに関する教育プログラムです。この自己紹介の時間では、エルサレムに留学していた時、紛争が身近なところで起こるという経験をしたこと。さらには、外務省の専門調査員という立場でイスラエルにある日本国大使館で働いていた時にも、紛争が始まってしまったこと。この時期に、利害関係者が多い中で課題を解決するという「やっかいな問題」にどうアプローチしていくかということを考えるようになったこと。などなど、国際関係論とソーシャルイノベーションがどのように辻田さんの中でつながるようになったのかを伺いました。

続く対談では、さまざまな立場の人が集まるワークショップならではのおもしろさ、苦労する点や失敗談などが語られました。会場からは、「ワークショップで得られた「新しい価値」の具体的な事例について教えて欲しい」という質問や「大学や NPO として研究・活動を進めることで得られる経験や成果をぜひ地域にも還元してほしい」といったコメントも寄せられました。

ナレッジキャピタル超学校 対話で創るこれからの「大学」第３回

○タイトル：「できない」を「できる」に変えていく力 ○講師（対談する人）：広瀬 浩二郎（国立民族学博物館グローバル現象研究部 准教授）、渥美 公秀（大阪大学大学院人間科学研究科 教授） ○コーディネーター（聞き手）：八木 絵香（大阪大学 CO デザインセンター 准教授） ○日時：2019 年 10 月 1 日（火）19:00〜20:30 ○場所：カフェラボ（グランフロント大阪北館 ナレッジキャピタル 1 階） ○定員：50 人 ○主催：一般社団法人ナレッジキャピタル、株式会社 KMO、大阪大学 CO デザインセンター ○共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

今シーズン最終回（2019 年 10 月 1 日（火）実施）は、51 人のみなさまにご参加いただきました。ゲストは、広瀬 浩二郎さん（国立民族学博物グローバル現象研究部館 准教授）と、渥美 公秀さん（大阪大学大学院人間科学研究科 教授）のお二人です。前半は、それぞれ自己紹介をお願いしました。

広瀬さんは、中学 1 年生で視力を失いました。全盲という状態で 40 年間過ごす中で、自分の障害に対する受け止め方も少しづつ変わってきたそうです。この日は、「歩く」「触る」「語る」という 3 つのキーワードを挙げて、それぞれ「向き合い続けること」に関連づけてお話をいただきました。例えば、「触る」については、仏頭彫刻のレプリカを触って鑑賞する様子を動画で示しながら、「触る」ことを見ることの代替手段としてとらえるだけでなく、触るからこそ得られる情報があるということを紹介していただきました。

渥美さんは、心理学がご専門です。神戸大学で教鞭をとり始めた直後、阪神・淡路大震災が起こりました。そこから日本災害救援ボランティアネットワークという NPO 法人を立ち上げるなど、25 年間、研究者としても、1 人のボランティアとしても、災害の現場に向き合い続けてきました。災害時のボランティアが広まってきた一方で、今もなお災害現場では、高齢者や障害者などが「助けて！」と発信できずに犠牲になるということが起こり続けています。近所同士などでのちょっとした気づきや手助けができない社会をどうにかしなければ、ということが改めて課題であると感じていらっしゃるそうです。

後半は、ゲストのお二人がお互いに質問を投げかけ合いながら、対話を進めました。例えば、ボランティアのあり方について、「支援する・される」といった関係ではなく、一緒に目標を分かち合う存在、何かを一緒に創り出すような関係性になれないか、という議論がなされました。

サイエンスカフェ＠千里公民館

サイエンスカフェ＠千里公民館　第 19 回

○タイトル：自動運転とわたしたちの暮らし
○講師：篠原 一光（大阪大学大学院人間科学研究科 教授）
○進行：八木 絵香（大阪大学 CO デザインセンター 准教授）
○日時：2019 年 6 月 26 日（水）10:00～12:00
○場所：千里公民館 第 1 講座室（千里文化センター「コラボ」内）
○定員：50 人程度
○主催：豊中市立千里公民館
○共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）、大阪大学 CO デザインセンター

この日のゲストは、交通心理学がご専門の篠原 一光さん（大阪大学大学院人間科学研究科 教授）。参加者は 20 人（大阪大学や豊中市の関係者を除く）でした。授業「科学技術コミュニケーション入門 A」でファシリテーションスキルについて学んだ受講生たちが、参加者同士の対話をお手伝いしました。

前半は、「自動運転技術と聞いて、パッと思いついた身近な人は誰？」「自動運転技術を暮らしの中で、どのように活用したいですか？」といった問いかけが書かれたワークシートを活用しつつ、自動運転への期待や不安などをグループごとに議論しました。後半はゲストからのコメントや他グループの意見もふまえて、グループ内での対話もより活発になり、最後の質疑応答コーナーではゲストへの質問が次々と寄せられました。

サイエンスカフェ終了後に参加者から寄せられた感想としては、「自動運転になった場合の免許の返納について印象に残った」、「限界集落がなくなる可能性がある」、「開発途中の技術で、不安を持っている人が多いと分かった」などがあり、ひとつのテーマでもさまざまな角度から考える必要がありそうだ、ということが共有されたのではないでしょうか。他の人の意見にまずは耳を傾ける、そして、意見の違いを楽しむことのできる場づくりの価値について感想を述べてくださった方もいらっしゃいました。

対話のお手伝いをした学生たちにとっても、多様なバックグラウンドをもつ方々のお話を聞くことができたことが良い刺激になったようでした。

サイエンスカフェ＠千里公民館　第 20 回

○タイトル：再生医療とミライの生き方
○講師：加藤 和人（大阪大学大学院医学系研究科 教授）
○進行：八木 絵香（大阪大学 CO デザインセンター 准教授）
○日時：2019 年 10 月 15 日（火）10:00～12:00
○場所：千里公民館 第 1 講座室（千里文化センター「コラボ」内）
○定員：30 人程度
○主催：豊中市立千里公民館
○共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）、大阪大学 CO デザインセンター

この日の参加者は 15 人（大阪大学や豊中市の関係者を除く）でした。1 歳のお子さん連れの参加者もいました。今回のテーマは「再生医療とミライの生き方」。ゲストとして、生命倫理や医学倫理などを専門とされている加藤 和人さん（大阪大学大学院医学系研究科 教授）をお招きしました。授業「科学技術コミュニケーション入門 A」でファシリテーションスキルについて学んだ受講生たちが、参加者同士の対話をお手伝いしました。

「再生医療ときいてパッと思いついたコトは？」「再生医療に期待すること、不安なことは？」という問いかけが書かれたワークシートを活用しながら、グループでの対話を行いました。いろいろな期待や不安の声が聞こえてきました。ひととおり議論が進んだところで、それぞれのグループで出てきた意見やゲストへの質問などを、会場全体で共有しました。ゲストの加藤さんにはみなさんからの「実際、再生医療の研究はどの程度進んでいるのか？」「ライフサイエンスに関わる倫理と AI やロボットに関わる倫理、どこが共通していて、どこが違うのか？」といった疑問にお答えいただきました。

加藤さんからは、再生医療研究の進め方について、国際的な動向や海外事例についてもご紹介いただきました。例えば、ゲノム編集に関しては WHO やユネスコなどでも議論が行われている一方で、幹細胞研究に関しては、国際幹細胞学会でガイドラインの策定がおこなわれているということ、アメリカなどでは患者団体が多様な活動をしており日本も見習うべき点があるということなど、それぞれの質問に丁寧にお答えいただきました。

「いろんな方の意見をきくことで新しい視点が得られて、また参加したいと思いました」とアンケート用紙に書いてくださった方も。これからも、多様な価値観や視点が交わる対話の場づくりを目指していきます。

グループでの対話をお手伝いした学生たちも、自分たちの研究が社会でどのように受け止められるのかを考えたり、実体験に基づく議論に刺激を受けたりしたようでした。

7. 国際連携の推進

7. 国際連携の推進

国際連携

今後より一層教育研究プログラムの内容を拡充させていくためには、科学技術政策研究領域に関する国際的な動向を調査し、さらに海外拠点との連携を強化し、その成果を本拠点独自の教育プログラムに反映させていくことが不可欠です。2019 年度には、以下の活動を行うことができました。

Ⅰ)「責任ある研究・イノベーション（Responsible Research and Innovation)」に関する国際的ネットワーク機関（VIRI）への加盟について

米国アリゾナ州立大学が構築した「責任ある研究・イノベーション（RRI)」に国際ネットワーク「Virtual Institute of Responsible Innovation（VIRI)」に、本拠点 STiPS は、2014 年 6 月から加盟しており、2019 年度も連携を継続しました。

Ⅱ）InSPIRES プロジェクト アドバイザリーボードへ参加

欧州連合（EU）のイノベーション推進施策である Horizon2020 の下で行われている公共的関与のプロジェクト「Ingenious Science shops to promote Participatory Innovation, Research and Equity in Science; InSPIRES」にアドバイザリーボードの一員として参加しています。

Ⅲ）教育・研究面での新たな連携の試み

豪州国立大学の Australian National Centre for the Public Awareness of Science（ANU-CPAS)、米国ジョージ・ワシントン大学国際科学技術政策研究所・宇宙政策研究所と教育・研究面での連携に向けた議論を行いました。

海外調査及び発表等

2019 年度、公共的関与に関わる基盤的研究の発展に向け、海外調査及び発表を行いました。具体的な活動は以下のとおりです。

2019 年 8 月 13 日～23 日、渡邉 浩崇（大阪大学 特任准教授）が、米国のニューヨークとワシントン DC で科学技術政策や宇宙政策に関する資料・情報収集、意見交換を行いました。ニューヨークでは、国連本部とアメリカ自然史博物館を訪問し、ワシントン DC では、スミソニアン航空宇宙博物館本館・別館、アメリカ航空宇宙局（NASA）本部を訪問して資料・情報収集を行い、またジョージ・ワシントン大学国際科学技術政策研究所・宇宙政策研究所を訪問して、「科学技術と公共政策」や「科学技術と国際関係」の教育・研究に関して意見交換を行いました。

2019 年 11 月 29 日～12 月 9 日、工藤 充（大阪大学 特任講師）が、科学コミュニケーション教育・研究・実践を多角的に行う世界有数の拠点である豪州国立大学の Australian National Centre for the Public Awareness of Science（ANU-CPAS）を訪問しました。同拠点が実施する科学技術対話の授業にゲストとして参加し、加えて、教育・研究スタッフらと科学コミュニケーション研究・教育についての情報交換・議論も行いました。

8. STiPS 参画教員による活動リスト（研究業績等）

8. STiPS 参画教員による活動リスト（研究業績等）

2019 年度の STiPS 参画教員による活動リストを掲載します。なお、リストアップの方針が大阪大学と京都大学では異なりますので、それぞれの方針を一読した上でご覧ください。

大阪大学

大阪大学の活動リストは、企画運営会議（本冊子 32 ページ参照）構成員の活動について掲載しています。

著書、論文、寄稿等

小林傳司. 2019. 「研究者の責任と倫理的・法的・社会的課題（ELSI）」,「科学技術イノベーション政策の科学」コアコンテンツ, 2019 年 4 月. 寄稿

岸本充生, 松尾真紀子. 2019. 「STI 政策プロセス」,「科学技術イノベーション政策の科学」コアコンテンツ, 2019 年 4 月. 寄稿

岸本充生. 2019. 「レギュラトリー・サイエンス」,「科学技術イノベーション政策の科学」コアコンテンツ, 2019 年 4 月. 寄稿

城山英明, 岸本充生, 松尾真紀子. 2019.「STI ガバナンスの構造」,「科学技術イノベーション政策の科学」コアコンテンツ, 2019 年 5 月. 寄稿

岸本充生. 2019. 「科学的知見と政策的対応の間のギャップを埋めるレギュラトリーサイエンス」,『セイフティ・エンジニアリング』, 46(2)：4-9, 2019 年 6 月. 寄稿

岸本充生. 2019. 「1-1 リスク学とは何か」, 日本リスク研究学会 編『リスク学事典』, 丸善出版, 2019 年 6 月. 著書

岸本充生. 2019. 「1-2 リスクの概念と定義の多様化」, 日本リスク研究学会 編『リスク学事典』, 丸善出版, 2019 年 6 月. 著書

岸本充生, 広田すみれ. 2019. 「1-3 リスク学の歴史」, 日本リスク研究学会 編『リスク学事典』, 丸善出版, 2019 年 6 月. 著書

岸本充生. 2019. 「1-8 リスクの社会実装－行政編」, 日本リスク研究学会 編『リスク学事典』, 丸善出版, 2019 年 6 月. 著書

岸本充生. 2019. 「3-1 リスクガバナンスの概念と枠組み」, 日本リスク研究学会 編『リスク学事典』, 丸善出版, 2019 年 6 月. 著書

東海明宏, 小野恭子, 岸本充生. 2019. 「3-5 リスク管理の基準とリスク受容」, 日本リスク研究学会 編『リスク学事典』, 丸善出版, 2019 年 6 月. 著書

岸本充生. 2019. 「3-6 リスク削減対策の多様なアプローチ」, 日本リスク研究学会 編『リスク学事典』, 丸善出版, 2019 年 6 月. 著書

岸本充生. 2019. 「3-12 社会経済分析の制度化」, 日本リスク研究学会 編『リスク学事典』, 丸善出版, 2019 年 6 月. 著書

岸本充生. 2019. 「13-1 新興リスク（Emerging risk）の特徴」, 日本リスク研究学会 編『リスク学事典』, 丸善出版, 2019 年 6 月. 著書

岸本充生. 2019. 「13-4 ナショナルリスクアセスメント」, 日本リスク研究学会 編『リスク学事典』, 丸善出版, 2019 年 6 月. 著書
岸本充生. 2020. 「いま問われるエマージングリスクへの取り組み」, 『リスクマネジメント TODAY』, 118: 4-7, 2020 年 1 月. 寄稿
神里達博. 2019. 「(月刊安心新聞 plus) 令和の日本　「強さ」より「面白さ」で勝負」, 『朝日新聞』, 4 月 19 日朝刊, 2019 年 4 月. 寄稿
神里達博. 2019. 「(月刊安心新聞 plus) 研究不正　事実と虚構、壁が溶けたか」, 『朝日新聞』, 5 月 17 日朝刊, 2019 年 5 月. 寄稿
神里達博. 2019. 「(月刊安心新聞 plus) 戦後日本の「ねじれ」論　彼の問い、再び向き合う時」, 『朝日新聞』, 6 月 21 日朝刊, 2019 年 6 月. 寄稿
神里達博. 2019. 「(月刊安心新聞 plus)「文理融合」の好奇心　面倒だけどいいじゃないか」, 『朝日新聞』, 7 月 19 日朝刊, 2019 年 7 月. 寄稿
神里達博. 2019. 「(月刊安心新聞 plus) ドラマが描く五輪と国家　「いだてん」は諦めない」, 『朝日新聞』, 8 月 23 日朝刊, 2019 年 8 月. 寄稿
神里達博. 2019. 「(月刊安心新聞 plus) 遅れた台風被害の把握　「仮想現実」だけ頼る脆弱さ」, 『朝日新聞』, 9 月 20 日朝刊, 2019 年 9 月. 寄稿
神里達博. 2019. 「(月刊安心新聞 plus) 日本列島と自然災害　対策立てれば未来は変わる」, 『朝日新聞』, 10 月 18 日朝刊, 2019 年 10 月. 寄稿
神里達博. 2019. 「(月刊安心新聞 plus) 多用される「安全安心」　語られぬリスクの裏返し」, 『朝日新聞』, 11 月 22 日朝刊, 2019 年 11 月. 寄稿
神里達博. 2019.「(月刊安心新聞 plus) 量子コンピューターの開発　社会変えうる技術、競争に熱」, 『朝日新聞』, 12 月 20 日朝刊, 2019 年 12 月. 寄稿
神里達博. 2020. 「(月刊安心新聞 plus) テクノロジーが覆う社会　専門知よりも「何が大切か」」, 『朝日新聞』, 1 月 24 日朝刊, 2020 年 1 月. 寄稿
神里達博. 2020. 「(月刊安心新聞 plus) 広がる新型肺炎　弱者の視点に立つ契機に」, 『朝日新聞』, 2 月 21 日朝刊, 2020 年 2 月. 寄稿
神里達博. 2020. 「(月刊安心新聞 plus) バッタの大発生被害　根本は過度な自然改造」, 『朝日新聞』, 3 月 20 日朝刊, 2020 年 3 月. 寄稿
八木絵香. 2019. 『続・対話の場をデザインする 安全な社会をつくるために必要なこと』, 大阪大学出版会, 2019 年 4 月. 著書
八木絵香. 2019. 「リスクコミュニケーション:マイナスな側面をどう共有してどう乗り越えるか」,「科学技術イノベーション政策の科学」コアコンテンツ, 2019 年 4 月. 寄稿
八木絵香. 2019. 「4-9 科学技術とコミュニケーション」, 日本リスク研究学会編『リスク学事典』丸善出版社, 2019 年 6 月. 著書
赤松幹之, 小木津武樹, 美輪和久, 八木絵香, 芳賀繁, 篠原一光. 2019. 「自動運転が社会的に受け入れられるために」, 『応用心理学研究』, 45(2) : 144-172. 2019 年 11 月. 寄稿
八木絵香, 水町衣里. 2020. 大阪大学 CO デザインセンター 監修『〈つながり〉を創りだす術：続・対話で創るこれからの「大学」』大阪大学出版会, 2020 年 2 月. 企画・編集
渡邉浩崇. 2019. 「ビッグサイエンスと社会」, 「科学技術イノベーション政策の科学」コアコンテンツ, 2019 年 4 月. 寄稿

渡邉浩崇. 2019.「日本の宇宙政策の歴史と現状―自主路線と国際協力―」,『国際問題』, 684：34-43, 2019 年 9 月．寄稿

工藤充．2019．「科学コミュニケーション:その政策的展開と学術的研究の概観」,「科学技術イノベーション政策の科学」コアコンテンツ, 2019 年 4 月．寄稿

Kano K, Kudo M, Yoshizawa G, Mizumachi E, Suga M, Akiya N, Ebina K, Goto T, Itoh M, Joh A, Maenami H, Minamoto T, Mori M, Morimura Y, Motoki T, Nakayama A, Takanashi K. 2019. “How science, technology and innovation can be placed in broader visions — Public opinions from inclusive public engagement activities, ” Journal of Science Communication, 18(03): A02. 2019 年 6 月．学術論文

工藤充，山崎吾郎，水町衣里．2019．「対話ワークショップを通じた高度汎用力教育：自動運転技術の倫理的側面をテーマとして」，『Co* Design』, 6: 33-50. 2019 年 7 月．レポート（報告）

工藤充．2019．「海外のサイエンスコミュニケーション研究の動向：「理解からエンゲージメントへ」のその後」，『日本サイエンスコミュニケーション協会誌』, 9(2): 8-11. 2019 年 12 月．学術論文

Kudo M, Wood M. 2020. “Creating opportunities to discuss the nature of Japanese science communication,” Journal of Science Communication, 19(1): R02. 2020 年 1 月．学術論文

水町衣里. 2019.「研究者コミュニティと市民が交わる場づくり」,「科学技術イノベーション政策の科学」コアコンテンツ, 2019 年 4 月．寄稿

学会発表等

Hirakawa H. 2019. “Development of Framing in Legal Debates over ‘Voluntary Evacuation’ in Fukushima Accident and STS Contributions,” 2019 Annual Meeting of the Society for Social Studies of Science (4S)(New Orleans,U.S.A.), 2019 年 9 月 5 日．口頭発表

平川秀幸. 2019．オーガナイズドセッション「培養肉の ELSI を考える」, 2019 年度 科学技術社会論学会総会・年次研究大会（野々市市，金沢工業大学）, 2019 年 11 月 9 日．ディスカッサント

坂田成実，神里達博. 2019．「日本の「AI 政策」の内実－政策過程の俯瞰的検討」, 2019 年度 科学技術社会論学会総会・年次研究大会（野々市市，金沢工業大学）, 2019 年 11 月 9 日．口頭発表

渡邉康平，神里達博. 2019．「Crowd-Supported Science の質保証に関する検討－CSS とコンセンサス会議の結合－」，科学技術社会論学会第 18 回年次研究大会（野々市市，金沢工業大学）, 2019 年 11 月 10 日．口頭発表

八木絵香, 2019．「地球規模かつ超長期の複合リスクをめぐる熟議とファシリテーション」（オーガナイズドセッション「地球規模かつ超長期の複合リスクをめぐる熟議の場の設計―気候変動対策に関する市民陪審を事例として―」)，科学技術社会論学会第 18 回年次研究大会(野々市市，金沢工業大学)，2019 年 11 月 10 日．口頭発表

三上直之，八木絵香，江守正多，田村哲樹，松浦正浩，池辺靖，工藤充，岩崎茜. 2019.「脱炭素社会への転換と生活の質に関する市民パネルの概要とその結果が差し示すもの」「オーガナイズドセッション：脱炭素社会への転換は生活の質に対する脅威か、機会か」，科学技術社会論学会第 18 回年次研究大会（野々市市，金沢工業大学）, 2019 年 11 月 10 日．口頭発表

Watanabe H. 2019. “Japan’s Space Policy and Organizations over the Last Decade: Diplomatic and Security Challenges Again?,” the 32nd International Symposium on Space Technology and Science (ISTS), (Fukui, Japan), 2019 年 6 月 21 日. 口頭発表

渡邉浩崇. 2019.「宇宙の歴史 4―宇宙政策史、宇宙法制史、宇宙科学技術史、宇宙産業史―」, 第 63 回宇宙科学技術連合講演会（徳島市, アスティとくしま）, 2019 年 11 月 7 日. 企画・司会

渡邉浩崇. 2019.「1980 年代の日本宇宙政策―自主路線と国際協力の両立―」, 第 63 回宇宙科学技術連合講演会（徳島市, アスティとくしま）, 2019 年 11 月 7 日. 口頭発表

工藤充. 2019.「ファシリテーション実践の省察から「市民参加」の意味を再考する」, 科学技術社会論学会第 18 回年次研究大会（野々市市, 金沢工業大学）, 2019 年 11 月 10 日. 口頭発表

社会活動（講演会・展示会などアウトリーチ活動等）

小林傳司. 2019. パネル討論 ファシリテーター, 学術フォーラム「産学共創の視点から考える人材育成」（東京都, 日本学術会議講堂), 2019 年 5 月 22 日.

小林傳司. 2019. 全体討論 コーディネーター, 日本学術会議設立 70 周年記念 近畿地区会議学術講演会「未来の語り口：学術からの貢献」(京都市, むすびわざ館), 2019 年 10 月 12 日. ＊台風により中止

小林傳司. 2019. パネル討論 モデレーター, 産学協働イノベーション人材育成シンポジウム 2019「オープンイノベーションに向けた≪新しいインターンシップ≫のかたち」(東京都, 東京大学弥生講堂), 2019 年 11 月 14 日.

小林傳司. 2019. 講師, 「高度教養教育の成果と課題：大阪大学の事例」, 早稲田大学総合研究センターシンポジウム　高年次教養教育の試みとその成果（東京都, 早稲田大学）, 2019 年 11 月 25 日.

小林傳司. 2019. コメント掲載,「科学振興、「人文科学」と共に　基本法の対象広げる改正案、来年国会提出へ」,『朝日新聞』, 2019 年 12 月 12 日.

小林傳司. 2019. 副主査・モデレーター, ムーンショット国際シンポジウム 分科会 7「分野横断：ELSI」（東京都, ベルサール東京日本橋), 2019 年 12 月 18 日.

小林傳司. 2020. 講師, 「社会と科学技術の関係」, 科学技術イノベーション政策研修（東京都, 政策研究大学院大学), 2020 年 1 月 24 日.

小林傳司. 2020. 講師,「ブダペスト宣言から 20 年：ELSI をめぐって」, 科学者の集まり（東京都, ホテルルポール麹町), 2020 年 1 月 30 日.

小林傳司. 2020. 全体討論 コーディネーター, 日本学術会議設立 70 周年記念 近畿地区会議学術講演会「未来の語り口：学術からの貢献」(京都市, むすびわざ館), 2020 年 3 月 8 日. ＊新型コロナウイルス感染拡大にともない中止

小林傳司. 2020. 基調講演, <ELSI センター>設立記念シンポジウム－AI ネットワーク社会の共創に向けた倫理・法・社会－（大阪市, グランフロント大阪コングレコンベンションセンター), 2020 年 3 月 9 日. ＊新型コロナウイルス感染拡大にともない中止

平川秀幸. 2019. 講演, 「科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に取り組む ― 責任ある研究・イノベーション (RRI) に向けて」, Forum 21, 2019 年度 10 月定例会 (東京都, 日本外国特派員協会), 2019 年 10 月 17 日.

祐野恵，森田朗，平川秀幸，井出和希，川上浩司．2020．シンポジスト，「自治体が保有する健康情報の活用と政策立案に関する期待と課題」，第 2 回政策のための科学オープンフォーラム「科学による政策課題解決」セッション 1（政策研究大学院大学），2020 年 1 月 15 日．

祐野恵，森田朗，平川秀幸，井出和希，川上浩司．2020．ポスター発表，「自治体が持つ学校健診情報の可視化とその利用に向けての基盤構築」，第 2 回政策のための科学オープンフォーラム「科学による政策課題解決」（政策研究大学院大学），2020 年 1 月 15 日．

平川秀幸．2020．講演，「リスク認知の社会的・規範的意味 ― 原発事故の避難者の現場から考える」，311 当事者ネットワーク（ヒラエス）キャラバン 2020 関西（京都市，聞法会館），2020 年 1 月 19 日．

平川秀幸．2020．インタビュー掲載，「（耕論）新型コロナ　不安、ですよね　個人が決定できる材料を」，『朝日新聞』，3 月 19 日，2020 年 3 月 19 日．

岸本充生．2020．コメント掲載，「センサーで心の奥も計測 乳児の体調や授業理解度も」，『日本経済新聞』，1 月 7 日電子版，2020 年 1 月 7 日．

岸本充生．2020．コメント掲載，「科学と倫理・法・社会　AI 進展で重要性高まる －直談　専門家に問う」，『日本経済新聞／日経産業』，3 月 18 日電子版，2020 年 3 月 18 日．

神里達博．2019．コメント掲載，「ヘルシーでエコ、でも「だまし」？ 代替肉の波が来た」，『朝日新聞』，10 月 4 日，2019 年 10 月 4 日．

神里達博．2019．パネリスト，研究・イノベーション学会 2019 年次学術大会シンポジウム「第 6 期科学技術基本計画へ向けた政策研究からの視座～科学技術イノベーション政策の未来へ～」（東京都，政策研究大学院大学），2019 年 10 月 26 日．

八木絵香．2019．ラジオ出演，みのおエフエム　まちのラジオ「大阪大学社学連携事業」，2019 年 6 月 13 日．

八木絵香．2019．企画・コーディネーター（聞き手），「ナレッジキャピタル超学校 大阪大学 CO デザインセンター×ナレッジキャピタル：対話で創るこれからの「大学」 第 1 回「『わからないこと』を楽しむ」（大阪市，ナレッジキャピタル），2019 年 6 月 18 日．

八木絵香．2019．企画・司会，サイエンスカフェ＠千里公民館「自動運転とわたしたちの暮らし」（豊中市，豊中市立千里公民館），2019 年 6 月 26 日．

八木絵香．2019．全体進行，市民参加型ワークショップ「再生医療」（大阪市，UMEDAI 大阪・梅田会議室），2019 年 7 月 13 日．

八木絵香．2019．企画・コーディネーター（聞き手），「ナレッジキャピタル超学校 大阪大学 CO デザインセンター×ナレッジキャピタル：対話で創るこれからの「大学」 第 2 回「異なる文化のあいだに立つ」（大阪市，ナレッジキャピタル），2019 年 8 月 5 日．

八木絵香．2019．企画・コーディネーター（聞き手），「ナレッジキャピタル超学校 大阪大学 CO デザインセンター×ナレッジキャピタル：対話で創るこれからの「大学」 第 3 回「『できない』を『できる』に変えていく力」（大阪市，ナレッジキャピタル），2019 年 10 月 1 日．

八木絵香．2019．企画・司会，サイエンスカフェ＠千里公民館「再生医療とミライの生き方」（豊中市，豊中市立千里公民館），2019 年 10 月 15 日．

八木絵香．2019．パネルディスカッション コーディネーター，食の安全安心シンポジウム「『生で食べる文化』を深く考える」（大阪市，大阪府庁新別館北館），2019 年 10 月 28 日．

八木絵香．2019．講師，広島大学附属高等学校スーパーサイエンスハイスクール「科学と倫理：なぜ、原子力をめぐる議論はすれ違うのか」（広島市，広島大学附属高校），2019 年 11 月 1 日．

渡邉浩崇. 2019. コメント掲載, 「【アポロ月面着陸 50 年】再び月、そして火星へ　「偉大な米国」継承」, 『産経新聞』, 7 月 20 日朝刊, 2019 年 7 月 20 日.

渡邉浩崇. 2019. コメント掲載, 「【新時代】第 8 部　宇宙の攻防 (2)　月へ火星へ　大国の野望」, 『産経新聞』, 8 月 20 日朝刊, 2019 年 8 月 20 日.

渡邉浩崇. 2019. 招待講演, 「宇宙政策を考える―日本は宇宙先進国でありたいのか？―」, 大阪大学法学部同窓会「青雲会」第 66 回青雲塾, 2019 年 12 月 7 日.

辻田俊哉. 2019. 講師（対談者), ナレッジキャピタル超学校 大阪大学 CO デザインセンター×ナレッジキャピタル：対話で創るこれからの「大学」 第 2 回「異なる文化のあいだに立つ」(大阪市, ナレッジキャピタル), 2019 年 8 月 5 日.

辻田俊哉. 2019. ラジオ出演, みのおエフエム　まちのラジオ「大阪大学社学連携事業」, 2019 年 8 月 8 日.

工藤充. 2019. 講演・パネリスト, Build SciComm: An international symposium on strategies for fostering science communication in Japan（つくば市, 筑波大学 総合研究棟 A), 2019 年 11 月 2 日.

工藤充. 2020. 話題提供者, 「科学技術政策と科学コミュニケーションの実践・教育・研究」, 第 10 回 SSI サロン「人と人とをつなぐ人 － いかにしてはぐくむか」(豊中市, 大阪大学), 2020 年 1 月 30 日.

水町衣里. 2019. 企画, ナレッジキャピタル超学校 大阪大学 CO デザインセンター×ナレッジキャピタル：対話で創るこれからの「大学」 第 1 回「『わからないこと』を楽しむ」(大阪市, ナレッジキャピタル）, 2019 年 6 月 18 日.

水町衣里. 2019. 企画, サイエンスカフェ@千里公民館「自動運転とわたしたちの暮らし」(豊中市, 豊中市立千里公民館）, 2019 年 6 月 26 日.

水町衣里. 2019. 取材協力, 「定番のお出かけスポットでできる「学び」に役立つ“見方”」, 『こどもちゃれんじ じゃんぷ 通信』, 7 月号, 2019 年 7 月.

水町衣里. 2019. 企画, レッジキャピタル超学校 大阪大学 CO デザインセンター×ナレッジキャピタル：対話で創るこれからの「大学」 第 2 回「異なる文化のあいだに立つ」(大阪市, ナレッジキャピタル）, 2019 年 8 月 5 日.

水町衣里. 2019. 企画, ナレッジキャピタル超学校 大阪大学 CO デザインセンター×ナレッジキャピタル：対話で創るこれからの「大学」 第 3 回「『できない』を『できる』に変えていく力」(大阪市, ナレッジキャピタル）, 2019 年 10 月 1 日.

水町衣里. 2019. 企画, サイエンスカフェ@千里公民館「再生医療とミライの生き方」(豊中市, 豊中市立千里公民館）, 2019 年 10 月 15 日.

京都大学

京都大学の活動リストは、参画教員の活動について掲載いたしました。

著書、論文、寄稿等

Masayuki Nakashima, Kazuki Ide, and Koji Kawakami. 2019. “Standard initial dose and reduced initial dose regorafenib for colorectal cancer patients: A retrospective cohort study”, Targeted Oncology, 2019 年. 学術論文

Shin Kawasoe, Kazuki Ide, Tomoko Usui, Takuro Kubozono, Shiro Yoshifuku, Hironori Miyahara, Shigeho Maenohara, Mitsuru Ohishi, and Koji Kawakami. 2019. “Distribution and characteristics of hypouricemia within the Japanese general population: A cross-sectional study”, Medicina, 55, 61; doi:10.3390/medicina55030061, 2019 年. 学術論文

Woo Jin Joo, Kazuki Ide, Yohei Kawasaki, Chikashi Takeda, Tomotsugu Seki, Tomoko Usui, and Koji Kawakami. 2019. “Effectiveness and safety of early enteral nutrition for patients who received targeted temperature management after out-of-hospital cardiac arrest”, Resuscitation, 135: 191-196, 2019 年. 学術論文

Hiroshi Yonekura, Kazuki Ide, Yoshika Onishi, Isao Nahara, Chikashi Takeda, and Koji Kawakami. 2019. “Preoperative echocardiography for patients with hip fractures undergoing surgery: a retrospective cohort study using a nationwide database”, Anesthesia & Analgesia, 128(2):213-220, 2019 年. 学術論文

川上浩司. 2019. 「ライフコースデータにおける母子保健、学校健診情報のデータベース化、方法とベネフィット」, 『日本医師会総合政策研究機構日本の医療のグランドデザイン 2030』, 132-140, 2019 年. 著書

川上浩司. 2019. 「乳幼児や学童の健診情報や、医療機関の診療情報を健康長寿社会に生かす」,『鹿児島県医師会報』, 令和元年 12 月号, 85-90, 2019 年. 解説

川上浩司. 2019. 「ライフコースデータ基盤やリアルワールドデータを健康長寿政策に生かす」,『日本老年学会雑誌』, 56:434-440, 2019 年. 解説

川上浩司. 2019. 「予防医療のためのライフコースデータ（小谷和彦監修：ビッグデータによる地域医療コントロール)」,『Precision Medicine』, 2(8):26-29, 2019 年. 解説

Tomotsugu Seki, Morio Aki, Hirotsugu Kawashima, Tomotaka Miki, Shiro Tanaka, Koji Kawakami, and Toshi A. Furukawa. 2019. “Electronic health record nested pragmatic randomized controlled trial of a reminder system for serum lithium level monitoring in patients with mood disorder: KONOTORI study protocol,” Trials, 20:706, 2019 年. 学術論文

Tomoko Usui, Chiho Iseki, Kunitoshi Iseki, Koji Kawakami, and Masaomi Nangaku. 2019. “Longitudinal change in blood pressure and risk of end-stage renal disease in a community-based cohort in Okinawa,” Clinical and Experimental Nephrology, 23(11):1280-1287, 2019 年. 学術論文

Sachiko Kasamo, Masato Takeuchi, Masashi Ikuno, Yohei Kawasaki, Shiro Tanaka, Ryosuke Takahashi, and Koji Kawakami. 2019. “Real-world pharmacological treatment patterns of patients with young-onset Parkinson’s disease: a medical claims database analysis,” Journal of Neurology, 266:1944-1952, 2019 年. 学術論文

Maki Shinzawa, Shiro Tanaka, Hironobu Tokumasu, Daisuke Takada, Tatsuo Tsukamoto, Motoko Yanagita, and Koji Kawakami. 2019. “Association of low birth weight with childhood proteinuria at age 3 years: A population-based retrospective cohort study,” AJKD, 74:141-143, 2019 年. 学術論文

Ryusuke Miki, Masato Takeuchi, Takumi Imai, Tomotsugu Seki, Shiro Tanaka, Masaki Nakamura, and Koji Kawakami. 2019. “Association of intensive care unit admission and mortality in patients with acute myocardial infarction,” Journal of Cardiology, 74:109-115, 2019 年. 学術論文

Kahori Seto, Eiko Shimizu, Arong Gaowa, Tomohisa Horibe, Aki Matsumo, Shinji Ito, Masayuki Kohno, and Koji Kawakami. 2019. “Toxicity testing of epidermal growth factor receptor-targeted hybrid peptide for preclinical study,” International Journal of Clinical and Experimental Medicine, 12(9):11529-11537, 2019 年. 学術論文

Hirotaka Iwaki, Masaaki Tagawa, Kosuke Iwasaki, Koji Kawakami, and Masahiro Nomoto. 2019. “Comparison of Zonisamide with non-levodopa, anti-Parkinson’s disease drugs in the incidence of Parkinson’s disease-relevant symptoms,” Journal of Neurological Sciences, 402:145-152, 2019 年. 学術論文

Masahiro Iwasaku, Maki Shinzawa, Shiro Tanaka, and Koji Kawakami. 2019. “Impact of underlying chronic adrenal insufficiency on clinical course of hospitalized patients with adrenal crisis: a nationwide cohort study”, European Journal of Internal Medicine, 64:24-28, 2019 年. 学術論文

Ryohsuke Kurihara, Tomohisa Horibe, Eiko Shimizu, Aya Torisawa, Arong Gaowa, Masayuki Kohno, and Koji Kawakami. 2019. “A novel interleukin-13 receptor alpha2-targeted hybrid peptide for effective glioblastoma therapy”, Chem. Bio. Drug Ther., 94(1):1402-1413, 2019 年. 学術論文

Shuhei Yamada, Izumi Sato, and Koji Kawakami. 2019. “A descriptive epidemiological study on the treatment options for head and neck cancer: transition before and after approval of Cetuximab,” Pharmacoepidemiology and Drug Safety, 28:330-336, 2019 年. 学術論文

Takahiro Imanaka, Izumi Sato, Yohei Kawasaki, Yuji Kanazawa, and Koji Kawakami. 2019. “An analysis of factors associated with compliance and dropout of sublingual immunotherapy on Japanese cedar pollinosis patients”, International Forum of Allergy & Rhinology, 2019 年. 学術論文

Masato Takeuchi, Sayuri Nakano, Sachiko Tanaka-Mizuno, Chika Nishiyama, Yuko Doi, Masaru Arai, Yosuke Fujii, Toshiyuki Matsunaga, and Koji Kawakami. 2019. “Adherence and concomitant medication use among patients on warfarin therapy: Insight from large pharmacy dispensing database in Japan,” Biological and Pharmaceutical Bulletin, 42(3):389-393, 2019 年. 学術論文

Madoka Yamamoto-Sasaki, Satomi Yoshida, Masato Takeuchi, Sachiko Tanaka-Mizuno, Yusuke Ogawa, Toshiaki A. Furukawa, and Koji Kawakami. 2019. “Association between antidepressant use during pregnancy and autism spectrum disorder in children: A retrospective cohort study based on Japanese claims data,” Maternal Health, Neonatology and Perinatology, 5:1-7, 2019 年. 学術論文

Chikashi Takeda, Masato Takeuchi, Toshiyuki Mizota, Hiroshi Yonekura, Isao Nahara, Aki Kuwauchi, Woo Jin Joo, Yohei Kawasaki, and Koji Kawakami. 2019. “Utilization of arterial pulse waveform analysis during non-cardiac surgery in Japan: A retrospective observational study using a nationwide claims database,” Journal of Anesthesia, 33(1):159-162, 2019 年. 学術論文

Chikashi Takeda, Masato Takeuchi, Yohei Kawasaki, Hiroshi Yonekura, Isao Nahara, Aki Kuwauchi, Satomi Yoshida, Shiro Tanaka, and Koji Kawakami. 2019. “Prophylactic sivelestat for esophagectomy and in-hospital mortality: a propensity score-matched analysis of claims database,” Journal of Anesthesia, 33(2):230-237, 2019 年. 学術論文

Motoko Nakayama, Shiro Tanaka, Shota Hamada, Takahiro Uchida, and Koji Kawakami. 2019. “Recalls and premarket review systems for high-risk medical devices in Japan,” Therapeutic Innovation & Regulatory Science, 53(6):775-780, 2019 年. 学術論文

Sumihiro Kawano, Masato Takeuchi, Shiro Tanaka, Takehiro Yamashita, Taiji Sakamoto, and Koji Kawakami. 2019. “Current status of late and recurrent intraocular lens dislocation: Analysis of real-world data in Japan,” Japanese Journal of Ophthalmology, 63(1):65-72, 2019 年. 学術論文

Mizuno K, Takeuchi M, Kanazawa Y, Kitamura M, Ide K, Omori K, Kawakami K. 2019. “Recurrent laryngeal nerve paralysis after thyroid cancer surgery and intraoperative nerve monitoring”, Laryngoscope, 129(8): 1954-1960, 2019 年 8 月. 学術論文

漆原尚巳, 田中司郎, 川上浩司（監修); 井出和希, 古閑 晃(監訳). 2019.『ストロムの薬剤疫学-Textbook of Pharmacoepidemiology-』, 南山堂, 2019 年 10 月. 著書

Yonekura H, Ide K, Kanazawa Y, Takeda C, Nakamori Y, Matsunari Y, Sakai M, Kawakami K, Kamei M. 2019. “Use of preoperative haemostasis and ABO blood typing tests in children: A retrospective observational study using a nationwide claims database in Japan,” BMJ Open, 9(11): e032306 (8 pages), 2019 年 11 月. 学術論文

Ide K, Yoshida S, Kimura T, Oita Y, Kawakami K. 2020. “The general understanding and perceptions of the practical use of school health records: A questionnaire survey of parents from seven local municipalities in Japan”, School Health , in press, 2020 年. 学術論文

Joo WJ, Ide K, Nishiyama K, Seki T, Tanaka H, Tsuchiya J, Ito N, Yoshida K, Kawakami K. 2020. “Prediction of the neurological outcome using regional cerebral oxygen saturation in patients with extracorporeal cardiopulmonary resuscitation after out-of-hospital cardiac arrest: A multicenter retrospective cohort study”, Acute Med Surg, in press, 2020 年. 学術論文

Nagai K, Matsubayashi K, Ide K, Seto K, Kawasaki Y, Kawakami K. 2020. “Factors influencing placebo responses in rheumatoid arthritis clinical trials: a meta-analysis of randomized, double-blind, placebo-controlled studies”, Clin Drug Invest, in press, 2020 年. 学術論文

Nagai K, Ide K, Kawasaki Y, Tanaka-Mizuno S, Seto K, Iwane S, Eguchi Y, Kawakami K. 2020. “Estimating the cost-effectiveness of screening for hepatitis C virus infection in Japan,” Hepatology Res, in press, 2020 年. 学術論文

Nakashima M, Ide K, Kawakami K. 2020. “Comparison of laparoscopic and open repair for inguinal hernia in children: A retrospective cohort study”, Surg Today, in press, 2020 年. 学術論文

Chikashi Takeda, Masato Takeuchi, Toshiyuki Mizota, Hiroshi Yonekura, Isao Nahara, Woo Jin Joo, Li Dong, Yohei Kawasaki, and Koji Kawakami. 2020. “The association between arterial pulse waveform analysis device and in-hospital mortality in high-risk non-cardiac surgeries,” Acta Anaesthesiologica Scandinavica, 2020 年. 学術論文

Masato Takeuchi, Masahito Ogura, Takaaki Minoura, Nobuya Inagaki, and Koji Kawakami. 2020. “Comparative effectiveness of SGLT2 inhibitors vs other classes of glucose-lowering medications on renal outcome in type 2 diabetes,” Mayo Clinic Proceesings, 95(2):265-273, 2020 年. 学術論文

Keisuke Matsubayashi and Koji Kawakami. 2020. “Syphilis testing among spouses of patients with syphilis in Japan: an epidemiological study using an administrative claims database,” International Journal of STD & AIDS, 2020 年. 学術論文

Masanobu Ishii, Tomotsugu Seki, Koichi Kaikita, Kenji Sakamoto, Michikazu Nakai, Yoko Sumita, Kunihiro Nishimura, Yoshihiro Miyamoto, Teruo Noguchi, Satoshi Yasuda, Yoshihiko Saito, Hiroyuki Tsutsui, Issei Komuro, Hisao Ogawa, Kenichi Tsujita, and Koji Kawakami, on the behalf of JROAD Investigators. 2020. “Association of short-term exposure to air pollution with myocardial infarction with and without obstructive coronary artery disease,” European Journal of Preventive Cardiology, 2020 年. 学術論文

Masanobu Ishii, Kenji Sakamoto, Tomotsugu Seki, Koji Kawakami, Michikazu Nakai, Yoko Sumita, Kunihiro Nishimura, Yoshihiro Miyamoto, Teruo Noguchi, Satoshi Yasuda, Hiroyuki Tsutsui, Issei Komuro, Yoshihiko Saito, Hisao Ogawa, Kenichi Tsujita, and Koichi Kaikita. 2020. “Characteristics and in-hospital mortality of patients with myocardial infarction in the absence of obstructive coronary artery disease in super-aging society,” International Journal of Cardiology, 301:108-113, 2020 年. 学術論文

Chi Zhang, Pu-wen Lei, Koji Koyamada. 2019. "Optimized System for Extreme Precipitation Events Extraction Based on Improved Percentile Method," Journal of Advanced Simulation in Science and Engineering, 6(2), 317-330, 2019 年. 学術論文

Yuki Ueno, Hiroaki Natsukawa, Nozomi Aoyama, Koji Koyamada. 2019. "Exploration behavior of group-in-a-box layouts," Visual Informatics, 3(1), 38-47. 2019 年. 学術論文

Chi Zhang, Qing-wu Gong, Koji Koyamada. 2020. "Visual Analytics and Prediction System Based on Deep Belief Networks for Icing Monitoring Data of Overhead Power Transmission Lines," Journal of Visualization, (accepted). 2020 年. 学術論文

Chi Zhang, Qing-wu Gong, Ting Wang, Koji Koyamada. 2020. "Visual Extraction System for Insulators on Power Transmission Lines from UAV Photos Using Support Vector Machine and Color Models," Journal of Visualization, (accepted). 2020 年. 学術論文

Taniyama Y., Becker, CB., Takahashi, H., Tokumaru, S., Suzuki, I., Okui, K., Gohori, J., Imai, Y., Morita, T. “Listening to Sutra-Chanting Reduces Bereavement Stress in Japan,” Journal of Health Care Chaplaincy, 20. 2019 年 8 月. 学術論文

カール・ベッカー. 2019.「看護に活かせる日本人の死生観」,『仏教看護・ビハーラ』, 14:16-28, 2019 年 11 月. 寄稿

貝克你（カール・ベッカー）. 2019. 「倫理的使命」, 稲盛和夫編『与万物共生』, 机械工業出版社, 2019 年 11 月. 著書

Ikeda, Y., Egawa, M., Hiyoshi, K., Ueno T., Ueda, K., Becker, CB., Takahashi, Y., Nakayama, T., Mandai, M. 2020. “Development of a Japanese version of the Daily Record of Severity of Problems for Diagnosing Premenstrual Syndrome,” Women's Health Reports, 1. 2020 年. 学術論文

カール・ベッカー. 2020. 「お寺離れ時代における僧侶の役割」,『輪宝』, 35:35-42, 2019 年 12 月. 寄稿

得丸定子, 奥井一機, 今井洋介, 森田敬史, 郷堀ヨセフ, カール・ベッカー. 2020. 「お経を聴くことの効果とその可能性」, 『智山ジャーナル』, 91:14-22, 2020 年 2 月. 寄稿

鎌田實, カール・ベッカー. 2020. 「輝く人生の「終い方」」, 『潮』, 733:176-183, 2020 年 3 月. 寄稿

中山健夫. 2019. 「新しい患者 - 病院関係: shared decision making」,『病院』, 78（11）：807-811. 2019 年. 学術論文

Kanatani KT, Adachi Y, Hamazaki K, Onishi K, Go T, Hirabayashi K, Watanabe M, Sato K, Kurozawa Y, Inadera H, Oyama H, Nakayama T; Japan Environment and Children's Study Group. 2019. "Association between vitamin D deficiency and allergic symptom in pregnant women," PLoS One, 10;14(4):e0214797. 2019 年 4 月. 学術論文

Nishikawa Y, Kohno A, Takahashi Y, Suzuki C, Kinoshita H, Nakayama T, Tsubokura M. 2019. "Stable Iodine Distribution Among Children After the 2011 Fukushima Nuclear Disaster in Japan: An Observational Study," J Clin Endocrinol Metab, 1;104(5):1658-1666. 2019 年 5 月. 学術論文

Mo X, Gai RT, Sawada K, Takahashi Y, Cox SE, Nakayama T, Mori R. 2019. "Coronary heart disease and stroke disease burden attributable to fruit and vegetable intake in Japan: projected DALYS to 2060," BMC Public Health, 7;19(1):707. 2019 年 6 月. 学術論文

Nishimura M, Kohno A, van der Steen JT, Naganuma T, Nakayama T. 2019. "Conceptualization of a good end-of-life experience with dementia in Japan: a qualitative study," Int Psychogeriatr, 28:1-11. 2019 年 8 月. 学術論文

Ikeda-Sakai Y, Saito Y, Obara T, Goto M, Sengoku T, Takahashi Y, Hamada H, Nakayama T, Murashima A. 2019. "Inadequate Folic Acid Intake Among Women Taking Antiepileptic Drugs During Pregnancy in Japan: A Cross-Sectional Study," Sci Rep, 18;9(1):13497. 2019 年 9 月. 学術論文

Matsumoto T, Tabara Y, Murase K, Setoh K, Kawaguchi T, Nagashima S, Kosugi S, Nakayama T, Wakamura T, Hirai T, Matsuda F, Chin K; Nagahama Study Group. 2019. "Association between sleep disturbance and nocturnal blood pressure profiles by a linear mixed model analysis: the Nagahama study," Sleep Med, 61:104-109. 2019 年 9 月. 学術論文

Sasaki S, Imura H, Sakai K, Goto Y, Kitazawa K, Neff Y, Fujimoto S, Kaneyama J, Okumura A, Takahashi Y, Nakayama T. 2019. "Updates to and quality of clinical practice guidelines for high-priority diseases in Japan," Int J Qual Health Care. 2019 年 11 月. 学術論文

Murase K, Tanizawa K, Minami T, Matsumoto T, Tachikawa R, Takahashi N, Tsuda T, Toyama Y, Ohi M, Akahoshi T, Tomita Y, Narui K, Nakamura H, Ohdaira T, Yoshimine H, Tsuboi T, Yamashiro Y, Ando S, Kasai T, Kita H, Tatsumi K, Burioka N, Tomii K, Kondoh Y, Takeyama H, Handa T, Hamada S, Oga T, Nakayama T, Sakamaki T, Morita S, Kuroda T, Hirai T, Chin K. 2019. "A Randomized Controlled Trial of Telemedicine for Long-Term Sleep Apnea CPAP Management," Ann Am Thorac Soc. 2019 年 11 月. 学術論文

Itazawa T, Kanatani KT, Hamazaki K, Inadera H, Tsuchida A, Tanaka T, Nakayama T, Tohshin G, Onishi K, Kurozawa Y, Adachi Y. 2019. "Japan Environment, Children's Study Group. The impact of exposure to desert dust on infants' symptoms and countermeasures to reduce the effects," Allergy. 2019 年 12 月. 学術論文

Okada H, Johnston K, Nakayama T, Marra C, Tsuyuki RT. 2019. “Economic Evaluation of Pharmacists Tackling the Burden of Hypertension in Japan,” Hypertension, 74(6):e54-e55. 2019 年 12 月. 学術論文

中山健夫. 2020. 「診療ガイドラインとは何か：EBM、診療ガイドラインの歴史と定義、未来展望」,『医学のあゆみ』, 272(6): 556-560, 2020 年. 学術論文

岩下直行. 2019. 「暗号資産への脅威と対策― ビットコインの社会への展開による変質 ―」, 『情報処理学会デジタルプラクティス 』10(3), 441-456, 2019 年 7 月. 学術論文

岩下直行. 2019. 「自治体 ICO について」, 『国際文化研修 27(2) 』52-57, 2019 年 11 月. 寄稿

岩下直行. 2019. 「フィンテックが変える未来。日本と世界のキャッシュレス化」, 『アド・スタディーズ』Vol.70 Winter 2019(12 月 25 日号) 10-15, 2019 年 12 月. 寄稿

Naoyuki Iwashita. 2020. "Facebook’s Libra is far from broad acceptance as a world currency, Evolutionary and Institutional Economics Review", Volume 17, Number 1, 2020 年 3 月. 学術論文

Egusa, T., Kumagai, T., Oda, T., Gomi, T. and Ohte, N. 2019. “Contrasting patterns in the decrease of spatial variability with increasing catchment area between stream discharge and water chemistry,” Water Resources Research 55(8), 7419-7435. 2019 年. 学術論文

Oda, T., Imamura, N., Egusa, T. and Ohte, N. 2019. “The effects of canopy alteration–induced atmospheric deposition changes on stream chemistry in Japanese cedar forest. Forest Ecology and Management,” 448, 85-93. 2019 年. 学術論文

Ohte, N. and Katsuyama, M. 2019. “Comparison of nitrate export patterns in forested catchments in Japan and the Northeastern United States: A meta‐analysis,” Hydrological Processes, 33(25), 3184-3194. 2019 年. 学術論文

Taillardat, P., Ziegler, A.D., Friess, D.A., Widory, D., David, F., Ohte, N., Nakamura, T., Evaristo, J., Thanh-Nho, N. and Van Vinh, T. 2019. “Assessing nutrient dynamics in mangrove porewater and adjacent tidal creek using nitrate dual-stable isotopes: A new approach to challenge the Outwelling Hypothesis? ,” Marine Chemistry, 214, 103662. 2019 年. 学術論文

Murakami, M., Miyata, T., Kobayashi, N., Tanoi, K., Ishii, N. and Ohte, N. 2019. “The Spatial Distribution of Radiocesium Over a Four-Year Period in a Forest Ecosystem in North Fukushima After the Nuclear Power Station Accident, in “Agricultural Implications of the Fukushima Nuclear Accident (III)”, ” Springer, Singapore. 141-152, 2019 年. 著書

広井良典. 2019. 『人口減少社会のデザイン』, 東洋経済新報社. 2019 年. 著書

広井良典, 須藤一磨, 福田幸二. 2019. 『ＡＩ×地方創生』, 東洋経済新報社. 2019 年. 著書

広井良典. 2019. 「人口減少社会における地方移住の意義」,『都市問題』, 110(6):38-47. 2019 年. 寄稿

広井良典. 2019.「ＡＩが示す日本社会の未来と持続可能性：2050 年、日本は持続可能か？」,『労働の科学』, 74(2):68-73. 2019 年. 寄稿

広井良典. 2019.「ポスト成長時代に待望されるコミュニティ」,『建築とまちづくり』, 2019 年 7 月号:6-12. 2019 年. 寄稿

広井良典. 2019. 「ＡＩと自治体職員の「構想力」」,『ガバナンス』, 2019 年 10 月号:20-22. 2019 年. 寄稿

広井良典. 2019. 「成熟した人口減少社会における病院－患者関係」,『病院』, 2019 年 11 月号:802-806. 2019 年. 寄稿

広井良典, 和川央. 2020. 「幸福度指標をめぐる政策展開――岩手県」,『ガバナンス』, 2020 年 3 月号:118-119. 2020 年. 寄稿

宮野公樹. 2019. 「『今を生きる』の意味」, 『アステイオン』, 91, 2019 年 10 月. 寄稿

Tomitaka S, Kawasaki Y, Ide K, Akutagawa M, Ono Y, Furukawa T. 2019. "Distribution of psychological distress is stable in recent decades and follows an exponential pattern in the US population", Sci Rep, 9: 11982 (10 pages), 2019 年 8 月. 学術論文

Aoki Y, Ide K, Nakajima F, Kawasaki Y, Fujita Y, Morimoto E, Yokoyama J. 2019. "Esophagectomy surgical Apgar score may not be associated with postoperative morbidity", Semin Thorac Cardiovasc Surg, 31(3): 574-580, 2019 年 9 月. 学術論文

Tomitaka S, Kawasaki Y, Ide K, Akutagawa M, Ono Y, Furukawa TA. 2019. "Responses to depressive symptom items exhibit a common mathematical pattern across the European populations", Sci Rep, 9: 14923 (9 pages), 2019 年 10 月. 学術論文

学会発表等

坂本享史, 錦織達人, 後藤励, 肥田侯矢, 角田茂, 川上浩司, 中山健夫, 小濱和貴, 久森重夫, 坂井義治. 2019. 「食道切除術の Hospital volume と周術期医療費との関連: ナショナルデータベースを利用した 5134 例の解析」, 第 119 回日本外科学会学術集会(大阪), 2019 年 4 月 18 日-20 日. 口頭発表

錦織達人, 肥田侯矢, 小濱和貴, 角田茂, 岡部寛, 星野伸晃, 川上浩司, 松村由美, 坂井義治. 2019. 「医療ビッグデータを利活用するプラットフォームとしての人材育成」, 第 119 回日本外科学会学術集会(大阪）, 2019 年 4 月 18 日-20 日. 口頭発表

碓井知子, 井関千穂, 井関邦敏, 南学正臣, 川上浩司. 2019. 「高血圧患者に対する降圧薬処方の実態」, 第 116 回日本内科学会総会(名古屋), 2019 年 4 月 26 日-28 日. 口頭発表

Ide K, Seto K, Usui T, Tanaka S, Kawakami K. 2019. "Increased number of dental caries correlated with dementia: An observational study using a multicenter database in Japan," 19th Scientific Meeting of the Japanese Society of Anti-Aging Medicine（神奈川県）, 2019 年 6 月 14 日. 口頭発表

関知嗣, 川上浩司, 仲井培雄, 西田径, 庄田勝浩, 中村正樹, 平井真司. 2019.「POC リハビリと患者予後の関連性評価: DPC データベース及びアンケートを用いた研究計画」, 地域包括ケア病棟協会第 5 回地域包括ケア病棟協会研究大会(東京), 2019 年 7 月 27 日. 口頭発表

Masato Takeuchi and Koji Kawakami. 2019. "The validity of atrial fibrillation in electric medical records: a single university hospital experience in Japan," 35th International Conference on Pharmacoepidemiology and Therapeutic Risk Management(Philadelphia, PA, USA), 2019 年 8 月 24 日-28 日. 口頭発表

Tomotsugu Seki. Masato Takeuchi, Shin Kawasoe, Kazufumi Takeuchi, Ryusuke Miki, Kenji Ueshima, and Koji Kawakami. 2019. "Association of outpatient cardiac rehabilitation with mortality and morbidities in patients with acute myocardial infarction," European Society of Cardiology (ESC) Congress 2019,(Paris, France), 2019 年 8 月 29 日-31 日. 口頭発表

木戸愛，赤木忠道，三宅正裕，田村寛，池田華子，亀田隆範，須田謙史，長谷川智子，吉田都美，川上浩司，辻川明孝. 2019. 「レセプトデータベースを用いた本邦の気管支喘息患者におけるβ遮断薬点眼の処方実態」，第 30 回日本緑内障学会（熊本）, 2019 年 9 月 6 日-8 日. 口頭発表

Hirotaka Iwaki, Masaaki Tagawa, Kosuke Iwasaki, Koji Kawakami, and Masahiro Nomoto. 2019. “Comparison of Zonisamide with non-Levodopa, anti-Parkinson’s disease drugs in the incidence of Parkinson’s disease-relevant symptoms,” International Congress of Parkinson's Disease and Movement Disorders 2019.(Nice, France), 2019 年 9 月 22 日-26 日. 口頭発表

Tomohisa Horibe and Koji Kawakami. 2019. “Functional analysis of novel interleukin-13 receptor α 2-targeted hybrid peptide for potent glioblastoma therapy”, 第 78 回日本癌学会学術集会（京都), 2019 年 9 月 26 日-28 日. 口頭発表

関知嗣，安藝森央，川島啓嗣，三木寛隆，田中司朗，川上浩司，古川壽亮. 2019. 「炭酸リチウム長期内服中の気分障害に対する採血リマインドの有効性:電子カルテを用いた臨床試験プロトコル」， 第 3 回日本臨床疫学会年次学術大会（福岡）, 2019 年 9 月 28 日-29 日. 口頭発表

竹内正人，新川神奈，川上浩司. 2019. 「大規模健診データを用いた慢性腎臓病有病割合の推定」，第 3 回日本臨床疫学会年次学術大会（福岡）, 2019 年 9 月 28 日-29 日. 口頭発表

竹内正人，楠本修司，川上浩司. 2019.「TensorFlow/Keras を用いた川崎病治療反応予測モデルの開発」，第 3 回日本臨床疫学会年次学術大会（福岡）, 2019 年 9 月 28 日-29 日. 口頭発表

佐々木まどか，吉田都美，竹内正人，川上浩司. 2019.「妊娠中の母親の抗うつ薬使用と児の先天異常との関連：日本の診療報酬請求情報を用いた過去起点コホート研究」，第 3 回日本臨床疫学会年次学術大会（福岡）, 2019 年 9 月 28 日-29 日. 口頭発表

中嶌雅之，竹内正人，川上浩司. 2019. 「小児鼠径ヘルニアに対する腹腔鏡下手術と従来手術の治療成績の比較：過去起点コホート研究」，第 3 回日本臨床疫学会年次学術大会（福岡）, 2019 年 9 月 28 日-29 日. 口頭発表

米倉寛，亀井政孝，川上浩司. 2019. 「The overuse of preoperative haemostasis and ABO blood typing tests in children」，第 3 回日本臨床疫学会年次学術大会（福岡）, 2019 年 9 月 28 日-29 日. 口頭発表

Morio Aki, Tomotsugu Seki, Hirotsugu Kawashima, Tomotaka Miki, Shiro Tanaka, Koji Kawakami, and Toshi A. 2019. “Furukawa. Study protocol of electronic health record-nested pragmatic randomized controlled trial of reminder system for serum lithium level monitoring,” 12th Asian Conference for Pharmacoepidemiology,(Kyoto, Japan), 2019 年 10 月 11 日-13 日. 口頭発表

Jia Guan, Shiro Tanaka, Izumi Sato, and Koji Kawakami. 2019. “Estimation of healthcare costs for multiple myeloma in Japan using a nationwide claims database,” 12th Asian Conference for Pharmacoepidemiology,(Kyoto, Japan), 2019 年 10 月 11 日-13 日. 口頭発表

Lyu Ji, Satomi Yoshida, Keisuke Matsubayashi, and Koji Kawakami. 2019. “Trends and pattern of antibiotic prescriptions for adult outpatients with acute upper respiratory tract infections in Japan, 2008-2018,” 12th Asian Conference for Pharmacoepidemiology(Kyoto, Japan), 2019 年 10 月 11 日-13 日. 口頭発表

吉田都美，三品浩基，松林恵介，竹内正人，川上浩司. 2019. 「母体喫煙と受動喫煙がアレルギー疾患に与える影響：神戸市母子保健情報による疫学研究」，第 78 回日本公衆衛生学会総会（高知）, 2019 年 10 月 23 日-25 日. 口頭発表

Hirotaka Iwaki, Masaaki Tagawa, Kosuke Iwasaki, Koji Kawakami, and Masahiro Nomoto. 2019. “Comparison of Zonisamide with non-Levodopa, anti-Parkinson’s disease drugs in the incidence of Parkinson’s disease-relevant symptoms,” XXIV World Congress of Neurology,(Dubai, United Arab Emirates), 2019 年 10 月 27 日-31 日. 口頭発表

Siming Chen, Satomi Yoshida, Riki Matsumoto, Akio Ikeda, Koji Kawakami. 2019. “Prescription patterns of medications for newly diagnosed adult patients with partial epilepsy from 2006 to 2017: Degree of adherence to clinical guideline,” 第 53 回 日本てんかん学会学術集会（神戸）, 2019 年 10 月 31 日-11 月 2 日. 口頭発表

井出和希, 吉田都美, 尾板靖子, 川上浩司. 2019. 「健康情報の利活用・パーソナルヘルスレコードに対する認識と希望：全国 47 都道府県を対象とした質問紙調査」, 日本学校保健学会 第 66 回学術大会（東京都）, 2019 年 11 月 30 日. 口頭発表

吉田都美, 尾板靖子, 土田哲也, 川上浩司. 2019.「小学校 1 年時と中学校 3 年時の肥満およびやせとの関連：大規模学校健診情報を用いた疫学研究」, 第 66 回日本学校保健学会学術大会, 東京, 2019 年 11 月 29 日-12 月 1 日. 口頭発表

Nozomi Aoyama, Yosuke Onoue, Yuki Ueno, Hiroaki Natsukawa, Koji Koyamada. 2019. "User Evaluation of Group-in-a-Box Variants," In Proc. of IEEE PacificVis 2019 (Full paper), pp.127-136, 2019 年 4 月. 口頭発表

江原康生, 上辻智也, 鎌田穣, 小山田耕二. 2019.「心理カウンセリングにおける会話データを用いたクライエントの「認知の修正」の可視化に関する検討」, 第 47 回可視化情報シンポジウム講演論文集, 2019 年 7 月. 口頭発表

馬場一貴, 小山田耕二. 2019. "文書ベクトル間の類似度に基づくテキスト分類結果の可視化", 第 47 回可視化情報シンポジウム講演論文集, 2019 年 7 月.

ZHANG Chi, 小山田耕二. 2019. 「Folium を用いて漁獲量データ可視化システムの開発」, 第 47 回可視化情報シンポジウム, 2019 年 7 月. 口頭発表

LEI Puwen, 小山田耕二. 2019. 「LSTM に基づく水位予測モデルにおける動的パターン検出の可視化」, 第 47 回可視化情報シンポジウム, 2019 年 7 月. 口頭発表

YU Long, 小山田耕二. 2019. 「データ駆動型の偏微分方程式の導出」, 第 47 回可視化情報シンポジウム, 2019 年 7 月. 口頭発表

夏川浩明, 石野隼伍, 尾上洋介, 京田耕司, 大浪修一, 小山田耕二. 2019. 「表現型特徴―遺伝子ネットワークの横断的探索を支援する視覚的分析」, 第 47 回可視化情報シンポジウム, 2019 年 7 月. 口頭発表

八鳥孝志, 小山田耕二. 2019. 「機械学習を用いた冊子状構造体からの情報抽出」, 第 47 回可視化情報シンポジウム, 2019 年 7 月. 口頭発表

韓忠江, 小山田耕二. 2019. 「FCN に基づく三次元冊子体 CT データの可視化」, 第 47 回可視化情報シンポジウム, 2019 年 7 月. 口頭発表

王婷, 夏川浩明, 小山田耕二. 2019. 「Identification and Understaning about the Dynamical System」, 第 47 回可視化情報シンポジウム, 2019 年 7 月. 口頭発表

HU Kunqi, 小山田耕二. 2019. 「ヘリカル核融合炉における磁力線の可視化」, 第 47 回可視化情報シンポジウム, 2019 年 7 月. 口頭発表

尾上洋介,有本昂平, 夏川浩明, 小山田耕二. 2019. 「セマンティックエッジ束化を用いたグループ構造を持ったネットワークの可視化」, 第 47 回可視化情報シンポジウム, 2019 年 7 月. 口頭発表

WANG TING, 夏川浩明, 小山田耕二. 2019. "Visual Analytical System for Analyzing State-Transition in Dynamical Systems", 日本応用数理学会 2019 年度年会, 2019 年 9 月. 口頭発表

リュウ ウ, 小山田耕二, 坂本 尚久, 水野 翔太. 2019. "Data driven derivation of partial differential equations", 日本応用数理学会 2019 年度年会, 2019 年 9 月. 口頭発表

胡昆祁, 小山田耕二, 大谷寛明. 2019. 「ヘリカル核融合炉における磁力線の可視化」, 日本応用数理学会 2019 年度年会, 2019 年 9 月. 口頭発表

Hiroaki Natsukawa, Shungo Ishino, Yosuke Onoue, Koji Kyoda, Shuichi Onami, Koji Koyamada. 2019. "Explorative Visualization for Phenotypic-Genotypic Network," Proc. of IEEE Visualization 2019 (Poster), 2019 年 10 月. 口頭発表

Kunqi HU, Koji Koyamada, Hiroaki Ohtani. 2019. "Visualization of the magnetic field lines in a large helical device, " The 28th International Toki Conference on Plasma and Fusion Research, 2019 年 11 月. 口頭発表

Masaki Kamikubo, Katsumi Konishi, Koji Koyamada. 2019. "Multidimensional Signal Smoothing Algorithm based on Locally Low-Rank Approach," JSST2019, 2019 年 11 月. 口頭発表

夏川浩明, 石野隼伍, 尾上洋介, 京田耕司, 大浪修一, 小山田耕二. 2019. 「表現型特徴 - 遺伝子ネットワークの横断的探索を支援する可視化分析ツール」, 第 42 回日本分子生物学会年会 Workshop oral presentation & Poser presentation, 2019 年 12 月. 口頭発表

岩下直行. 2019. 「暗号資産（仮想通貨）における中国の動向」, APIR フォーラム「岐路に立つ中国経済：新常態と新経済」(大阪市), 2019 年 7 月 16 日. 口頭発表

中山健夫. 2019. 「診療ガイドラインの作成と活用：その現状と展望」, 日本形成外科学会総会（京王プラザホテル札幌）, 2019 年 5 月 17 日. 口頭発表

中山健夫. 2019. 「Shared Decision Making <SDM>とは何か：新しい医療コミュニケーションとして」, 日本小児循環器学会学術集会（札幌コンベンションセンター）, 2019 年 6 月 27 日. 口頭発表

中山健夫. 2019. 「パネルディスカッション:治療方針決定支援プロセスにおける多職種の役割- Shared Decision Making <SDM> の可能性」, 日本臨床腫瘍学会（国立京都国際会館）, 2019 年 7 月 18 日. 口頭発表

中山健夫. 2019. 「診療ガイドライン：エビデンスから意思決定へ 日本職業・災害医学会（ランチョンセミナー)」, 学術総合センター（一橋講堂）, 2019 年 11 月 9 日. 口頭発表

中山健夫. 2019. 「適塾セミナー：これからの医療における SDM の意義」, 第 14 回医療の質・安全学会学術集会（国立京都国際会館）, 2019 年 11 月 29 日. 口頭発表

中山健夫. 2019. 「大会企画シンポジウム I 我々は健康でなければならないのか〜いくつかの「問い」を通して〜」, 第 31 回日本生命倫理学会年次大会（東北大学川内キャンパス文科系総合講義棟）, 2019 年 12 月 7 日. 口頭発表

中山健夫. 2020.「会長講演」, 第 30 回日本疫学会学術総会(京都大学百周年時計台記念館大ホール), 2020 年 2 月 21 日. 口頭発表

大手信人. 2019. 「原子力災害による森林汚染と地域再生：森林生態学から復興知を考える」, 環境経済・政策学会 2019 年大会(福島市, 福島大学), 2019 年 9 月 29 日. 口頭発表

Egusa, T., Kumagai, T.o., Oda, T. and Ohte, N. 2019. “Quantifying the influence of bedrock groundwater discharge on spatial variation in stream C, N, and P concentrations in forest headwaters,” American Geophysical Union Fall Meeting 2019 年 12 月．口頭発表

Katsuyama, M., Ohte, N. and Kosugi, Y. 2019. “The Kiryu Experimental Watershed: 50-years forest dynamics and hydro-biogeochemical studies in Central Japan,” American Geophysical Union Fall Meeting, 2019 年 12 月．口頭発表

Oda, T., Band, L.E., Green, M.B., Scanlon, T.M., Sebestyen, S.D., McGuire, K.J., Adams, M.B., Katsuyama, M., Shimizu, T., Urakawa, R. Fukuzawa, K., and Ohte, N. 2019. “Streamflow response and recovery after forest disturbance in different climates,” American Geophysical Union Fall Meeting 2019 年 12 月．口頭発表

Ohte, N. and Katsuyama, M. 2019. “Implications of the difference in seasonal variations of nitrate discharge from the temperate forest ecosystems between monsoon and non-monsoon zones,” American Geophysical Union Fall Meeting, 2019 年 12 月．口頭発表

Ohte, N. and Shibata, H. 2019. “Introduction to the JaLTER Network catchment studies,” American Geophysical Union Fall Meeting, 2019 年 12 月．口頭発表

川井拓哉，大手信人，二瓶直登，小田智基，和田敏裕．2020．「森林流域からの放射性 Cs 流出機構に関する研究」，第 131 回日本森林学会, 2020 年 3 月 27 日．口頭発表

関根仁博. 2019．「ながはまプロジェクトにおける健康・医療情報と社会経済情報を活用した文理融合研究」，第 92 回 CAPS 研究会, 2019 年 5 月．口頭発表

関根仁博. 2019．「ソーシャル・キャピタルと健康-生命科学と社会科学の統合データセットの構築・活用-」，第 93 回 CAPS 研究会, 2019 年 12 月．口頭発表

関根仁博．2019．「生命科学と社会科学の新たな文理融合研究と統合データセット構築に関する調査研究」，新技術振興渡辺記念会成果報告会, 2019 年 12 月．口頭発表

祐野恵. 2019．「小中学校における健康診断情報の可視化に関する政策決定要因の分析：取組の採否を決定する要因」，第 12 回日本公共政策学会関西支部大会（神戸）, 2019 年 9 月 28 日．口頭発表

社会活動（講演会・展示会などのアウトリーチ活動等）

川上浩司. 2019．講演，「医療リアルワールドデータの選択と活用」， eyeforpharma2019 Japan（東京），2019 年 5 月 23 日．

祐野恵，森田朗，平川秀幸，井出和希，川上浩司．2020．シンポジスト，「自治体が保有する健康情報の活用と政策立案に関する期待と課題」，第 2 回政策のための科学オープンフォーラム「科学による政策課題解決」セッション 1（政策研究大学院大学）, 2020 年 1 月 15 日．

祐野恵，森田朗，平川秀幸，井出和希，川上浩司．2020．ポスター発表，「自治体が持つ学校健診情報の可視化とその利用に向けての基盤構築」（政策研究大学院大学）, 2020 年 1 月 15 日．

Koji Koyamada. 2019．招待講演, “Inductive PDE derivation from big data,” Pusan National University, 2019 年 9 月．

Koji Koyamada. 2019．招待講演, ”Computer Aided Engineering, VizAfrica Summer School 2019,” 2019 年 11 月．

Koji Koyamada. 2019. 招待講演, “Meteorological impact assessment to flood disaster by visual analysis technology,” VizAfrica2019, 2019 年 11 月.

小山田耕二. 2019. 招待講演,「企業の技術力広報に寄与する技術特許」, 関西 CAE 懇話会, 2019 年 11 月.

カール・ベッカー. 2019. 基調講演,「Death is NOT the End」, 主催者：Association for Death Education and Counseling（Atlanta, GA）, 2019 年 4 月 10 日.

カール・ベッカー. 2019. 基調講演,「What we can learn from Japan and Why」, 主催者：Kennesaw State University（Atlanta, GA）, 2019 年 4 月 16 日.

カール・ベッカー. 2019. 基調講演,「お寺離れの時代における僧侶の役割」, 主催者：本隆寺（京都）, 2019 年 6 月 1 日.

カール・ベッカー. 2019. 基調講演,「尊厳ある生を支援するーSOC, ACP, EOL-」, 主催者：日本赤十字看護学会, 東京, 2019 年 6 月 16 日.

カール・ベッカー. 2019. 招聘講演,「日本人の死生観にふさわしい葬儀とは」, 主催者：フューネラルフェア 2019（横浜）, 2019 年 6 月 17 日.

カール・ベッカー. 2019. 基調講演,「Death, Dying, Bereavement, and End of Life Care」, 主催者：Cruse Bereavement Care, Birmingham, UK, 2019 年 7 月 5 日.

中山健夫. 2019. 講演,「医療ビッグデータコンソーシアム提言策定部会」, 日本橋ライフサイエンスビル, 2019 年 5 月 22 日.

中山健夫. 2019. 講演,「診療ガイドラインのこれまで・これから」, 日本医学会研究倫理教育研修会, 日本医師会館大講堂, 2019 年 5 月 30 日.

中山健夫. 2019. 講演,「患者さんと医療者が協力して病気に向き合うために：シェアード・ディシジョンメイキング〈SDM〉の意味」, 関節リウマチ市民公開講座（宮日会館 宮日ホール）, 2019 年 7 月 7 日.

中山健夫. 2019. 講演,「日本で利用可能な DB の応用事例と課題－MID-NET、民間 DB はどのような課題に適しているか、バリデーションをどう行うか－」, レギュラトリーサイエンス財団「安全性監視計画入門コース」（長井記念ホール）, 2019 年 7 月 19 日.

中山健夫. 2019. 講演,「メディカルヒューマニティーズとは何か？」, Innovation and Communication for Global Health Care: Medical Humanities フォーラム（京都大学医学部芝蘭会館稲盛ホール）, 2019 年 9 月 6 日.

中山健夫. 2019. 講演,「HPH ワークショップ 研究 WS：研究計画を作ろう」, 東京 TOC 有明, 2019 年 11 月 10 日.

中山健夫. 2019. 講演, ”Reconsidering "Real World Data,” DIA Japa（東京ビッグサイト）, 2019 年 11 月 12 日.

中山健夫. 2019. 講演, “From evidence via communication to decision making,” DIA Japan（東京ビッグサイト）, 2019 年 11 月 12 日.

中山健夫. 2020. 講演,「医薬品開発及び製造販売後調査・研究における医療ビックデータの実践的利用法を考える」, 日本薬学会　レギュラトリーサイエンス部会 / 第 16 回医薬品レギュラトリーサイエンスフォーラム（長井記念ホール）, 2020 年 1 月 10 日.

中山健夫. 2020. 講演,「私たちが「診療ガイドライン」を通して目指すもの」, Minds フォーラム（東京国際フォーラム）, 2020 年 2 月 8 日.

大手信人. 2020. 講演,「森林生態系の放射能汚染の現状と課題」, 公開シンポジウム「福島の森里川海の今～放射能問題からウナギ・カレイの新発見まで～」（京都）, 主催［福島大学環境放射能研究所］, 2020 年 1 月 24 日.

大手信人. 2020. 講演,「森と水と生き物と放射能」, 時の封 2120, ふくしま浜通り・アートミュージアム＆ラボ事業（福島県双葉郡広野町）, 主催［NPO 法人広野わいわいプロジェクト］,2020 年 2 月.

Naoyuki Iwashita. 2019. 基調講演, “keynote speech, Fintech : Building the Future of Financial Systems, T20 Summit 2019 in Tokyo(Think20)”, The research and policy advice network for the G20, 2019 年 5 月 26 日.

広井良典. 2019. 基調講演, 「ケアの科学と政策」, 日本看護研究学会第 45 回学術集会(大阪国際会議場), 2019 年 8 月 21 日.

広井良典. 2019. 基調講演, 「人口減少社会とコミュニティの未来」, 第 26 回日本産業精神保健学会特別講演（東海大学高輪キャンパス）, 2019 年 8 月 30 日.

広井良典. 2019. 講演,「ＡＩを活用した政策提言と高等教育の未来」, 第 23 回全学教育シンポジウム（京都大学桂キャンパス）, 2019 年 9 月 20 日.

広井良典. 2019. 基調講演, 「生と死のグラデーション――「わたしの死」と死生観」, 第 25 回日本臨床死生学会年次大会（国立がん研究センター新研究棟）, 2019 年 9 月 22 日.

広井良典. 2019. 講演, 「日本の地方自治体における幸福政策の展開と課題」, 韓国・幸福実現地方政府協議会創立 1 周年記念シンポジウム（韓国全州市）, 2019 年 10 月 17 日.

Yoshinori Hiroi. 2019. 講演, “Will Japan be Sustainable towards 2050? : Implications from AI-based Analysis,” UCL-Japan Grand Challenge Symposium(University College London), 2019 年 11 月 5 日.

広井良典. 2020. 基調講演, 「AI を活用した社会構想と政策提言」, 第 2 回政策のための科学オープンフォーラム「科学による政策課題解決」（政策研究大学院大学)）, 2020 年 1 月 15 日.

宮野公樹. 2019. 基調講演, 「学問の避難所」, 第 15 回 学術情報ソリューションセミナー 2019 in TOKYO＆OSAKA, 2019 年 6 月 18,28 日.

宮野公樹. 2019. 招待講演, 「異分野融合のダイナミクス」（熊本大学）, 2019 年 8 月 20 日.

宮野公樹, 井出和希. 2019. ブース展示,「勉強思考、研究志向、学問思考」. 京都大学アカデミックデイ 2019（京都府）, 2019 年 9 月 15 日.

宮野公樹. 2019. 基調講演, 「学際のメッカ」, ほとんど 0 円大学 WEB メディア, 2019 年 9 月 16 日.

宮野公樹. 2019. 記事掲載, 京大 100 人論文」, 読売新聞（全国版夕刊）, 2019 年 9 月 17 日.

宮野公樹. 2019. 基調講演, 「異分野融合の本質」, Nerd Nite Kansai, 2019 年 9 月 18 日.

宮野公樹. 2019. 記事掲載, 「学問の「根源的問い」巡り異分野融合」, 朝日新聞デジタル, 2019 年 9 月 24 日.

宮野公樹. 2019. 記事掲載, 「研究者の頭の中をのぞき込む」, JST サイエンスポータルおよび Yahoo ニュース, 2019 年 10 月 2 日.

宮野公樹. 2019. 基調講演, 「異分野融合研究」, 研究大学コンソーシアム, 2019 年 10 月 18 日.

宮野公樹. 2019. 基調講演および記事掲載,「100 人論文：広島大でも成果」, 広島新聞, 2019 年 12 月 24 日

宮野公樹. 2019. 招待講演, 「異分野融合のダイナミクス」, 第二回 京都芸術と科学の研究会（京都市立芸術大学 大学会館交流室）, 2019 年 12 月 12 日.

宮野公樹. 2019. 記事掲載, 「定例異分野交流会「京都の大学、全員集合！」大盛況で幕」, 大学ジャーナル, 2019 年 12 月 26 日.

井出和希. 2019.ブース展示,「研究（者）倫理の今：ハゲタカって何？」. 京都大学アカデミックデイ 2019（京都府）, 2019 年 9 月 15 日.

井出和希. 2019. 講演[ワークショップ],「臨床研究計画前に Research Question からシノプシスを作成しようー失敗しない臨床研究計画立案に向けてー」, 第 29 回日本医療薬学会年会（日本臨床疫学会共催）（福岡県）, 2019 年 11 月 3 日.

祐野恵. 2019. 司会, 共通論題セッション 2「医療と公共政策」, 第 12 回日本公共政策学会関西支部大会（神戸）, 2019 年 9 月 28 日.

祐野恵. 2019. ポスター発表,「EBPM V.S. POLITICS 自治体が保有する情報の活用」, 京都大学 ELP 異分野研究者交流会（京都）, 2019 年 10 月 26 日.

祐野恵. 2020. シンポジスト, 第 2 回政策のための科学オープンフォーラム「科学による政策課題解決」セッション 5（政策研究大学院大学）, 2020 年 1 月 15 日.

大阪大学・京都大学
公共圏における科学技術
活動報告 2019

2020年7月31日発行

編集・発行　公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
〒560-0043　大阪府豊中市待兼山町1 - 16
TEL　06 - 6850 - 6111（大阪大学代表）
URL　http://stips.jp/
E-mail　stips-info@cscd.osaka-u.ac.jp

STiPS 公共圏における
科学技術・教育研究拠点（STiPS）
Program for Education and Research on
Science and Technology in Public Sphere [STiPS]